

入道、嚴島へ渡海し、海上の運送を停め、諸所へ手を配り働くに於ては、當方の不自由は申すも更らなり、糧米の入津なきに於ては、愈々絶體絶命と成る可く、其の豫防として、態と新城を嚴島に構へたる旨を、中外に宣傳せしめた。

晴賢元就の術中に陥りて嚴島に渡る

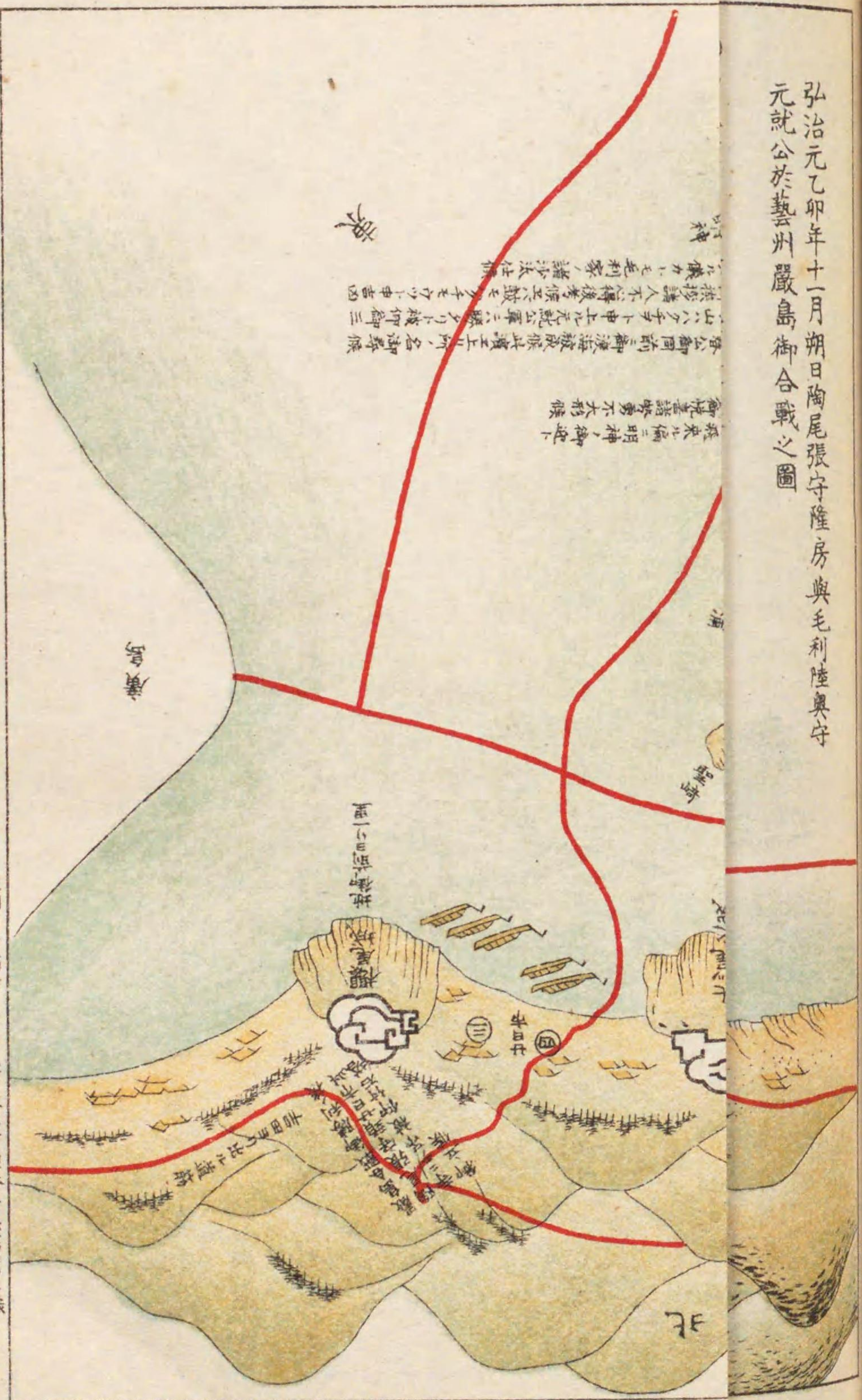
されば老猾なる晴賢も、甘くも元就の術中に陥り、彌々渡海の心を起した。弘中三河守は、其の不可を諫止した。然も元就は更らに桂元澄に囑して、内通書を晴賢に送らしめた。曰く、若し御渡海あるに於ては、元就も渡海す可し。左なくば兵船を集め、船軍致す可し。彼が陸地を離るゝと與に、某吉田の本城を攻め取り申す可しと。此に於て陶晴賢は、弘治元年九月下旬、豊筑防長四個國の兵二萬を率ゐ、兵船數百艘、舳艫相銜んで嚴島に渡つた。

元就と嚴島願文

豫て神佛の信仰深く、特に嚴島を崇敬したる元就は、出師に先ち、志道源藏を社人に扮し、嚴島に抵り、私かに願文を捧げしめた。

夫以嚴島大明神者、本地大慈大悲之觀世音菩薩也。元就謹而所奉、祈之發願者、蒙朝敵追伐之勅命、斧鉞之前、卒臥病席、當敵武運已微也。嗚呼冀者、今在大慈大

弘治元乙卯年十一月朔日陶尾張守隆房與毛利陸奥守元就公於藝州嚴島御合戰之圖

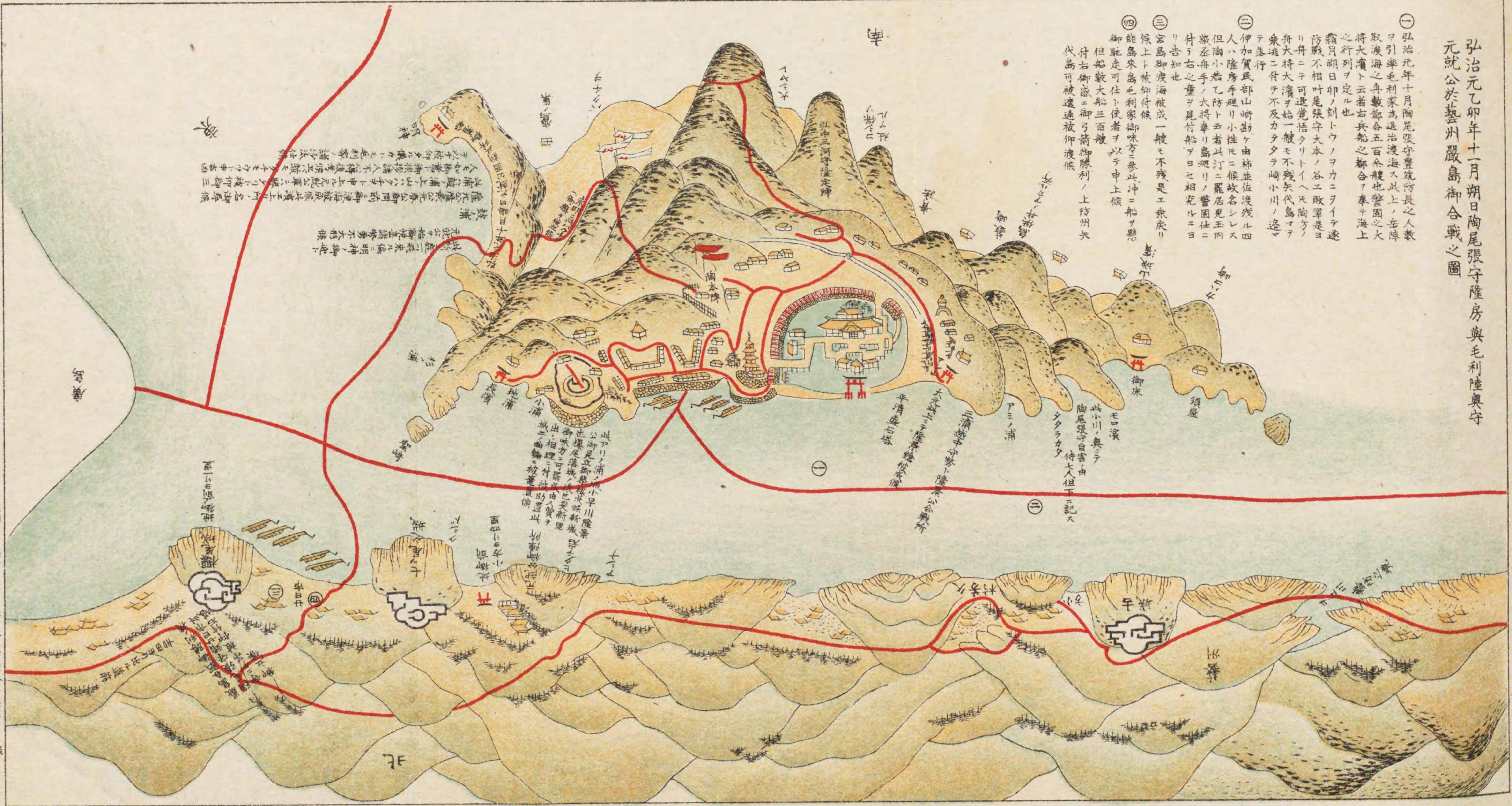


原圖周防防村上藤助氏所藏史料編纂掛横國に據る

蒙朝敵追伐之勅命斧鉞之前卒臥病席當敵武運已微也嗚呼冀者今在大慈大

弘治元乙卯年十一月朔日陶尾張守隆房與毛利陸奥守元就公於藝州嚴島御合戰之圖

- ① 弘治元年十月陶尾張守隆房長之人數ヲ引率毛利家為遠泊渡海此上ノ岳障取渡海之舟數都合五百餘艘也警固之大將大濱ト云者右兵船之都合ヲ奉テ海上之行列ヲ定ル也
- ② 霜月朔日卯刻トウノカニヲイテ遠防戰不相叶是張守大本ノ谷ニ敗軍是ヨリ舟ニテ可退覺悟タリトイヘ氏陶方ノ舟大將大濱ヲ始一艘モ不殘矢代島マテ棄道ニ付テ不及カタタテ崎小川ノ邊マテ發行
- ③ 伊加賀民部山崎勤々由柿並佐渡殘ル四人ハ陸房手廻リ小姓氏ニ候改名シレス但陶小若乙防ト云者此汀ニ罷居見玉内藏丞舟手ノ大將奉リ島廻リノ警固仕ニ付テ右之重ヲ見付船ヲヨセ相克ルニヨリ吉知也
- ④ 宮島御渡海被成一艘モ不殘是工乘戻リ候上ト被仰付候
- ⑤ 能島米高毛利家御味方ニ奉此沖ニ船ヲ懸御馳走可仕ト使者ヲ以テ申上候
- ⑥ 但船數大船三百艘
- ⑦ 付右御意ニ御弓筒御勝利ノ上坊州大代島可被遠速被仰渡候



原圖防圖村上系吟氏所藏又稱繪圖掛圖に據

悲誓一願爲本復。苟元就汲平城桓武之二流。生神明擁護之門。扇垂光利生之德。于茲有多々羅之家。累代臣謂陶者。橫振猛威。剽殺其主。蔓入逆罪。葛藟相連。動國殘賊。民渠積惡。誰豈不惡之矣。愚息隆元。雖爲厄弱。依綸命發義兵。欲斷根。拽葉。神者不稟非禮。與正義所仰天誅也。伏乞有悲歎之感應。當社造營。可超過清盛志者也。

弘治元年十月廿八日

大江元就敬白〔吉田物語、溫故私記〕

願文の眞偽如何

信長の桶狭間の役に於ける、熱田神宮の願文は、小瀬甫庵の擬作とも、或は贋作とも云ふ可きであつたが、此の願文は、正しく元就の願文であらう乎。將た是れも亦た後人の偽作であらう乎。

神佛迄にも外交的
用文句を使

彼は速かに陶賊退治の勅命を執行す可きであつたが、病氣にて、已むを得ず延引した、願くは御利益にて、速かに本復せしめ給へと云うて居る。此れで見れば、彼が三年有半、陶賊の幕下となりて働いたのは、彼の病氣の爲めと云ふ意味になる。果して然らば、彼は神や佛に迄も外交的文句を使用して居る。願文中に、隆

元を援き來りたるは、元就は當時隱居で、隆元が當主であつたからであらう。戰勝の上は、嚴島の大檀越清盛入道以上に、當社造營の志を遂ぐ可しとて、嚴島大明神に油を掛けて居る。

此の願文は全く後人の偽作

惟ふに是れ亦た元就の意中を忖度したる、後人の偽作であらう。最も怪しむ可きは、彼父子は、未だ陶賊退治の勅命を奉じた事もなく、綸旨を受けた事もない、既に此事が無ければ、願文の骨組は、全く毀れたのぢや。若し眞に此事あつたとすれば、洞春公(元就)略譜、及び常榮公(隆元)略譜には、必らず記載せらる可きである。然るに更らに一字一句の、此に言及せざるを見れば、勅命、綸旨は、全く後人の假託と斷せねばならぬ。

【六七】 嚴島合戦

元就諸軍に發船の命を下す

元就は陶が嚴島に赴いたのを見濟まし、其の對岸草津に陣を進めた。而して十月二十八日、更らに草津より西方三里の地御前火立山に陣を移し、小荷駄人夫、若輩の草履取、老人等は其の翌日、再び草津に還らしめた。陶晴賢は、元就の兵の寡少を見て、能く爲すなきを見縊つた。元就は敵の油斷を見透かし、且つ伊豫の能島、村上等水軍の來援を得、愈々十月晦日の夜、(略譜には九月晦夜とある)諸軍に發船の命を下した。

總勢上下共に、柵の木一本、繩一房、可持之三日の飯米を腰に著、左繩のたすき二つ巻、合言葉は勝と問ば勝と可答、總船にはかゞり焼べからず。御座船の火を目當に仕り可渡海。(吉田物語)

隆元留守の命に應ずるに前住す

元就は隆元に向て、後圖の爲めに、獨り留らんとを命じた。御自分には陸に残られ候へ、宮の御一戰に、御打死被遊候は、何とぞ後手の御弓矢成立候様に被遊、御家をたもたれ候様にと被仰渡候。御請に元就公御残り被遊候とても、渡海仕候者共、悉く討死仕候ては、被思召候様に、御弓矢成

立申間敷候。まして私残り居申候儀、存寄も無御座候と被仰上、御具足の御上おび帯の端を御切被成、二度御結び不おび被遊御覺悟にて、御先へ御乗船被遊候。隆元公の御覺悟を見候て、御手廻衆、其外の者共も、千死を極め、乗船仕候。〔吉田物語〕常榮公略譜にも、『乃斷帶端、示不復結、先衆乘艦、於是將士、皆分必死。』とある。彼は不幸短命にして逝いたから、其名は同胞なる兩川—吉川—小早川—の爲めに掩はれたが、彼も亦た元就の長子たるを辱しめざる佳兒であつた。

佳兒隆元

全軍必死の覺悟

船は風雨を衝いて發した。而して中途より風波和ぎ、嚴島の西、鼓ノ浦に到着した。元就は全軍の必死を覺悟し、悉く其の船を對岸に還らしめた。船手方の面々胥あひ議し、竊かに元就の座船一隻を、隠し置き、他は悉く漕ぎ戻らしめた。而して博尾崎より、横山に上つた。

小早川隆景の上陸

大手に向ひたる小早川隆景は、艦の警備の怠弛に乗じ、其中を盪ぎぬけ、偶々敵艦より誰何する者あれば、此れは筑前の宗像、秋月より加勢兵として、罷り上りたる人數にて候と答へつゝ、大鳥井の邊より徐々と上陸した。而して能島、村上

の兵船は、嚴島と、藝州本土との間に遊弋して、敵の水軍に備へた。

直下晴賢の本營に薄る

十一月朔日は曉けた。元就は時分をはからひ、螺を吹かせ、鯨波を揚げ、直下して晴賢の本營、塔岡の營に薄つた。彼等は曉夢尙ほ濃こまやかであつた。此方は必死の軍、彼方は寢耳に水の大狼狽にて、何れも大雪崩を打て潰え、争うて船に飛び乗り、逃げ出した。而して概ね皆な大野ノ瀬戸にて、能島、村上等の水軍に殄滅せられた。

晴賢遂に自殺

晴賢は殘兵を收容して、一戦せんとするも、逃げ足立ちたる兵共、固より之を聞く可くもあらず。互ひに相ひ踏藉して、溺死する者數千人であつた。晴賢も詮すべなく、所々打ち廻り、大江浦にて、船を尋ねたれども、一隻も見當らず。今は此迄なりと、相從ふ伊香賀、垣並、山崎等と與に、自殺した。從者は其首を朽葉の裕に包み、山中の岩の間に隠し置いた。而して漸く十一月五日に、此を發見するを得た。

戦勝後嚴島と善後

此の戦争には、吉川、小早川の兄弟も、頗る武功を顯はした。陶方なる三浦房清、弘中三河守等も、善く防戦したが、遂ひに吉川等の爲めに討死した。弘治元年十一月朔日、午前六時に始まり、午後二時に終つた。敵を打捕りたる數、四千七百八十

餘人とある。元就は同月十一日迄、嚴島に在陣し、死屍は勿論、手負者も船にて、悉く對岸の陸に送り、血流れたる土をば、悉く削り去り、社壇、廻廊迄、悉く潮にて洗ひ淨め、朔日より七日迄、御神樂又は龍頭會利の舞を執行し、其後敵方供養の爲め、萬部經を轉讀せしめた。

元就は嚴島の神聖を穢がしたることを、中心より悔恨したるかの如く、戦後には極力其の後を善せんことを勗めた。而して十一月二十日、藝州廿日市櫻尾城に於て、陶晴賢の首實檢の式を行ひ、勝鬨を擧げた。〔溫故私記〕

櫻尾城にて首實檢

陶入道嚴島渡海並合戦の事

陶晴賢軍評定の後、嚴島に渡す

陶尾張守晴賢入道全蓋は、毛利元就を退治せんとて、弘治元年九月五日、防州山口を打立つ。相従ふ侍には、大和伊豆守興武、陶安房守隆信、杉民部大輔重光、弘中參河守隆兼、同中務大輔隆助、宮左衛門尉、岡田掃部助、重見因幡守、羽仁越中守、同將監、三浦越中守以下、〔虫入〕万餘騎、同國岩國に到りて、永興寺に陣を取りて、軍議評定す。陶入道は、先づ嚴島へ渡りて、元就が、さしも地の利を得たりと思ひて、築きし城を攻取んと

陶方に鐵砲六七挺

いひければ、弘中參河守が曰く、先づ二十日市の櫻尾、草津の城を攻落し、夫より吉田へ發向然るべし、元就小勢なる故、死地に於て、安否を一戦に決せん爲め、嚴島の城を築きしものなりと、再三いひければ、陶入道承引せず。九月十六日、七百餘艘の兵船に取乗りて、終に嚴島に渡海す。〔頭書〕此時警固大將弘中參河守は、全蓋淺智にして、元就の謀の中に陥らんと知り乍ら、力及ばず、二日後れて渡海したり。陶入道は、塔の岡に本陣を居ゑて、三浦越中守等に、有の浦の城を攻めさせれば、三浦手勢三百餘人にて、最初に仕寄を付けて、押寄せれば、大和伊豆守、羽仁越中守、次第に陣を寄せ、備堅固に構へたり。城兵遁るべき方なければ、死を一途に定めて防戦す。此時迄は、鐵砲世に周からず、寄手には六七挺もありて、放ち懸けしかば、是に城中迷惑して、此由吉田へ注進ありければ、毛利元就、嫡子備中守隆元、二男吉川治部少輔元春、三男小早川左衛門佐隆景、其外國侍には熊谷伊豆守信直、同嫡子兵庫助、同左馬助、同右近大夫、同兵部少輔、天野紀伊守隆重父子、阿曾沼豐後守、三須筑前守、出羽中務、飯田七郎右衛門、遠藤左京亮、桑原藤左衛門、香川左衛門尉、同淡路守、同左馬助、山田出雲守、同左衛門大夫、山縣筑後守、福島三郎左衛門、並に毛利家譜第の侍、福島左近將監、志道上野介、口羽下野守、兒玉三郎右衛門、粟屋掃部助、同縫殿允、同右京亮、渡邊太郎左衛門、同飛驒守、赤川十郎左衛門、同左京亮、國司以下、都合三千五百餘騎を率ゐて、九月下旬、嚴島の向地の御前の火立岩に陣を取らる。

勝軍靈夢
島の謀と能
軍の來島能
の加船能

毛利方の
偵察能く
行届く

此時尖戸安藝守隆家に、吉田の留守を預けらるゝに依つて、深瀬彈正を、元就に従はしむ。陶大勢なれば、勝敗如何と、諸軍思ひ煩ふ處に、熊谷伊豆守、嚴島の神主に賄して、此度の合戦、毛利家勝利を得べき由、靈夢を蒙りたりと告げ來るべしと、竊に頼みたり。此時伊豫國の能島掃部助武吉(頭書)關西記來島通康、此兩島、船軍に術を得たれば、味方に屬せしむる様にと、元就、隆景に命ぜらるれば、隆景、則ち家人有田加賀守を遣して、之を招かる。陶入道も同じく文を以て、加勢を乞ふと雖も、兩島、毛利家へ興すべしと評議して、村上右近大夫、因島新藏人兩人、相共に數十艘の兵船に乗りて、有田一同に漕ぎ來る。兩陣之を見て、何方へ船を寄すべきと、目も放たざる處に、終に兩島、二十日市の沖に碇を下したれば、藝陽勢悦び合へり。則ち兩島へ、謝詞を述べられん爲め、元就よりは、兒玉三郎右衛門、元春より二宮木工助、隆景より浦兵部を、伊豫船に遣して、其後三家對面せらる。又防州大島の桑原入道一族は、皆陶に隨ひて、嚴島へ渡ると雖も、其身は毛利家に興す。斯くて元就、嚴島の安否を見て歸るべしとて、同廿七日、能島、來島に、浦兵部、赤川十郎左衛門尉に、二百餘人を添へて差渡さる。此時浦兵部は、毛利家海上の役なる故、兩島に言斷りて、先手に進みたり。陶方大演、桑原、宇賀島の海賊船、城中へ入れずと遮り攻むると雖も、兩島、浦、赤川、之を追拂ひて城へ入り、城中の體、又は陶が陣所の構、委しく見て歸る。彼者共、嚴島

合戦は十
月朔日と
極まる

の體、今一兩日後詰延引に於ては、籠城叶ふまじと申すに依つて、則ち元就、小早川隆景に、熊谷伊豆守父子を相附け、浦兵部を案内者として、同廿八日の夜、有の浦の城に差籠めらる。弘中參河守隆兼、陶が前に出で、明日未、明に城を乗取るべし。城落ちば、元就如何に思ふとも、叶ふまじといへども、陶用ひずして、城乗は來る朔日と議定す。九月晦日、元就父子三人相議して、明朔日、嚴島に於て、陶と無二の合戦を遂ぐべしと極められ、諸士に下知を傳へて、相詞相印を定め、三日の兵糧を腰に付けさせ、柵の木一本、繩十尋づゝ持たせらる。地の御前の陣所には、前々に相變らず、箒を焚かせ、諸士の船には、箒を焚くべからずと謀を定め、九月朔日酉の刻に、諸軍一同に船に乘らる。(頭書)相印を焚くべからずと謀を定め、九月朔日酉の刻に、諸軍一同に船に乘らる。(頭書)相印勝々。詞然る處に、風雨烈しくて、海上穩ならざれば、船頭共、渡海叶ひ難き由いへば、元就、此風雨にこそ、敵も油斷すべけれ、不意に懸つて切崩すべし。急ぎ船を出すべしと命ぜられて、則ち漕出せば、風雨も漸く靜まりたり。斯くて諸船、包の浦に漕著くれば、爰にて父子三人相議して、船悉く地の御前に漕戻させらる。頓て其黎明に、吉川元春、先陣として新庄勢八百餘人先に進み、聲を揚げ坂を登れば、自ら関と聞ゆ。弘中參河守博奕尾に陣取りたるが、爰にての合戦悪しかるべしとて、大和伊豆守、三浦越中守に謀じ合せて、陶が本陣塔の岡へ相集る。藝州勢是をば知らず、鯨波を揚げて、弘中參河守が陣へ押寄せれば、敵一人もなし、さらば、陶が本陣へ寄せよとて、塔の岡に押寄せ

元就の
前に明神
御使の
鹿來る

愈々大
合戦と
なる

する。

(頭書)元就、船より上らるゝと、鹿一匹其前へ來る。元就是れ則ち明神より、迎へ給ふらんといはる。父子三人一所に居て、篝火かせらる。其時元就、此度の弓矢に勝ちたりといはる。隆元、元春御意の如く、思召の儘、勝利を得られたる由挨拶せらる。其後、船を二十日市へ戻さる。其時元就の命に、船地へ著せば、地の御前大野、久波表へ罷出で、幾千万となく篝火を焚くべしと、相觸れ申通ずべしと言含めらる。之に依つて彼表に、螢を散らすが如く、篝火しく見えたり。能島來島は、浦々を廻り、稠しく警固す。彼包の浦には、水あるべしと、元就思はれて、諸勢へ、敵前に大山を越すの間、名々手拭を水に浸し、□(虫入)すべし由下知せらる。諸士峯へ□(虫入)登る時は、喉乾き息も繼ぎ難し。此時彼手拭の水を、口へ絞り入れたり。

陶大軍なれども、諸陣夜中に俄に集りたるに依りて、備しざるなり。殊に所は狭し、駈引自由ならず。之を見て毛利方の將、自ら手を碎きて、攻付けらるれば、陶方、一度に崩れて逃退く。全蓋采配を取つて、味方を恥しめ下知すれども、聞入れず。船を求めて落行き、大勢船に込乗りて、乘沈め、溺死する者もあり、乗後れて、浦傳に逃行くもあり、弘中參河守、同中務蹈留りて、瀧の小路を後に當て、五百計りに控へたり。吉川元春一番に追駈けらる。弘中父子、死を一途に定めて、切つて懸れば、吉川勢切立てられ、十四五間引退く。元春槍を掲げ、士卒を下知し、駈出でらるれば、味方又取つて返し、命を際まわと

陶入道討
死の覺悟

相戦ふ處に、柳小路より、青景、波多野、町野等三百計りにて、横合に突いて懸る。吉川勢危く見えし處に、熊谷伊豆守信直、天野紀伊守隆重、馳合せて切懸れば、青景波多野等終に叶はず退きたり。弘中は、瀧小路の左右へ火を懸け、其紛れに、上ノ山へ退き登る。元春、神殿に、火や懸るべきと氣遣ありて、早速其火を消させらる。隆元の備へ、陶勢五百計り、返し合せ相戦ふ。之に依つて元就より、福原左近將監、兒玉内藏允、粟屋與十郎以下三百計り、加勢せらるれば、陶勢忽ち崩れ引く。此時毛利勢内藤河内、永井右衛門大夫、比類なく相働き、粟屋又次郎討死す。陶入道は、爰にて討死すべしとて、落殘る兵を集め控へたる處に、三浦越中守、如何にもして山口へ引取り、重ねて勢を催さるべし。某殿し討死せん。其間に船を求めて乗らるべしと勸むれば、全蓋さらばとて、船を尋ねて落行くと雖も、何れの浦にも船なければ、途方に暮れてぞみたり。小早川隆景は、陶入道が退口を大木の谷迄慕ひ追はるゝ處に、谷陰より羽仁越中、同將監と名乗り、三十餘人切つて出づれば、其邊に隠れ居ける陶方の兵五百餘人、馳加はりて、切つて懸る。隆景の兵駈惱まされて一度に引退けば、吉川元春之を見て、旗を押直し駈合せらるれば、小早川勢も取つて返し戦へば、又石州出羽中務も、扶け來りて相戦ひ、羽仁兄弟を、出羽が手へ討取れば、殘卒悉く逃行くを、三家の勢並に出羽が手の者共數十人追討したり。吉田勢には、庄原兵部少輔、桂善左衛門、福原宗右衛門、同左京、佐藤宗右衛門、中原善左衛門、坪井將監、兒玉四郎兵衛、波多野源兵衛、(頭書)天文十二年雲州退志

陶方の三浦越中守隆景の討死す

道源藏、渡邊甚右衛門、吉川勢には二宮木工助、森脇市郎右衛門、山縣四郎右衛門、粟屋參河守、同伯耆守等分捕したり。天野紀伊守、同中務も、數多追討する處に、陶が郎黨手島清左衛門と名乗りたるを、中務討取りたり。小早川隆景は、此戰の半ば羽仁等が勢をば差捨て、彌々陶が退口を附送らる。三浦越中守は、陶入道が後を押へて、引退くと雖も、船なき故、青海苔といふ所の岨路に控へて、追懸くる敵を待ち居たり。隆景二三百計りにて駈來らるれば、三浦待受けて切つて懸る。隆景も自身槍を取つて馳向はる。赤川左京亮、越中守に渡り合、暫く相働きて勝負付かず。其間に三浦が勢、隆景を目に懸け切懸る。隆景既に危き處に、家人草井市之丞、山縣勘次郎、内海市郎、南勘兵衛、井上一忠等、駈隔て防戦す。草井市之丞、手を負ひて伏し居たるに、赤川、三浦、其邊にて切合ひければ、草井倒れ乍ら、越中守が足を捕へて引付けしかば、三浦草井を切殺したり。三浦が者、彌々稠しく攻付くれば、山縣勘次郎、内海市郎、南勘兵衛、井上一忠、枕を並べて討死す。此隙に隆景は、赤川左京を連れて敵離れせられたり。隆景難儀の通元春へ告げ來れば、即時に駈付け、切つて懸らる。吉川勢、粟屋源藏、清長新三郎、樋口彦三郎、二宮木工助、同七郎兵衛、井尻又右衛門、高彌三郎、吉田勢には内藤内藏允、駈合ひ、相戦ひけるが、吉川勢、清長三郎、深手負ひ、樋口彦三郎討死す。三浦が兵悉く討死して、越中守只一人休み居けるを、内藤内藏允と高彌三郎と、同じく射る二つの矢、中りければ、薄手なれば、三浦事ともせず、槍を取上ぐる處へ、二宮木工助渡り合ひ、暫く突合ひ

毛利方の大和伊豆守を捕る

けるが、三浦が左の脇より肩先へ突貫き倒れけるを、井尻又右衛門、首取らんと取つて押へけるが、片岨なる所を蹈外して、下の谷へ落ちければ、内藤内藏允下合ひて、三浦が首を討取りたり。大和伊豆守は、手勢七十餘人にて、度々取つて返しけるが、所々にて過半討死して、纔に十餘人になり退く處に、香川左衛門尉光景、追駈けたり。大和香川は、日來知りたる中なるに依つて、互に後を見せじと、進みて戦ふ。大和、槍を持ちて働く處に、香川が家人香川石見、其槍を打落せば、大和、其儘光景に組付く、此大和伊豆と大庭加賀守とは、武文の達者にて、名譽なる者の由聞えける故、元就豫て此兩人を召抱へたき由いはれけるを、香川も常々聞及びけるが、此事きつと思出して、伊豆守に此旨を告げて、生捕りたり。其外の者共をば香川、淡路守、同左馬助、同左衛門尉が家人猿渡壹岐等討果す。又宮左衛門尉をば、杉原若狭守、三須筑前守兩人して、之を生捕り、其外重見因幡守以下、生捕の者數多なり。〔藝侯三家誌〕

弘中參河守同中務最期の事

弘中參河守隆兼、同中務大輔隆助は、龍刀馬場へ取登り、百餘人にて控へたるに、元就一人も洩らさず討殺すべしとて、柵の木を結せて取圍まる。弘中が兵、或は討たれ、或

弘中隆助の討死

は生捕られて、今は主従三人になり、隆助敵中へ駈入り、數人切り伏せ、手を負はせて引き退く處に、吉川衆小坂越中守、遠く隔りて居けるが、若しやと放ちける矢、中務が左の肩先に當り、疼む所を、熊谷伊豆守が手の者、末田新右衛門走り寄り、引組んで首を取る。

弘中隆兼の討死

參河守此由を見て、既に自害せんとする所へ、阿曾沼豊後守廣秀が家人井上源右衛門駈寄れば、隆兼暫く戦つて、終に井上に討たれたり。此時迄附従ひて、一人残りたる弘中が郎黨をば、井尻又右衛門討取りたり。

二人狂歌を詠みて助命さる

軍止んで後、生捕の内、渡邊可性といふ者あり。常に狂歌を好き詠めり。元就早く狂歌を詠みたらば、命を助くべしとありければ、其言の下に、

かけてしもたのむやもりのしめだすき命一つに二つ巻して

しめ禪二つ巻は、此度毛利家の相印なり。又陶が同朋に、宗阿彌といふ者、是も同じく歌道に好きて狂歌を詠みければ、元就右の如くいばるれば、

名を惜む人といふとも身を惜む惜まにかへて名をば惜まじ

元就、此折節能く詠みたりとて、二人共に命を助けらる。「藝侯三家誌」

陶入道全蓋最期の事

陶晴賢の自害と殉死者

陶入道全蓋は、青海苔の濱迄落行くと雖も、船ななければ、今は進退谷りて、終に自害したり。夫迄附従ひたる伊加賀民部、垣並佐渡守、山崎勘解由、全蓋の首を紫の小袖に包み、遙か谷奥に隠し置きて、垣並、山崎は、入道と一處に刺違へて死す。伊加賀は、全蓋が乳人にて、側を離れざる者なれば、爰にて自害せば、入道も定めて一所にて死したるべしとて、首を搜し出すべし。所を替へて死すべしとて、二三町濱邊へ出で、自害したり。此三人の首をば、兒玉内藏允が手へ取ると雖も、誰が首とも知れず、警固船に取入れて、掛け置きたる所に、吉川勢の粟屋參河守、二宮木工助、落人を尋ねて山中を捜し、敵を數多討留め歸る處に、兒玉が船に首三つ掛けたるを見て、二宮、昔日此三人と睦じき故、能く見知り、陶入道も、定めて彼等と一所にて自害しつらめとて、粟屋、二宮此首のある所を尋ぬ。兒玉案内者にて、即時青海苔の浦へ行き、山谷を捜す處に、陶が草履取乙若とて、十四五なる童、最後迄供して、山に隠れ居けるを見付けて、此者を捕へ一命を助くべき間、陶が首の有所を教ふべしと賺しければ、乙若、首を隠したる所を教へ相渡し、最後の有様など、委しく物語しければ、則ち其首を搜し得て、元就父子の實檢に備へたり。(頭書)陶が首を搜し出したるは十月四日なり。頼て其首を二十日市の洞雲寺に納めて、懇に供養せらる。乙若儀は、命を助けられたり。大和伊豆守は、豫ては命を助くべしと思はれけれども、行末如何心許なしとて、香川左衛門尉に命じて終に仁保島に於て、之を討果さる。重見因幡守をば救免して、奉

大和伊豆置幡と重見因幡

陶が草履取乙若

であつた。然るに彼が嚴島の大捷は、弘治元年十一月(或は十月)で、實に五十九歳の時である。

此の一戦と藝備二國の領有

此の一戦によりて、彼は藝備二國を、確實に領有するを得るとなりたれば、彼は此の二國攻略の爲めに、三十二年の歳月を、消磨したと云はねばなるまい。五十九歳は、當時に於ては老人だ。謙信も、信長も、四十九歳で逝いた。信玄は五十三歳、氏康は五十六歳で逝いた。若し元就にして、氏康と同齡にて逝いたとせん乎、彼は僅かに大内氏の一被官たるに、過ぎなかつたであらう。彼は成功者であるが、晩成の成功者だ。

此の大捷後の元就の経略

彼のとん／＼拍子に、手を山陽、山陰に伸ばしたのは、實に此の大捷からだ。手短かに云へば、彼は周防、長門の攻略に、二年二個月(弘治元年十月—三年十二月)を要し、石見攻略に、四年五個月(永祿元年正月—五年六月)を要し、出雲攻略に、四年八個月(永祿五年六月—十年二月)を要した。而して最後の四年三個月(永祿十年三月—元龜二年六月)は、或は四國に、或は九州に、或は既に征服したる領内の反亂討平

に、殆んど虚日なかつた。

大内氏の相續者となる

嚴島の大捷は、彼の一代記に於ても、將た中國史に於ても、分水嶺であつた。彼は取りも直さず、秀吉が山崎の一戦にて、信長の衣鉢を襲ぎたる如く、此の大捷によりて、大内氏の相續者となつた。

防州諸城主の來降

彼は新勝の機を逸せず、兵を周防に進め、岩國を取り、永興寺に本陣を構へて、防州の諸城主等を招降した。従來陶の威風に靡きたるもの、若しくは形勢を觀望したるもの、概ね來り屬した。蓮華城主梶杜隆康は投降した。倉掛城主杉隆泰は、降て更らに叛きたる爲め、殺された。

陶の興黨を退治

弘治二年元就は、尙ほ岩國にありて、陶の餘黨たる伊賀地、山代、玖珂、下松等を退治した。三年二月には、陶黨の根據たる須々滿城を降し、若山城を抜いた。陶長房は敗死した。此れより軍を宮市に進めた。大内義長は、老臣内藤隆世と與に、山口を出で、長府に奔り、勝山城に據つた。此れは義長の兄、大友宗麟より、援兵を請ふ爲めであつた。

内藤隆世
と大内義
長の自殺

元就は山口に入つた。而して福原貞俊、士道元保を遣して、之を撃たしめた。福原は矢文を城内に投じ、『元就は隆世にこそ切腹を要求すれ、屋形に對しては、何等の遺憾なし。』との旨を通じた。隆世は切腹した。義長は城を出で、谷の長福院に赴いた。然るに福原等は、重ねて長福院に推し寄せ、自殺を迫つた。義長は隆世と與に切腹す可かりしにも、ろくも福原に謀られたと、憤涙を揮ひつゝ、死に就いた。此れは弘治三年四月初旬の事だ。姑らく隆世の切腹は二日の晩、義長の自害は三日の朝として置く。

大友氏の
傍觀は何
故か

義長の命、旦夕に薄るや、元就は大友宗麟に向て、若し希望とあらば、令弟を護送せんと申し通じた。然るに宗麟は、只今は舍弟と不和であれば、其の死生は予の頓著する所でない。唯だ欲しきものは、同人の所持する、紹鷗瓢箪の茶器である。願くは此品を送還せられよと答へた。〔野史〕此れは眞偽何れとも分明でない。但だ大友氏が、此の危急に際して、傍觀したのは何故であらう。彼れ宗麟は、此が爲めに、直ちに毛利氏と隣敵となるに、氣附かなかつたであらう乎。如何にも笑止

の事である。

〔六九〕 元就と勤王

頼山陽の
元就論に
異議あり

吾人は此際に、頼山陽に對つて、聊か異議の申立がある。彼は元就を以て、勤王家の典型とした。是れ尙ほ可なり、然も彼が元就を論じて、

吾論元就不言其智略、而言其果斷、不言其果斷、而言其事之合義、至於請之天子、又義之大者矣。

の一節に至り、餘りに見當違の評論に驚かざるを得ず。惟ふに山陽は、元就なる一個の偶像を藉り來りて、其の胸中に鬱勃たる勤王心を發揮したのであらう。所謂他人の杯酒を藉りて、自己の壘塊に澆ぐものとすれば、それで申譯が立たぬでもない。併し史家としての山陽は、全く臺無しぢや。

元就と晴賢との戦争

元就が陶晴賢との戦争に、天子の勅命を請うた事實は、無根である。無根の事實を根據として、論が立つ可き筈がない。且つ元就の陶と戦うたのは、尼子と戦ひ、大友と戦ひ、長曾我部と戦うたと、何等の相違がない。別言すれば其の戦争は、利害一天張り、大義名分抔に、頓著したものである。露骨に云へば、慾得づくの戦争だ。

山陽は元的に誤解

本來山陽は、元就其人を、根本的に誤解して居る。彼は山陽が見たる如き、理想家ではなかつた。戰國時代の諸將は、何れも没理想者であつた。就中元就の如きは、常識の要素過多にして、理想の要素は、それ丈過少であつたと云ひ得可きや。元就が義理を先とし、利害を後にする、理想家である如く見るは、全く山陽が自個の幻影もて、元就を理想化したる爲めだ。

元就の本領は智略

更らに其の智略を言はずして、其の果斷を云ふ抔の、讚辭に至りては、元就も全く難有迷惑だ。元就の本領は、智略である。彼が赤手にして、五十五年の長き歲月、大小二百二十六戰を経、安藝、備後、周防、長門、石見、出雲の主となり、更らに隱岐、伯耆、因幡、備前、備中、美作、但馬の若干部を勢力範圍となし、延いて九州、四國、畿内に迄、其の餘勢を及ぼしたるは、固より彼が武勇拔群の爲めであるが、更に其の智略の、人に邁^{すす}れたるが故と云はねばならぬ。即ち彼の武勇も、智略の指導によりて、有効に使用せられたのだ。

元就は老練の大策士

彼は大策士であつた。而して其の策士たることが、傍人に見付られぬ程、老練なる策士であつた。吾人は炯眼なる山陽が、何故に此の如き、無鐵砲の評論を敢てしたるかを怪しむ。併し此れは、勅命を請うて陶賊を討つたと云ふ、只だ此の一假構の小説が、事實として、山陽に受取られた爲め、彼が滿腔の勤王心と詩情とは、遂に一個の理想的元就を、打出せしめたのであらう。

京都の勢力利用者

併し元就に、決して勤王心がなかつたとは云はない。彼にも當時の諸雄同様に、相當の勤王心があつた。特に彼は夙に、大内氏の寡圍氣中に生活したれば、京紳との交渉もあり、京都の事情にも精通し、且つ京都の勢力の利用者としては、群雄中最も卓越したる、手腕を有する一人であつた。

朝廷と幕府に手入
れしたる
結果

されば彼は、其子隆元と與に、永祿二年、正親町天皇即位の御料として、其の新領地石見の銀山より得たる銀、四十八貫目を献上した。されば翌年正月二十七日、大禮を行はせ給ひ、二月十五日には、元就を陸奥守に叙し、菊桐章を給ひ、隆元を從五位下大膳大夫に叙し、同年三月二十五日には、將軍足利義輝は、隆元を以て安藝守護職に補し、同年八月八日には、錦袍を元就に賜うた。同四年二月八日、父子與に相伴衆に進んだ。同五年五月十八日、隆元は從四位下に叙し、元就は從四位上に叙した。八月六日、隆元は、備中備後の守護職に、同六年五月十六日、周防長門の守護職に補せられた。此れは元就が朝廷、幕府に、屢々手入をしたる結果と云はねばならぬ。

元就と實際的勤王

彼の勤王は、詩人的の勤王でなく、實際的の勤王であつた。彼は天下亂世と雖も、尙ほ名器は、朝廷に存し、而して人心は、朝廷を去らざるを熟知した。されば朝廷に奉事するは、己が爲めにする所以なるを熟知した。此の意味に於て、彼は立派なる勤王家であつた。即ち彼は、打算的勤王家であつた。併し此の朝廷と、毛利

家との關係が、三百年後、明治維新の大改革の楔子となつた事は、如何に分別多き元就でも、思ひ至らなかつたであらう。

頼山陽の毛利元就論

想見元就
之塵賊

外史氏曰、余安藝人也、俯仰其都邑城池、輒懷毛利氏盛時、每觀嚴嶋、亦未嘗不想見元就之塵賊也、夫室町之時、天下紛紛、日事兵爭、如群兒鬪、暗中喧呶、一仆一起、誰知其曲直、孟子所謂無義戰者、是已、唯元就之於陶賊、與北條早雲之於堀越、羽柴秀吉之於明智、其事皆可稱道、故其功効皆致如此、而元就最其難者也、夫亂臣賊子、人得討之、然戰國之俗、唯見利而不聞義、如陶賊之事、四隣牧伯、莫敢齟齬、甚至相率歸之、以爲倚賴、獨元就以微力、圖謀討、而又請之天子、名正言順、義旗所指、無堅不破、如揭炬、暗室衆目、駭觀、足以伸大義於天下、使天下響應、歸之、而何十三州之足圖也哉、大凡英雄成事、皆以爲其智略所致、而其事之合、有能服人心者、而不自知也、後之追論者、亦徒視其成敗、謂盡成於其智慮、而不知天下之事、有出智慮所不及、况當夫危疑之際、機會之來、間不容髮、苟以區區計算、要之萬全、吾見其終身而不及事耳、故彼治世之論、不可搆亂世英雄也、吾論元就、不言其智略、而言其果斷、不言其果斷、而言其事之合、至於請之天子、又義之大者矣、且觀其效、貢賦、助、舉朝儀、則存心王室、非一日也、昔者、孫堅以英雄之姿、志嚮漢室、奮討強

則存心王
室非一日
也

賊、出身不願、又有策權之子、遂能據有江東、以魏武之勢、而不能取焉、毛利氏之以關西抗織田氏、庶幾類之矣、元春之善戰也、類策、而隆景之善謀也、類權、皆絕人之才、而戮力協心、臣事輝元、使之不失舊業、是其義最爲不_レ可_レ及焉、輝元雖無孫皓之虐、而不量_レ力度_レ德、而爭_レ衡於中原、宜乎其削弱也、然其封土屹然、猶雄西陲者、豈非由元就父子之高義哉、〔日本外史〕

第十四章 元就と山陰道

【七〇】 石見出雲の經略 (一)

元就と尼子氏との對抗

元就は既に防長二州を取りて、大内氏の版圖を相續した。此れより山陰に向て、尼子氏と衡を争ふ時節となつた。然も彼が尼子氏との衝突は、大永三年以來の事であつた。彼は尼子氏との對抗に就ては、頗る苦心した。尼子氏の兵鋒は、大内氏の比でなかつた。彼は單に力を以て争ふの、不利なるを知り、或は敵將を懷柔し、或は反間を放ち、種々の調略、方便を用ひた。尼子家の長城たる新宮黨を、其の本家尼子晴久の手を藉りて、退治した事の如きは、其の一例である。

尼子氏の藩屏新宮黨の勢力

新宮黨は、尼子經久の二男家だ。經久の嫡男が政久で、政久の嫡男が晴久で、父の戦死によりて、祖父經久の後を襲うて、宗家の主となつた。經久の二男が國久で、此が新宮黨の主である。國久の嫡男が誠久、二男豊久、三男敬久、四男又四郎、五男

與四郎。又た誠久の嫡子が氏久で、他に二男、三男、四男があつた。而して晴久の嫡男義久は、國久の聳であつた。此の如く新宮黨は實に尼子氏の藩屏であつて、此の勢力が存立する間は、元就は其の一指を、雲州に染むる能はざる感があつた。是に於て元就は、其の得意とする間を用ひた。

元就得意の間を用ふ。

新宮衆毛利家へ心をよせ、晴久へ逆心の通、世上に取沙汰有之様に被遊候に付、此段晴久被聞付、世上にはいかん共いへ、對我等一門衆逆意は有まじ、乍去不審なる取沙汰なりと思ひ給ふ時節、御殺不成して不叶科人に、此御使者仕候はゞ、一命を御助可被成と被仰付、順禮の姿に被成、其者の肌、新宮衆への御密書を、文箱に入御付させ候て、又御中間頭武功有之者に、様子を得と被仰含、爲物聞雲州へ被遣候。此兩人の者共、雲州へ参り人ばなれの山中にて、右の順禮を殺し捨置候て、御中間頭は罷歸候。〔吉田物語〕

殆んど一種の小説

看よ是れ一種の小説ではない乎。併し事實は小説よりも奇だ。所の者見出し、衣類を剥ぎ取、肌に付たる文箱を、所の代官へ差出候に付、代官

元就の策九分九厘迄成功

早々晴久の入御披見候。右の御密書御文體に、内々互に得御意候一儀彌無御別心、彼仁を於被打果は、御所領の儀、如御望雲伯を進置可申との御神文也。晴久見たまひ、扱は世上の取沙汰事實也と存給ふ。〔吉田物語〕

此の如くして元就の策は、九分九厘迄成功した。然も彼の周到なる、更らに他の方面に手を廻はした。

富田の城、御裏向、然も平人の参る事不相成候處に、落し文有之、當所もなし、日付名もなし。其文に我等事は毛利家へ味方仕候間、此以後はたとひ命ながらへ候とても、懸御目候事は、有まじく候。扱々御名殘おしく存候儀は、筆にも盡がたきと書たる文也。晴久此文を見られ、愈よ驚き逆心無疑とて、可被打果に内談相極りぬ。〔吉田物語〕

晴久國久の一黨を屠る

斯くて天文二十三年十一月朔日、晴久は富田城中にて、國久を殺し、二日には新宮に推し寄せ、其の一黨を屠つた。國久の孫、誠久の四男孫四郎のみは、乳母懷中して、備後に逃れた。此兒が京都に上りて、東福寺に入り、後に還俗して、勝久と云

吉川元春
山陰道方面に當る

うた。

若し尼子晴久にして、兵機に通じ、元就が陶晴賢と對陣の際を利用して、挾撃したらば、恐らくは其志を逞くするを得たであらう。然も彼は多少働かぬではなかつたが、思ふ程の事も爲なかつた。元就は嚴島大勝後、防長二州を徇ふるの際、其の次男吉川元春をして、専ら山陰道方面に當らしめた。而して元春は、却て逆襲的に、尼子氏の勢力範圍に攻め入つた。彼は弘治二年三月、岩國を發し、石見に入つた。津和野城主吉見正頼は、既に毛利氏の幕下に屬した。其他福屋、周布、祖式、三吉、山内の諸豪族、皆な來り屬した。尼子晴久は、遂に巡兵を出さず、五月に至りて、銀山路にて、元春の兵と戦ひ、敗走した。元春は進んで大森銀山城主刺賀長信、高島遠言等を降し、銀山を得た。此の銀山が毛利氏の一富源となり、此より採掘したる銀が、正親町天皇即位大禮の御料に供せられた。

元春銀山
を得たり

〔七一〕 石見出雲の經略 (二)

元就の調略
藤兼と益田の招降

元就の調略、方便は、愈々拔目なく働いた。石州七尾の城主益田藤兼を招降したるが如きは、其の適例ぢや。

弘治三年の終夏、石州へ御出馬被遊候。益田儀は家城七尾は、大兵を引取候ては、働不自由の地にて候に付、三隅の高城へ、中間五里張出、御取掛を待請居候。然る處に元春被仰上候は、益田事義理に達したる士に候間、被助置、本領案堵被仰付候は、忝奉存御奉公可申上候と御理被成候へば、元就公被聞召御自分にも、左様被思召候。第一内々吉見と不和に候へば、吉見への御手當に可然候。仔細は正頼事小身第一に候處に、大内殿懇切故立身仕、其重恩を忘れ、義隆御没落の砌、奉公達も不仕候。此後猶々立身を存候は、此方へ逆意有べきも不知候。此にて益田の家を立置候時は、むかふさすに可然候。〔吉田物語〕
實に元就は、一箭にて双鳥を獲た。益田を味方に引き入れたのみならず、吉見正

一箭双鳥
を獲

元就處に轉戦

頼をも、益田の手を藉りて、牽掣した。永祿元年七月には、温井城主の小笠原長雄を降したが、其の九月には、大森銀山は、一時尼子氏に恢復された。而して永祿三年の冬には、福屋隆兼が反いたが、永祿四年の春は、其の討伐に従事した。而して其虚に乗じて、豊後の大友宗麟は、豊前の門司城を攻めた。元就は隆元、隆景をして、之に當らしめた。福屋隆兼は、力戦能く防いだ。永祿五年二月、遂に城を出で、逃走した。

銀山重利の寶庫と

將た大森銀山は、尼子氏の爲めに、本城（吉田物語本莊に作る）常光之を守り、永祿二年七月、元就、元春父子之を攻めたが、常光善く戦ひ、『城中曾て弱き體一圓無之、手強に相防申候故、元就公御意に、力攻に攻候は、畢竟攻崩可申候へ共、歴々の侍討死させられ候事、難被爲成儀に候、先御退陣可被遊之旨、被仰出。』〔吉田物語〕元就父子は退陣した。而して永祿五年六月に至り、漸く常光を誘ひ降し、銀山は重ねて毛利氏の寶庫となつた。然も元就は、常光及び其の五子が勇猛にして、一族頗る強盛なるを見、同年十一月、悉く之を殺した。

出雲に其の全力を傾注

毛利は既に石見を一統し、此より出雲に其の全力を集注した。將軍義輝は、旨を諭して、毛利と、大友を講和せしめた。是れ或は彼が將軍に手入して、大友を諭さしめたのであるかも知る可らずだ。何れにしても彼は此か爲めに、多大の便宜を得た。然るに意外にも、彼は八月（永祿六年）雲州大野の陣中に於て、其の嗣子隆元が、雲州出陣の途次、藝州佐々部に於て、頓死したる報に接した。六十六歳にして、此の大打撃に遭ふ、彼の心中想ふ可しだ。

嗣子隆元の頓死

隆元の追善は敵を滅すにあ

されど彼は隆元の追善は、只だ敵を滅すにありとなし、將士を激勵した。『軍を洗骸崎に進め、山上に城を築き、城中肆を列ねて商賈を集め、以て持久を示す。又た砦を和久羅山に構へ、白鹿城を蹙め、且つ富田に逼る。』〔洞春公略譜〕斯くて弔合戦に、白鹿城を抜いたのが、九月であつた。

將軍義輝の調停と元就の決心

當時將軍義輝は、毛利と、尼子との調停の爲めに、聖護院准后道増を下向せしめたが、元就は、尼子氏を滅すは、此の一舉にありとなして、之を聞入なかつた。彼は尼子が、實に腹心の病であることを、熟知した。故に彼の生時に於て、此が抜本的

打撃を加へ置くの必要を感じた。されば彼が牙營たる洗骸城は、頗る堅固に、且つ便宜に、何年滞在しても、決して屈託せぬ模様であつた。

洗骸城の堅固と便宜

此洗骸は島根郡の内なり、湖水の端なり。此處に山頭御陣城を築かれ、總構には芝土手を築き、堀を掘り、其内には總人數の陣取仰付けられ、總門の御番、打廻り等晝夜を限らず、堅固に仰付けられ候。若し敵寄せ來るとも、御下知之なき内、一人にても拔駈仕るまじきの通り、堅く仰渡され候。後には諸細工人、其外商賣仕り候者共、總構の内に置かせられ、諸勢の御用相叶ひ申し候様に、仰付けられ候。船手の儀は、兒玉内藏丞に、一所に數多御附け候て、海内、海外働さ候。此の如く長陣の御覺悟に付、富田衆、相草臥れ、龜井、牛尾を始め、各々降參の御斷り申上げ、味方仕り候。〔吉田物語〕

元就は此の如くして、尼子氏の本城富田を、孤立に陥らしめた。

〔七二〕 尼子氏の滅亡

元就の持久力は、實に異常に異常

元就の持久力は、實に異常だ。彼は此の一事丈でも、確かに成功者の資格がある。彼は永祿五年の春より、出雲に進軍した。六年の秋には、長子隆元を喪うたが、依然として滞陣した。七年の春には、大病に罹つた。此が爲めに京都より曲直瀬道三は、將軍義輝の命を奉じて來診した。彼は依然滞陣した。而して附近の諸城を下し、周邊の來援を絶ち、全く尼子氏の本據たる富田城を孤立せしめ、之れを包圍した。今や尼子氏と、毛利氏とは、全く根氣較べの姿となつた。

富田城と兵糧攻

富田城は月山にあり、要害堅固、力攻めに攻め落すことは、頗る困難だ。されば元就は、之を兵糧攻とした。春の末には、青麥を刈り、秋の初には、稻葉を薙り、穀類の收穫を絶ち、更らに其の交通を遮斷して、糧米移入の途なからしめた。特に沿岸には、兵船を浮べ、但馬、因幡方面より、物資輸送を防ぎ、永祿六年十月には、雲州弓濱にて、敵船を追ひ拂ひ、兵糧を焼き棄てた。

元就の總攻撃

永祿八年四月、元就は城中愈々窮迫に瀕するを察し、一舉之を陥落せしむ可く、總攻撃を命じた。元就は其の嫡孫輝元——隆元の子當時十三歳——を率ゐ、岩倉口に向ひ、吉川元春は鹽谷口に向ひ、小早川隆景は、菅谷口に向ふ。而も殺傷過當、遂に其志を逞うするを得なかつた。

元就の退陣と城中の窮境

元就は飽迄も大事を取る大將だ。彼は遮二無二、攻撃を繰り返さず、總軍に退却を命じ、京羅木山、瀧山、石原山の三所に、附城を築き、洗骸に歸陣した。富田城は、愈よ兵糧の缺乏を告げた。當時尼子氏の家老に、宇山飛驒守なる者があつた。彼の肝煎にて、但馬、丹後、若狹迄も、人を遣はし、糧米を買入れ、私かに八杉より輸入した。元就之を偵知し、八杉峽たにに臨む森山に築城して、之を防止した。此れより城中は、全く餓死の窮境に陥つた。

尼子義久遂に投降

元就は此の情態を察し、城中の落人、異議なく相助くる旨、高札を立てた。此れが爲めに降る者、逃ぐる者、相接し、剩す者、僅かに三百名となつた。尼子義久も、只た己が一死を賭して、衆命を償ふの他はなかつた。彼が元就に投降の使者を差し

元就の寛大は讚稱に値す

向けたるは、永祿九年十一月廿一日であつた。吾人は此に於て、元就が寛大を讚稱するを禁ずる能はず。彼は尼子義久、倫久、秀久の死を宥むるのみならず、之を優遇し、長州に護送し、其の天年を終らしめた。兄弟三人が富田城を出でたるは、永祿九年十一月廿八日であつた。元就は出雲攻略に、四年八個月を要したが、富田城攻圍のみにて、約三個月を要した。攻る者も能く攻めたが、守る者も能く守つた。

元就も一時は經久の幕下

尼子氏は、佐々木氏の一支派である。京極氏と同族で、其の代官として、出雲に臨んだが、京極氏の衰ふるや、之に代りて、出雲の守護職となつた。經久の時に於ては、徹祿して富田七百貫の領主であつたが、其の四隣を蠶食し、出雲、隱岐、因幡、伯耆を併せ、天文十年、八十四歳で逝いた。其子政久は戰死し、孫晴久が襲いだ。而して元就も、一時は經久の幕下に屬した。

四十有三年間の争闘

彼が尼子氏と手を切つたのは、大永三年であつた。爾來四十有三年の間、毛利氏と、尼子氏とは、恒に相ひ争うた。晴久は四十七歳で、永祿三年十二月逝いた。或は

永祿六年四十九歳で逝いたとも云ふ。運命は實に奇なるものぢや。晴久の子三人が打連れて元就に投降した。此の如くして尼子氏は亡び、毛利氏は興つた。元就は永祿十年二月に出雲大社に參拜し、其の戦勝を奉謝し、吉川元春を留めて、山陰方面の事に當らしめ、吉田に凱旋した。

生命あり
ての物種

葛藤の始つた時には、元就は二十七歳の若盛りであつた。其の片附いた時は、古稀の老翁であつた。元就の辛抱も、一通りの事ではなかつた。併し彼には大なる味方があつた。それは壽命ぢや。諺に生命ありての物種と云ふが、全く眞理である。

尼子義久下城の事

信長より
元春への
飛札

毛利元就、數年雲州に在陣して、尼子の滅亡、近きにあるべき由、毛利家の武威、諸國の聞え強大なりしかば、永祿九年の夏、織田上野介信長、吉川元春へ、飛札を投ぜられて曰く、

雖下無差題目候上啓達候。永々雲州御在陣之由候。依之萬端被勸武略之旨其聞候。誠名譽之儀候。彌可被任御存分事勿論候。自元就切々承候條大慶候。恐々謹言。

卯月十一日

吉川駿河守殿

織田上野介信長

元就病氣
と尼子の
助命

斯くて尼子籠城、去る永祿三年より、今茲同九年に至りて、凡そ七箇年なり。其間所々に於て、城兵或は討死、或は落失せ、或は降参しける程に、今は纔に、三百人計残り留り、其上兵糧乏しく、落城遠かるまじと、風説する處に、元就今年五月の末風氣を煩はれ、後には瘡疾となり、種々藥術を盡さるゝと雖も、其驗曾てなく、病日々重る處に、或夜元春、隆景、同じ様に見られし夢に、老翁一人、枕上に立ちて、此度元就の煩を治すべしとならば、尼子の命を助くべし、我は富田の八幡なりと宣ふと、見られしかば、即ち兄弟相議し、元就の側に寄りて、父子相談せられければ、先年大樹義輝卿より、聖護院准后を以て、毛利、尼子和睦すべき由、上命あり。尼子には、即ち領掌すと雖も、元就八箇條の斷ありて、上意を返されける處に、其理、至極なれば、義輝卿も、此儀を持扱はれける折節、三好左京大夫義繼、松永右兵衛佐久通等、義輝を弒し奉るに依りて、其事止みぬ。然れば今度其旨を以て、尼子が命を助け、下城さすべしと、相談を極められ、聖護院准后道増の御弟子道澄に、元春、隆景右の趣を言ひ含めらるれば、道澄即ち米原平内兵衛を以て、立原源太兵衛尉へ、言ひ入れられけるは、先年公方義輝卿、毛利、尼子和睦の儀取扱はれける處に、義久即ち領掌して、既に誓詞に及び、其草案、是にあり、然れば今當城を明渡し、諸士の一命を救はれ然るべき旨、義久に演説すべき由、委細に言ひ送

尼子命に
服して時
節を待つ
べしと衆
議一決

らる。立原即ち此趣を、義久に言ひ入れければ、即ち家の子郎黨を集めて意見を問はるゝに、各々申しけるは、當家數年の籠城に、味方悉く敵に降りて、殘卒終に三百計りになりぬ。然りと雖も、當城無雙の要害にして、今迄残り留る者共は、義に依つて身命を抛ち、城に残れる勇士共なれば、志を一つにして、防ぎ戦ふに於ては、尤も落城の期、近きにはあるべからずと雖も、兵糧悉く盡き來り、諸方に後詰の味方もなく、行末頼みなき城に籠りて、飢死せられんより、先づ一旦扱に任せられ、時節を待たれ候へかしと、皆一口に諫詞しければ、義久も即ち同心せられ、其由、聖護院へ返事せられければ、道澄、頓て其事を、三家へ告げられたり。是に依つて、永祿九年七月六日、尼子右衛門督義久、同九郎倫久、同八郎四郎秀久、數代の居城を出でて、(頭書)此時侍七八人を元就に降られしかば、即ち福原左近將監貞俊、口羽刑部大輔通良、二千餘騎にて、富田の城を請取りて入替る。斯くて、義久、倫久、秀久兄弟三人、侍七八人召具し、元春、隆景兩手の者、一千餘騎警固し、藝州長田へ送りしかば、夫より内藤下總守請取りて、同所圓明寺といふ、禪院に押籠め置かる。警固の儀、猶ほ念を入れられ、二重三重に、棚を結廻らし、此外に、元就よりは桂少輔五郎、元春よりは二宮木工助、隆景よりは宗近加賀守を附置かる。

尼子兄弟
去と立
落の行衛

此時、尼子兄弟に従ひて、藝州へ下りし侍は、先づ義久へは、宇山右京亮立原備前守、本田豊前守、同興次郎、大西十兵衛、同嫡子新四郎、馬木彦右衛門、力石兵庫助、津守四郎次郎、福瀬四郎右衛門、本田太郎左衛門、眞野甚四郎、高尾宗五郎、大塚助五郎、正覺寺等、以上十五人なり。九郎倫久へは、田賀勘兵衛尉、長谷川小次郎、山崎宗右衛門、重藏坊、以上四人。八郎四郎秀久へは、松浦治部丞、松井助右衛門二人なり。此外内の者、少々相従ひたり。立原源太兵衛尉、山中鹿之助、三刀屋藏人、秋上三郎左衛門、同伊織助高尾縫殿助、河添美作守、黒正甚兵衛、横道兵庫助、同源介、同權允、森脇市正以上四十九人、義久と同じく、藝州へ下らん事を願ふと雖も、元就許されず。(頭書)一書に、立原、山中以下の内に、三郎之を杵築迄義久を送り、夫より散々に別れをなす。中にも立原源太兵衛は、此度扱の使なるに依りて、所領に千餘貫を與へらるべき旨、いはれけれども、義理を重んじて、毛利家に仕へず、忍びて京都へ逃上りたり。

(頭書)赤川左京亮事、雲州在陣の間、下の關に置かれたる處に、如何なる遠目ありてか、雲州歸陣の節、討果さる。弟赤川源左衛門をば、吉田に於て、粟屋彌四郎、同源次郎、其外近習の衆に言ひ付けらる。源左衛門覺悟仕り居たる處へ、粟屋彌四郎仕懸け刺違へたり。左京亮が養子文五郎をも、歴々に言ひ付けらるゝ處に、又五郎、殊の外相働き、時刻移る處へ、粟屋源次郎來り、難なく討果したり。

扱富田の城には、天野紀伊守隆重を籠置き、雲伯州の押とし、元就、輝元、元春、元長、隆景相共に、杵築へ參詣し、夫より元就、輝元、隆景、元長は、藝州へ歸陣せられ、元春は、若し敵の殘黨國中にありて、如何なる企もやすべき。又亂國の後なれば、國民安堵の爲め、其

毛利家の
武運と義
昭の賞詞

勢五千餘騎にて、暫く雲州に在陣せらる。雲州落去に依りて、翌年永祿十年三月、源義昭より、三家へ使を給はる。吉川元春へ下されたる御内書に曰く、

雲州之儀落去之由、其間尤無比類候。然者此砌入洛之儀、元就別勵武略候様令馳走者、可爲神妙候。委細聖護院門跡可有演説候。猶信惠可申候也。

永祿十年三月二日

義 昭(御判)

吉川駿河守殿

名醫道三の事

(頭書)或書に曰く、元就御病中、京都より、翠竹庵道三を呼下して、醫療を加へられしが、道三、雲州滯留の中、元就より附置かれたる用達の侍に、潛に私語きけるは、元就公、今の御脈にては、四五五年の内は苦しからず、五六年過ぎては、夏の季を、殊に御用心ありて然るべしと申しけるが、果して今年より六年を経、元龜二年六月、終に逝去し給ふ。道三の診脈、六七年経ての先兆を、豫め考へ知られたる事、希代の名醫なりとて、後に此事を聞及びたる者共、申合ひけるとなり。道三雲州滯留の中、暇ありければ、百八箇條の藥方を編録して、雲陣夜話と題號して、家の秘傳小切紙の中に入置きたりと云々。(藝侯三家誌)

第十五章 毛利元就の人物

【七三】 元就の晩年

元就と最後の五個年

元就は尙ほ最後の五個年を剩した。彼は如何に之を經過したる乎。吾人は多く語る必要を認めない。彼は唯だ兀々として、稼ぎ死をした。彼には仕事の外に、何の道樂もなかつた。彼は永祿十一年四月には、伊豫の湯月の城主河野通直の請に應じ、元春隆景等をして、大津城を攻めしめ、城主宇都宮豊綱を降し、伊豫を平定した。

盟に背きたる毛利側

又た筑前立花城主立花鑑載が、大友氏に反き、毛利氏に味方するや。元就は大友氏に對する、從來の約束を破毀して、清水左近將監を遣はして、之を援けしめた。而して更らに元春隆景をして、同年九月、豊前の三岳城を抜き、進んで立花城を圍ましめた。蓋し立花城は、大友兵の爲めに破られ、城主鑑載は自殺したからで

ある。略譜には、『是年義鎮背盟、欲擊我管下筑前宗像、秋月等。』とあれども、盟に背きたるは、大友側ではなく、寧ろ毛利側であつた。

何故に盟約を破りたる乎

彼は何故に盟約を破りて迄も、九州に其兵を出したる乎。彼は、大友氏を以て、毛利氏の深憂大患となしたの乎。將た大友氏の與みし易きを見て、其の勢圍を鎮西に擴張せんとしたの乎。永祿十二年四月には、七十三翁の元就は、十七歳の嫡孫輝元を伴ひ、自から長府に出掛け、遙かに之を指揮した。閏五月には、元春、隆景等は、立花城を取り回へした。

意外なる不愉快の田來事

然るに意外なる事は生じた。永祿十二年六月に、尼子勝久は兵を擧げて、出雲に入つた。其の十月には、大内輝弘は、亦た山口に入つた。此の如く、尼子、大内の殘黨が、年を同うして蜂起したのは、元就の晩年に於て、頗る不愉快の事と云はねばならぬ。

勝久舊臣を糾合して擧兵

勝久は新宮黨の尼子國久の孫、誠久の末子であつた。彼は二歳の時に乳母の懷中に入り、備後に逃れ、僧となり、後東福寺に居たが、固より一生坊主にて暮らす

考でもなく、腕力もあり、勇氣もあり、潛かに武技を修めて、時の至るを俟つて居たが、尼子の遺臣山中幸盛、立原久綱等に見出され、遂に毛利氏の九州に事あるを聞き、急に還俗し、舊臣を糾合し、但馬より海賊船にて、隱岐に赴き、更に雲州弓濱に上陸した。

大内輝弘の敗死

大内輝弘は、義興の弟で、義隆の叔父であつた。彼は義隆と善からず、豊後に趨り、更らに上京し、義輝の偏諱を授けられ、前名高弘を、輝弘と改めた。爾來尼子氏に倚り、富田にある六年、又た豊後に抵り、大友氏に頼り、宗麟の掣となつた。彼も亦た毛利氏の九州戦争の虚に乗じ、豊後鶴崎より乗船し、長州秋穂白松の浦に著岸し、山口に打入つた。元春、隆景は、軍を旋して輝弘を攻め、彼は一支へも支へず、敗れて自殺した。

無道の因果の如し此

元就公、輝弘首を御覽に成り、汝事心底に惡事を構へ、義隆を恨み候に付、無道の因果にて此の如く罷成り候。一とせ義隆雲州御發向の節、我等を先手に御頼み候へども、惡人なれば汝を討果させ申すべしと存じ、輝弘程なる弓矢の

勝久と舊業恢復の勢

智謀勝れたる侍別に御座なく候。兎角其方に仰付けられ然る可しと申上げ候に付、若君の御先手、汝に仰付けられ候。然る處に敗軍に及び、若君は雲州江に於て、船を乗沈め御死去候。其科にて、其方豊後に追出仰付けられ候。此度討果し御本望に思召され候と、御意にて、首を御撫でさせられ候。〔吉田物語〕

勝久の討伐半ばに死す元就の病

斯く輝弘は片附いたが、尼子勝久の方は、左様に手軽くは參らなかつた。彼は出雲の六城を攻め陥れ、殆んど舊業恢復の緒に就くの勢を示した。元龜元年正月、輝元は諸將を率ゐて之を伐ち、二月富部に戦ひ、大に之を破りて、數城を取り返へした。而して輝元は吉田に還り、元春をして其事に當らしめた。

然るに勝久の討伐半ばにして、元就は元龜二年六月十二日、吉田城中に病に罹り、十四日には長逝した。享年七十五。雲州に出征したる元春を除けば、輝元、隆景以下、皆な其の左右にあつた。彼の法名は、日頼洞春大居士である。

一切圓滿に發達したる人物

四海九州知有人。人生七十五烟塵。分明淨智妙圓相。突出虛空大日輪。此れは彼の導師、備後南禪寺笠雲和尚の偈也。『淨智妙圓』の四字は、元就の性格に恰當して居る。彼は實に、一切圓滿に練達したる人物であつた。彼に比すれば、信長の如きは、大なる片輪者と云はねばなるまい。

立花の城明け渡す事

大友方より長府へ送還せんと申込

立花の城に残り留る所の將卒等、敵中國勢の後を慕はゞ、即時打つて出で、一場の死を究めんと、勇氣を勵して今やと候。見る所に、敵些とも付け送る體もなし、然らば當城をこそ攻むべけれとて、矢束解き鐵砲引掛けて待つ所に、左は無く大友入道より、吉弘掃部助を以て、今度兩將敗軍の所に當城を守つて留まられ候。實に忠の至り勇の勝れたる事、比倫なく存じ候也。然らば先日當陣に在りし、鶴原、田北の者共送り歸し給ひつる、其禮謝の爲、各兩三人に於ても、長府に至り送り届け申すべき間、城を明け渡され候へと云ひ送られけり。桂坂、浦、仰の趣其旨を得候、如何様元就父子長府に在陣候ふ間、此由申し達し、其上にて御返事申し入るべく候也と返答して、急ぎ此由云ひ送りければ、兩將事故なく、開陣し給はん爲にこそ、殘し置かれつれ、今は堅く守らん事、其詮なし、早く相渡して馳せ歸り候へと下知せらる。桂等頓て城を渡すべき也と云ひ送りければ、大友家より、姫島閑齋、大友駿河守等三千人にて、城

渡城しつる光景

を請取り、戸次道雪入代りて在城し、筑前の守護となる。さて杵月右馬允、秋友式部少輔、鶴原、田北等の者共、桂已下を送り出す、路次に假屋を作り、大幕打ちて、酒燕時をぞ移しける。斯て酒酣に成りしかば、豊後衆の中に舞の上手何某坐を立ちて、一奏しける間、鼓抛出し、これく遊ばされ候へと進めけるに、坂新五左衛門、元來亂舞の堪能なれば、大鼓取りて膝の上に動と置き、大鎧著ながら、丁々と打ちたりけり、浦兵部丞一さし舞はれ候へと、所望しければ、承り候ひぬとて、扇おつ取り立ち騰る。桂はかく打破解貌にも成し方便で、討つ事もやある、物の色見えなば、杵月が眉間二つに切破りて、んと大の眼を見出し、囁と睨んで居りたりけるが、是に付いても人々に、心なく吳服とり、あましめられるな、面々と諷ひ出しければ、宗勝扇翳し、足拍子丁々と踏鳴しける有様は、漢の高祖、楚の項羽と、鴻門の會盟の時、項莊劍を抜いて舞ひけるも、かくやと思ひ知られたり。宗勝延命の舞舞ひ納め、暇申して、さらばとて、虎の尾を踏み毒蛇の口を遁れたる心地して、中國さしてぞ上りける。〔陰徳太平記〕

恰も鴻門の會の如し

【七四】 元就と氏康

元就と後世に及ぼしたる偉大の感化

毛利元就は、其の人物と、事功とによりて、記憶す可きのみならず、其の後世に及したる感化の偉大なるによりて、史上に特筆す可き一人である。何となれば、彼は毛利家なる一の大貴族の、創業者たるのみならず、亦た所謂長州氣質の開山であるからだ。

元就の流風餘韻と長州氣質

長州氣質は、必ずしも元就一手の製造ではない。併し彼微りせば、長州氣質は出來せぬ。而して此の長州氣質が、嘉永、安政以來、明治、大正の現今迄、尙ほ日本に於ける一種の特徴であり、一種の勢力であるを見れば、元就の流風餘韻は、尙ほ三百五十年の現在迄も、傳來するものと云はねばならぬ。是れ吾人が元就到て、語ることの審詳を要する所以である。

元就と同時代の北條氏康

元就と同時代の人にて、彼と比較す可きは、北條氏康であらう。彼等は何れも、智勇兼備の大將だ。彼等は謀を好んで、漫りに一六勝負の冒險をやらぬ。併し我に

元就は信長を除けば比類なき成績者

成算あれば随分思ひ切つた事をする、氏康の河越に於ける、元就の嚴島に於ける、皆な然りだ。彼等は善く部下を撫でた、民政にも氣を附けた、經濟にも通じて居た。而して何れも文藝に興味を有し、和歌に堪能であつた。氏康に武藏野紀行あれば、元就には春霞集がある。併し氏康は、早雲、氏綱、父祖傳來の遺業を恢弘にし、伊豆、相模、武藏、上野を並有したるに過ぎぬ。元就に至りては、所謂蕤州三十七豪族の一より起りて、山陰、山陽の霸主となり、十州の伯と稱するに至つた。固より氏康には、信玄、謙信等の如き、強隣を控へ、元就の大内、尼子に比す可きではなかつたが、其の成績の上より云へば、信長を除けば、元就は比類なしと云はねばならぬ。

元就の強點は其の壽命と其子の偉材

氏康は元龜元年に、五十六歳で逝いた。元就は其の翌年に、七十五歳で逝いた。壽命に於ける約二十年の延長は、元就の大なる強點と云はねばならぬ。而して更に大なる強點は、其の子である。氏康には、民政、氏輝、氏規、氏忠、景虎、氏堯、氏光の七男があつた。民政、氏輝、氏規の如きも、必ずしも不肖の豚犬ではなかつた。併し

年齢と兒子とを最善に利用

元就の九男は、數に於てのみならず、質に於ても、超越した。元春、隆景に至りては、各々其類に於て、拔群の材であつた。元就は年齢と、兒子に於ては、徳川家康を除けば、戰國時代、何人も及び難き仕合者であつた。然も彼は此の年齢と、此の兒子とを、最善に利用した。彼は死する迄働いた。乃ち一日も無益の日を送らなかつた。彼は隆景と、元春とを、左右の手の如く使用した。而して自餘の子女も、悉く養子政策、結婚政策に利用した。乃ち彼には一として廢物がなかつた。

氏康の陽柔陰剛と賞罰明斷

北條氏康は、陽柔陰剛、賞罰明斷、善く人を識ると稱せられた。彼は政を其子、民政に譲り、之に誠めて、今日に於て士を惠み、民を愛するは、大將の任である。戰國の世の中では、士民其堵に安せねば、乍ち去りて隣國に赴く。さればいざと云ふ場合に、甘言以て之に陷はさんとしても、役に立つものでない、必らず平素より心を懸け、其の寸功をも褒薦、獎賞し、決して部下の功を偷む勿れと云うた。〔碎玉話〕北條氏が人心を得たのは、偶然でない。

人心收攬

他日豊臣秀吉が、天下の力を舉げて、來り攻めて、尙ほ半歳を費した。人心收攬は、

早雲以
來の遺法

早雲以來の遺法であつたが、氏康に至りて、最も周到に行き渡つた。故に氏政時代の荒廢に拘らず、尙ほ人心を固結せしめたのだ。

毛利氏と
人心の一

元就に至りては、更らに此點に意を用ひた。彼は前に大内氏の亡滅を見、後に尼子氏の亡滅を見、其の盛衰興亡の迹に就て、痛切、剴切なる實物教訓に接し、之を以て自から處し、之を以て其の兒孫を誡めた。他日毛利氏が長防二州を以て、幕府に抗敵し、四境の外に於て奮闘勇戦したる所以のもの、固より此の内に於ける、人心の一和に由來すると云ふ可く、而して此の人心の一和は、元就以來恩德を以て、人民の心を繋ぎたる、効果と云はねばなるまい。政治の要は、力のみでは足らぬ、必らず徳が加はらねばならぬ。

北條氏康和歌の事

北條氏康
就中和歌
を嗜む

聞くは昔、北條氏康公近習に仕へし高山伊與守といふ老士かたりけるは、氏康は文武の達人弓矢を取て關八州に威をふるひ、東西南北に敵有て戦ひ、晝夜いくさ評定

やんことなく、寸暇をえ給はず、され共すきの道にや、其内にも和歌をこのまし給ひたり、或時は和漢の才人を集め、或時は歌の會あり、氏康百首の自詠を京都へ上せられ、逍遙院殿合點を度々取給ひぬ、或夕つがた高樓にのぼりすゞみ給ひける時に、其近邊へ狐來て鳴つるを御前に候する人々あやしみけれ共、兎角いふ人なし、梅窓軒と云者申けるは、おかし頼朝公信州淺間見はら野の御狩に狐鳴て北をさして飛さりぬ、人々は是をといぬんとて矢はつを取ておつかけしかどもにげ過ぬ、頼朝公御覽じ、秋の野の狐とこそいへ、夏野に狐鳴事不審なり、誰か有歌よみ候へと仰下されければ、工藤祐經承りて誠に昨日の御狩において、梶原源太景季が歌には鳴神もめでて雨はれ候ひぬ、是にも歌あらばくるしかるまじ、誰々もと申けれ共よむ人なかりしに、武藏の國のぢう人愛甲三郎季隆あたけたかになり、うかべるいる見えしかやがて

夜るならばこうく、とこそ鳴べきにあさまにはしるひる狐かな

と申ければ、君聞召て神妙に申たり、誠に狐におほせて吉凶有べからずとて、上野の國松井田にて三百町を給はるとかや、愚老和歌の道をまなびとくおよばぬまでも案じて見候へきをと申、氏康きこしめし、夏狐鳴事珍事なり、皆々歌を案じ出來次第に一首仕るべしと仰有ければ、各々案ずる體見えけれ共、詠入なし、やがて氏康公

氏康が夏
狐の名歌

夏はきつれになく、蟬のから衣おのれ、か身の上いきよ

氏康よく
家運を守
る

とよみ給ひしに、夜明て見れば其狐鳴つる所に死で有けり、皆人奇妙不思議也と感
 じあへり。氏康は希代の大将、運を天にまかせ、仁を人にほごし、諸人を親兄のごと
 くおもひ、慈悲深重にして寛仁大度なり、常に祇候の諸侍に或は禮儀を厚して對面
 し、或はなさけ有言葉をかけ、食するひまも仁にたがはず、累年過來る、氏康いばく我
 數度の合戦に勝利をうる事武力のいたす所に非ず、ただしかながら天運全して
 神明佛陀の擁護にかゝる故也と、神佛を信敬し諸寺諸社を建立せり、父氏綱は天文
 九年鶴岡八幡宮造立し、氏康は同十一壬寅年卯月十二日由井の濱の大鳥居を立、舊
 規にまかせ千遍陀羅尼を七日おこなはるゝ供養に至て、一切經轉讀先例に相かは
 らず、布施等品々の目錄あげて志るしかたし、其大鳥居天正年中まで有今はたえて
 なし、氏康かく有て家運を守りひぬ。上に譏あれば下あへてもて服せずといふ事
 なし、諸侍身命を君になげうち忠をいたさんとす、されば仁義禮智信の五ツの名あ
 りといへ共たゞ一心に極れり、君としては萬民をあいし、臣は君に能仕へ、父として
 は子を憐み、子は親に孝をつくし、友は義をもてまじはりをむつましくす、是みな
 智仁勇の内にあり、君臣合體すれば國家安泰なり、其上氏康は他國より來る侍をあ
 まれく扶持し、猶もて有職の者をを慰勸にせられたり、楚國には財をたからとせず
 善をたからとすと云々、珠玉をたからとする者かならずわざはひを招くといへり、
 賢人内に有るときんば小人外に有、小人内に有るときんば賢人外に去、かるがゆゑに故

氏康士を
招き衆を
安んず

實を存する侍は、他國に有ても北條家に心をよせ、諸國より小田原へ來るをかへ
 をき、殊にもて近習に召つかはれ、其國々の弓矢のてだてを朝暮聞しめ給ひたり、故
 に諸國の大將の弓矢のてだて軍法をよく知て、戰場に至てはそれ〴〵の行に對し
 て智謀武略をつくし勝利を得、持國をまつたく守護し給へり、つたへ聞夏の桀は無
 道にして君臣の禮をうしなふ、扱又殷の湯王は賢人をもとめはかりごとを聞てま
 つりごとを正しく取おこなへり、故に諸侯も夏を背き、百姓も得を湯に納む、終には
 湯王夏の桀を伐て天下を治め給ひぬ。されば小田原に小笠原播磨守、伊勢備中守、大
 和彦三郎是は後兵部少輔と改名す、此三人は京都公方様につかへ、御他界以後關東
 へ下向し、牢人分にて小田原に堪忍なり、仁義の道有て弓法をしれる人々也、氏康御
 自愛なゝめならず、常に御はなしの衆なり、氏康旋に軍陣において諸侍いくさの行
 を見付思ひよる兵術はあるに至ては、貴賤上下をえらばず推參をはゝからず急ぎ
 はせ參じ直に申上べしと云々、故に諸侍武略をたしなみ、軍中において存するてだ
 てあれば、すなほち言上す、其節に至て時々刻々すこぶるほうびし、或は近習に召つ
 かひ、或は賞をあたへ給ひぬ、是によつて又も云しらしめ奉らんと下々に至までも
 兵法をたしなみ、有職の人に近付、軍法を尋聞て弓矢の道を日夜にまなび、其身〴〵の
 術計勝利えん事をもつげらとす。氏康いはく我いくさ興するに至ては、あまたの者
 に相談し、三人いふ時はかならず二人いふかたに付、其ゆゑに數度の合戦に利をえ

たりと、わが分別を云かくし、即從を取立給ひぬ、かく有により他國の侍までも北條家に心をよせずといふ事なし、此時代に至て關入州靜謐になさまりたりと物がたりせり。〔北條五代記〕

〔七五〕 三子への遺誠

戰國時代の反間術大博士
元就は複雑なる機關であつた。彼は一本調子でない、彼は中々喰へぬ男であつた。彼には其の觀察の方面によりて、如何なる批評をも、下だすとが出来る。横着とも云へる、正直とも云へる、殘刻とも云へる、仁慈とも云へる。詐術、謀略が、當然の事として流行する、戰國時代に於てさへ、彼が反間術大博士として、世の中に通りたりしを見れば、彼が頼山陽の理想化したる、大竹を打割りたるが如き男

でなかつたとは、判知る。

彼を知るに若かず

併し彼を知るは、彼に若くはなしだ。吾人は彼が三子に與へたる、遺誠狀を見て、其の三子に告げたる所以のものは、彼が平生受用したるものなるを知る。乃ち之を以て、彼が自己告白の文と看做すも、可なりと思ふ。

遺誠狀は六十以後の述懐

元就其人の本性に露呈す

此れは『吉田物語』には、永祿四年、元就六十七歳の時、(六十五歳?)自筆にて隆元、元春、隆景の三子に與へたと記し、又た吉川家譜には、弘治三年の書とある。左すれば彼が六十一歳の時だ。何れにしても、彼が六十以後の述懐である。過去を顧み、將來を想ひ、其の兒孫百年の長計を貽したものである。其の大趣旨は、兄弟三人、一和して毛利家を扶植せよと云ふに過ぎぬ。即ち毛利家中心主義を、三子に鼓吹したものだ。されど之を熟讀すれば、元就其人の本性が、覺えず言葉の端に露呈したものが、少くない。

一 我等事存知の外、人を多うしなひ候之條、此因果候ては叶まじく候と、内々笑止にて候。然間かたぐの御事、此段御慎み肝要候。元就一世之内に

報候へば、不及申候。

彼は随分反間やら、詐謀やら、其他の手段にて、人を殺した。されば彼は中心懊惱、早晩因果の魔鬼の來襲に遭ふとを、憂惧した。故に其の三子にも恐懼し、戒慎す可きを警告した。殊勝とや云はむ、奇特とや云はむ。

四十餘ヶ
年の大浪
小浪

一 元就事、廿之年興元に離れ申、至當年于今迄四十餘ヶ年、其内大浪小浪洞ほらに他家の弓矢いかばかり轉變に候哉。然處元就一人すべりぬけ候て、如此之儀、不思議不能申候。身ながら吾等事、健氣者、とうほ手ものにて、も、智惠才覺人に越候者にて、も、又正直正路者にて人にすぐれ、神佛之御まほりある可き者にて、も、何之條にて、もなく候處に、かやうにすべりぬけ候事、何之段にて候共、更身ながら不及推量候。然間はやはや心安やすくちと今生之樂をも仕、心靜に後生之願をも仕度候へ共、其段も先ならず候て、不及申候。

眞に腹底
より出で
たる沈懷

此れは彼が、眞に腹の底から出で來りたる、述懐だ。彼が四十餘年の過去を回看し、其の世波の起伏、人生の轉變の中に於て、單り彼の一家のみとん／＼拍子に、

三子に向
つて信仰
上の勸告

榮進したる事實は、彼自身の眼より見れば、全く一種の奇蹟であらう。彼が此の幸運を如何にして、子孫に享受せしめんかと、苦心したのは、良に同情に禁へぬ。

彼は又た其の三子に向て、信仰上の勸告をした。

一 我等十一之年、土居に候つるに、井上古河内守所へ、客僧一人來候て、念佛の大事を受候とて催候。然間大方殿御出候而御保候。我等も同前に十一歳にて傳授候而、是も當年之今に至る迄、毎朝多分まじたまひ咒候。此儀は朝日を拜み申候て、念佛十篇づゝとなへ候は、後生之儀者不及申、今生祈禱此事たるべきよし受候つる。又我々故實に今生之願をも御日え申候、もし／＼かやうの事、一身之守と成候やとあまりの事に思ひ候。左候間御三人の事茂、毎朝是を御行候へかしと存候。日月いづれも、同前たる可く候哉。

彼の希願
は今生の
福利

彼は殊勝なる念佛信者であつた。而して彼の希願は、後生の安樂よりも、今生の福利であつた。

一 我等事不思議に、嚴島を大切に存る心底にて、年月信仰申候。さ候間、初度

に折敷圃にて合戦之時も、既はや合戦に及候時、自嚴島石田六郎左衛門、御久米卷敷を捧げ來候條、さては神變と存知、合戦彌すゝめ候て、勝利候。其後嚴島要害爲普請、我等罷渡候處に、存外なる敵舟三艘、與風來候て、及合戦數多討捕頸、要害之麓にならべおき候。其時我等存當候、さては於當島、彌可得、太利、奇瑞にて候哉。元就罷渡候時、如此之仕合共候間、大明神御加護も候と、心中安堵候つ。然間嚴島を皆々御信仰、肝要本望たるべく候。

普通以上の宗教的信者

彼は此の如く嚴島を信じつゝも、尙ほ嚴島社殿に、戦血を漂はすを禁じ得なかつた。されど又た之を洗除するをも、禁じ得なかつた。神佛信仰は、彼一人のみではなかつた。寧ろ當時に於ては、之を信せざる者が不思議で、信ずるのが普通であつた。併し彼には確かに普通以上に、宗教的信念があつた。或は因果應報と云ひ、或は神明の加護と云ひ、彼は人力以外の力と、人間以上の或物とを、恒に其の胸底に認めた。

隆元一人

彼は又た此れと同時に、其の相續者、隆元一人に當てたる、遺誠文中に、

に當てたる遺誠文

一 當家をよかれと存候者は、他國の事は不能申、當國にも、一人もあるまじく候。

と云ひ、又た、

一 當家中にも、人により時々により候て、さのみよくは存候はぬ者のみあるべく候。

最後に恃む所は彼自身

と。乃ち周邊悉く敵而して他國より、自國に至り、自國より自家中に至る迄、人心恃む可らず。恃む可きは自己であるを、鄭寧に教誨した。其の教誨した所は、自から受用した所だ。即ち元就は、善く人心を綏撫し、人材を操縦したが、最後に恃む所は、唯だ彼一人であつた。彼自身であつた。

元就の詠草中より

雲州小石見といふ所に在陣し侍りし比、大庭加賀守遲參たりしかば、ふるとし對顔をへだて侍りしにことわりともかくと聞ゆれば、むつき二日のもとへつ

かはしける

石見かた雪より馴る友とてや心のかきり打とけにけり

賢兼かへし

いは見かたかたき氷も雪もけふとくる心のめくみうれしも

此贈答一毫のへたても聞えず誠上下怨なしといふ明文にかなへり(三條西

實澄卿の評)

隆元朝臣より一枝を送られしにふみてつかはしける

折袖の色香もふかき一枝にいかでやたへん山さくら花

一枝を擧得て猶桂林のふかきを思へるその情あさきにあらず(三條西實澄

卿の評)

〔春霞集〕

元就の和歌

元就公の事ども

晝夜工夫油断なし

一唐の兵書御稽古も不被遊候へ共、武略智略計策の御調略少も和漢の兵書の旨違ひ不申との儀に候、晝夜の御工夫御油断不被遊候故、御一心の御悟り自然とひらけ申候と取沙汰仕候御一生の内夜なとくと御寝なり不申候、御枕木に燈火御

能く士を懐づく

硯紙被爲置候て、諸所の御調略又諸境目の衆への御書御案文毎夜被遊候事。一遠國爲御調略被差越候者共、道中或は先様にて様子に依り咎められ候事有之時、種々偽りを申綱ぬけなと仕、からき命を助かり罷歸候道すから存し候は、武士の奉公程難儀なるものはなし、早速御理り申上所帯を子供に譲り隠居致し、山中なとへ引込渡世可仕と存極め罷歸り出仕いたし候へは、則御目見被成先様の様子御尋被成候時、難儀に逢申候段申上候へは、御落涙被遊候て種々忝被成御意御褒美物など御手自被下候へは、唯今迄存極めたる心底に引替、又明日にても御用被仰付候は、何國迄も可參と存候様に御座候由、各物語申候事。

譜代先方の隔なし

一輝元公御出語に、大將たる者人の目利能仕候時は、形に影の添ふ如くなる臣下出來申す者と申傳へ候、左様も可有之候、元就公萬事御談合人人の内兒玉就忠を被召出、境目の衆へ御音信の儀被仰付候時、此衆へは久敷音信も無之候、何にても彼地珍敷物一兩種支度仕候へと御意候へは、就忠承り如御意、此者共へは久敷御飛札不被遣候に付、彼地珍敷ものは、支度申付置候、御書面御調被遊、御使者被仰付候は、可然奉存と毎々申上候へは、其家々への相應の御使者又は御飛札被仰付候由御心安衆へ御申聞せ被成候、右之通諸境目に被差置候衆中御普代先方の御隔もなく忝く奉存候様に連に被仰違候故、先方衆城下より先へ御人數被遣候事御座候時は、我先にと御馳走を祐仕候へ、逆意少も無御座候の故、諸勢心易く往來

和歌堪能の事

仕候事。

一元就公いか様の儀にも御こんぢや貪著は不被遊候へ共、御歌御連歌をば常々被遊候に付、御一生の内の御詠歌連歌の御發句御付合の御句なと御書集被成被爲置候を、輝元公御代に聖護院殿吉田へ御下向の刻御見せ被成候へは、御作意不淺の由御褒美候て御上京の節御隨身被成、三條西殿紹巴へ御見せ候へは、御兩人も中々殊勝なる御作意に候と御惑にて候、聖護院殿より御頼被成候へは、則御批判の筆を被添被差下候、此詠草兩册御納戸に御座候由に候、其御詠草の内に或年の春山路を御通り被成候處に谷岑の櫻かずく咲けるを御覽候て

恨むなよ心にもろゝ花もなし

と御發句遊遊候、誠に遠境の民まで御愛愍深き御志顯れ、此御發句を承り候程の者共難有奉存候又御詠草の中に

青柳の絲くり出すそのかみは誰小手卷のはじめ成らん

此御歌を取分西殿も御褒美被成候、禪法も恵心國師の御弟子に被爲成被聞召之由候事。

小家の百姓まで心服す

一或時郡山の山下の町を御打廻りの爲夜に入り御通り被成候處に、小家にわらはべの聲にて御城の方へ跡をなすまじき哉と親にとへは、親聞て神より佛より貴きは殿様也、いつものごとく寢よと申候を被聞召、扱はあの如く成小家の百姓ま

て御爲を奉存候哉と被思召御満足被遊、右の百姓を被召出田畠いか程作り申候哉と御尋候へは、三反作り申の由申上候、則ち作り取に仕候へと被仰付候由、是又古き衆申傳候事。〔吉田物語〕

第十六章 織田氏及び其敵

【七六】 元就死後の毛利氏

大なる遺物は二叔

毛利氏は元就の死によりて、何等影響を被らなかつた。彼は其の嫡孫輝元に、十個國を遺した。それよりも大なる遺物は、元春、隆景の二叔だ。彼等は、宛も其父元就を等分した如き、性格を有した。或は彼等兩人を合すれば、其父以上となつたかも知る可らずだ。

二叔の協力一献身的努力

特に驚嘆す可きは、此の二叔が、其の性情行徑の相背馳するに拘はらず、協力一致、克く宗家の爲めに、献身的努力を竭した事ぢや。元就の遺誠も、當人の註文以上、其の効果を來たした。されば輝元も、二叔に向て、『向後は御方御事、親にも、兄弟にも相頼入候條、當御指南願申候。』〔吉川家什書〕と信賴して居た。斯る次第であれば、元就没後の毛利氏は、愈々其の四隣に向て、領土を擴張した。

元春山中幸盛を降す

元龜二年六月、元春は尼子勝久退治の陣中に於て、父の訃音に接したが、佛事葬典には、輝元、隆景あり。吾は敵を麿にして、父上の靈を慰め申さんと、山中幸盛の末石城を攻め、遂に幸盛を出降せしめた。

山中幸盛の逃走

鹿之助(幸盛)に、番衆をば付置被申候處に、鹿之助己が股をつき血を出し、痲病相煩ひ候通申候て、晝夜數十度通ひ申候。番の者初めは念を入候へ共、後は草臥寝ぶり油斷仕候節、雪隠の樋をくゞり、かひおち脱落候て、大山の麓を通り、美作へ逃申候。……鹿之助事、武勇は申すに不及、一番男にて、平人よりは乳より上高く御座候由に候。器量骨柄勝れたる侍に候故、男ぶりにほれられ候て、如此にて可有之候。〔吉田物語〕

出雲伯耆を再び恢復す

彼は山中幸盛を取り逃したが、其の八月には、新山城を攻めた。尼子勝久は敗走の餘、京都に匿れた。尼子氏に與して蜂起したる殘黨、何れも逃れ、或は降り、出雲伯耆は再び確實に、毛利氏に恢復せられた。

毛利氏と

今や毛利氏は、山陰、山陽に蟠まり、伊豫の河野氏を附庸とし、四國に臨み、九州に

大内氏の故轍

於ては、豊筑に於て、大友氏と對峙し。曾て大内義興が、周防より上國に出で、威を振ひたる故轍を、繰り返す可き資格を具有した。

一個の勢力、宇喜多直家

此の場合に際し、備作の間に於て、一個の勢力が出来た。それは宇喜多直家である。宇喜多氏は、三宅氏で、兒島高德より出でたと稱して居る。〔野史〕されど直家は、兒島高德の如き、單純なる忠臣ではなかつた。彼は元龜、天正の日本武士よりも、寧ろ中古の伊太利小領主を、聯想せしむ可き、極めて喰へぬ男であつた。若し眞面目に歴史の傳ふる所を信せば、彼は罪惡の肉塊と云はねばならぬ。彼の父和泉守能家は、浦上村宗に仕へ、其子宗景に殺された。彼は十八歳にて、宗景に仕へ、嬖幸せられ、漸次出身して、岡山を取り、此に城を構へた。彼は詐術を設けて、多く封内の諸豪を殲し、其の領地を我有とした。永祿四年には、其主浦上宗景を、天神山に圍み、宗景は讃岐に奔つた。直家は此に於て浦上氏に代りて、備前の領主となつた。

直家は罪惡の肉塊

直家と備

當時三村家親なるもの、毛利氏の手先となり、美作、備中に徇へた。直家は、其臣遠

中美作の併呑

藤河内守を、故らに勘當して浪人たらしめ、由りて家親に近かしめ、狙撃して之を斃した。直家は又た岳父美作の豪族、中山信正を殺し、其の遺言と稱して、其邑を併せた。而して美作半國の領主後藤美作守を誘うて、女婿となし之を毒殺した。又た其の姉婿の谷川久隆をも毒殺した。而して備中、美作を併呑し、儼然たる一勢力となつた。

三村と宇喜多

されば三村家親の子元親、實親兩人より、宇喜多退治の助力を、毛利家に向て乞うたるに、直家は却て『安國寺を馮み、小早川殿へ云入れけるは、備中の三村一族を、某に仰付られなば、早速討果し、備中一國を、毛利家へ差上べし。御心許なく思し召されなば、御望次第人質進上致すべし。』〔溫古私記〕と申し入れた。

惠瓊と宇喜多

毛利家にては、舊誼よりすれば、三村を助く可きであつた。されど安國寺惠瓊等は、宇喜多を引き立つるが、毛利家の弓矢のはか行く所以として、巧に事實を捏造して、三村が三好義繼に通じ、毛利家に不利を謀る旨を、輝元に告げた。此の如くして宇喜多氏は、遂に毛利家の與國となつた。

毛利氏の勢力

されば毛利氏は、防州より備州迄、陸上の通路に、何等の支障なきに到つた。海上に於ては、下ノ關より大阪迄、全く自由であつた。若し毛利家に信長程の氣量ある人あらば、天下は何れに屬するや、未だ知る可らざる形勢であつた。

浦上宗景並宇喜田直家事

浦上氏の來歴

備前國和氣郡佐伯の天神山の城主、浦上帶刀左衛門宗景が先祖を尋ねるに、紀氏の餘流より出で、長谷雄十八代の後裔也、文治の比、佐々木盛綱藤戸を渡し、時、紀氏の某矢石を争ひぬ、中古より赤松家の號令に進退して、軍功を數代の間に耀せり、赤松滿祐、義教將軍を弑して後、山名が爲に討たれてより、山名備、播、作を領せし時は、山名が命を受け、應仁に山名義替せしかば、浦上美作前司則宗、東山殿に昵近して、義尙公の時京都の所司代と成り、播州作州の中にて、食地多く賜はりぬ、是れ浦上の中興也、其子近江守宗助、京都に在りて、細川政元、同高國執事の時、軍功を建つ、其子掃部助村宗、其子宗景也、村宗が時、己が武威の盛んなるに驕り、赤松の家風の衰へたるを慢りて、永正十七年九月十二日、播州室の津に於て、赤松次郎義村を弑し、頓て領地を篡奪す、然れ共天八逆罪を免さず、程なく破を降し、天文元年（一本に享祿四年）に至りて村

四郎、先陣に進みて戦死せり、能家も今は生きて何かせんとて、長劍提げ戦ひければ、敵一場の間に打負け、瓜の如く潰えて引き去りける間、能家十死を遁るゝのみならず、數百人が首を得て、村宗の陣にぞ入りける、細川家臣河原林此由を見開きて、高國に告げ、る間、高國大に其功を感ぜらる、此外軍功勝けて計ふべからず、之に因て則宗、宗助、村宗代々の感状、幾通と云ふ數を知らず、されば兩虎の威を争ふは古今濁惡世の習ひなれば、大永の末、高島に在りける島村歡阿彌、宇喜田能家を誅戮す、其子興家は父能家に先立ちて死せり、興家か子直家、其時は當歳子にて有りけるを、母之を抱いて邑久郡砥石の城中を忍び出で、備前の福岡へ立越え、此兒の姨也ける禪尼の、四大寺と云ふ處に在りけるに預け置き、其身は浦上が所に宣せり、斯て彼の子十八歳に成りける時、世主人浦上へ愁訴して、簗仕せさせ、頓て元服して宇喜田直家と稱す、直家の父興家は、勇氣少く智も無かりし故、家年を逐うて、襄徴し、纔三百貫を領して、邑久郡音湖に居住せり、直家享祿二己巳年に出生す、幼かりし程は情靜に、鈍根に見ゆ、備後國に潜居せり、弟の忠家は、賢々しき性質也しかば、諸人は兄を誹り、弟を譽めけるに、家老に一閑と云る老人、否々直家は底心に一物有りて、徒人に非ず、將來は家を起し身を立つべき人也、忠家世智賢しと雖も、邪路あるべき人也と云ひしかば、果然て直家の代に至りて、備播作を掌中に運し、忠家は兄に對し義を失ふ事多かりし也、忠家の弟を春家と云ふ、直家に子無かりしかば、春家の子與太郎基家を養ひ

宇喜田直家生立の事

直家策略謀事

て子とす、直家死去十年前に、八郎秀家田産せしかば、基家を後見として三國の捷を助けしむ、始め直家一度家を興さん事を思ひ、宗景に仕へて奉公の勞を盡しける故、宗景の寵臣と成る、家領少く貧窮也けるに、能家已來の家人多かりければ、事用足らざりける間、失食と號して、一箇月に五三日諸士の月俸を闕如して、是を軍用の爲に城中に積措きけり、さるから岡、長船なごの家臣等も、年若かりし時は、盜なごして衣食を給ぎけるとかや、戸川秀安も、一度は渠等に誘引はれて、強盜に出でたりしが、律義第一の者にて、無益の死あるべしとて、思ひ止まりしと也、備前國御野郡野殿村富山の城主松田某、代々強勇にして、浦上則宗と年々干戈を争ひけり、中世松田の某法名蓮昌、津高郡金川に在りて、備前國を領したれば、直家威を争ひ難く思ひ、娘を以て渠に嫁せしめ、時節を窺ふ所に、松田が家臣市郎兵衛、同宗右衛門とて兄弟の勇者あり、先づ渠二人を討たずば功を建て難しと思ひ、金川にて鹿狩を所望しけるに、市郎兵衛は他處に行きて、宗右衛門狩場へ出でけるを、誰が仕業共なく斬殺しぬ、市郎兵衛も討手を遣しければ、行方知れず成りぬ、其後金川の城を夜討して、松田一家を誅殺し、其食地を押領せり、富山の城主富山某をも追落して、忠家を入城せしめたり、彼の市郎兵衛も後日に忠家に仕へけるとかや、宗景の臣に中山備前守、備前の沼の城に在りて、直家の舅也、渠宗景の命を輕んじける間、宗景、直家に誅せん事を令せらる、直家が云く、舅は其親しみ父に同じ、然りと雖も君命背き難し、爾らば島村歡阿

彌は吾が祖父の仇たり、是を討ちて舊領を得、吾が本懐にて候、請ふ此一儀を免許し給へ、さるに於ては中山を誅すべく候と申すに依りて、宗景其望みに任せられて、頼て島村を城中に呼び寄せ、直家にぞ討たせられける、直家、歡阿彌を討ちて、多年の讐を復し、舊領を奪返し、程なく中山を誅して、自ら沼の城に移居しけり、直家其身文通じ武達して、往々に軍功を建てたりければ、浦上甚だ感賞して、食邑なども年を逐うて加増しける間、後は富饒却つて浦上が右に出で、權威赫々と盛んなり、さる故一家中の士庶人等、皆直家が機嫌に違はじと譽諛崇敬す、直家、宗景の弟政宗と不和也ければ、頼て政宗、岡山の城主金光宗高と心を合せ、謀反を企つる由を讒しける間、宗景大きに怒つて、直家に政宗、宗高兩人を討たん事を命ぜらる、或時政宗、岡山に赴き、鷹狩して在りけるを、直家隙を圍ひ、夜中に岡山へ押し寄せ、宗高、政宗二人を討ちてけり、如此て岡山の城には、已れ遷居て、沼の城には、舍弟春家を置き、西大寺の八幡山には、忠家を處きてけり、さて年月を逐ひ、軍兵衆く附従ひける程に、備中國の伊賀左衛門を輩に取りて、後毒殺して遂に備中國を切り取りけり、夫より作州を領せんと思ひけるに、後藤美作守高光、同國海老の城に在りて、至剛にして、輒く討ち難く覺えければ、姉を以て彼に嫁す、(一日以彼娘自妻之)他日毒殺しける間、作州の諸士多くは味方に降りけり、是に於て上山の城には、延原彈正少弼を置き、荒神山に花房助兵衛直次、湯山の城に宇喜田平右衛門盛重、此外長船、明石、岡、國富、高昌などに、諸所の城を

直家逆心を謀る事を

與へて守らせける間、威光年々に盛ん也、されば大臣權を得る時は、驕奢の志忽ち生じて主を弑し、國を奪ふの階と成る習ひなれば、直家いつしか不忠の心起りて、主の浦上を弑し、國を掠奪せんと思ひければ、流石其辭の無かりける故、如何せんと思惟、籌量の心を熱す、其比亦松晴政が孫義祐が嫡子、刑部少輔則房、浦上が爲に國內を狭められ、僅播州置鹽近郷を領して、蟹居の體にて在りければ、直家彼と心を合せ、後循にせばやと思ひ、或時中村七郎右衛門を置鹽へ遣はし、浦上事近年甚だ奢を極め、國政正しからず、斂を厚うし、役を滋くしける故、諸民困乏す、讒臣の口を信じて科なき諸士共或は籠居、或は切腹せしむる事、其員を知らず、其直家に對しても、亦非禮不義度々に罩おほびて候ひつれ共、君こそ正使君たしひならず共、臣は争か臣たらざらんと存じて打過ぎ候ひし所に、今ははや難儀身に逼り候ふ間、近日押し寄せ殺害仕るべきにて候、公も亦彼が八逆罪定めて疾しと思召すらんに、此時大勢を出され候はゞ、吾等先鋒に進みて一戦の下に打捕り候ひなんざとぞ、進めける、赤松は渡口に船を得、早天に雨に値ふ心地して、聊かの思惟にも及ばず、即ち同心して、則房、次男藏人則治、三男助五郎則祥、家人に宇佐美三郎大夫、上月新太夫、福岡喜平次、上原彌七郎等究竟の兵、三十騎を引率して、宇喜多と一手に成り、九月廿一日、備前國金川に至り、其夜浦上方の出城、鷓垣山を燒討にし、敵兵鹿子半十郎、同孫平、長川十太夫已下十三人討取りければ、殘黨悉く金川へ逃入りけるを、時を易へず押し寄せ、晝夜を分たず攻めたりければ、

沼本景直の事

れば、浦上堪へず城を落ちて、天神山へぞ入りにける、直家は北ぐるを逐うて押し寄せんと欲しけれ共、敵兵衆多にして、天神山地の利堅固なれば、力攻にして叶ふべからず、如かず計策を先にせんにはと思案を易へ、身を帷幄に屈して、心を彼此の間に馳せ、千計百方深きを釣り遠きを致しける所に、宗景が家臣の作州大庭郡久世の多田山の城主、沼本新右衛門景直とて智深く勇勝れたる士あり、直家謂へらく、枝葉枯るゝ時は其根仆る、景直を亡さば、宗景が一臂を斷つが如くにして、遂に其身泯滅の端と成るべしと、工夫して、景直反心を懷く由、間者を以て云ひ傳ふ、されば國家の亡泯は人を亡ぼすに在り、宗景が家系の斷絶すべき先表にや、此由を聞くや否や、讒舌虚浮の是非をも糺さず、大きに怒り、已に景直を誅せんと擬す、景直もせん方なく國を去りて、九州に流離し、夫より又四國に寄寓の縁を求む、直家渠が才智勇猛をば兼て能く知りつ、頓て招き寄せて交を堅くし、播州野中の城をぞ預け、宗景如斯と聞き、景直實に逆心なくば、退いて其旨趣をこそ斷るべきに、大不忠の國敵哉、從來直家に一味せんが爲の逆意にて有りつると覺えたり、惡き景直が行迹哉、急ぎ野中の城を攻め落すべし、直家後詰せば、それこそ幸ひなれ、吾自ら打出で、二人ながら討捕るべきぞとて、先づ片桐與兵衛に、浦上權平、明石十兵衛等二千餘騎相副へて、野中の城へ差向けたり、片桐等其日は彼の城三十町を隔て、屯を張り、明朝押し寄せんと議する所に、景直は軍政有功の侍大將なれば、敵の機を察し其夜二百餘騎を帥

浦上宗景遂に没落す

ゐて、却つて逆寄にこそしたりけれ、片桐等敵の寄すべしとは思ひも寄らざりし折なれば、殊の外に周章して、忽ち一戦に切り立てられ、東に走り西に惑ひて引いて行くを、追懸け追詰め究竟の兵數十人討取りけり、直家破竹の勢ひを迎へて天神山へ押し寄せ、忽ち三の城戸を乗り破り、其後毎度の戦ひに利を得たり、直家彌計謀を運しける程に、宗景が家臣明石飛驒守景親、同三郎左衛門景季を始め、宗景が嫌疑の爲に身の置所を失ひ、城中を出で、敵と成り、或は又討果さるゝ者も多かりければ、今は諸士皆誰か科なき斬害に逢はんずらんとて、各々縁を求め便を得て、蜘蛛のごとく散失せける間、宗景も今は謀盡き、途窮り、せん方なく主従八人にて城を出で、播州室の津に幽居せらる、其後讃岐國の鹽飽島に渡りて、佐々木美作守に寄食せられけるが、妹尾某なご一味して、備前の兒島、或は播磨の家島(今曰江島是也)の兩處に新城を築いて楯籠り居られけるを、直家が養子與太郎基家、度々押し寄せ攻め戦ひ、一旦は城中勝利を得て、基家も討たれたりしが、畢に宗景敗績して某年三月十五日兒島に於て、宗景、直家が爲に弑せられけるこそ無慚なれ、かゝれば備播作の三州は、兵を鈍らさずして直家が掌握にぞ入りける、是れ宇喜多が重罪彌天也と雖も、併しながら宗景、主人赤松が國を奪ひて因果感應の致す所なり、而して赤松又主君義教公を弑し奉りし滿祐が餘殃永く在りて、天手を浦上に假りて以て喪を赤松の家に降す事、歴々として明か也、是を以て之を思ふに、直家が身上危殆恐るべしと、諸人一同に

因果感應の致す所の

吉川元春の述懐

三村浦上
宇喜多
毛利家

元春曰く
直家は表
裏第一の
倭人なり

備中國松山の住人三村備中守家親、去ぬる永祿九年二月宇喜多直家が謀に因て、遠藤又三郎に討たれて後ち嫡子修理亮元親、次子孫次郎實親は、吉川元春の手に屬して父の仇直家を討んと欲しけれども、二人未だ幼少なれば、姑く時を待て成長の月日を送りけるが、元龜元年に至りて直家退治の事を思ひ立、元春へ使を參らせ援兵を借んとす、其頃浦上宗景も家臣直家に國中を押領せられて蟄居閉塞して在りければ、此恨を返さんと輝元へ使札を馳せ、直家が不臣の罪を鳴して誅伐の兵を乞んと議せり、宇喜多直家は是を聞て毛利家と中違ひて悪かりなんと思ひ、急ぎ洲渡隼人入道如慶を隆景へ參らせ、又安國寺を深く頼み、三村浦上を付て備中一國を輝元へ進上仕るべき由申訴へけるに、元就朝臣は御老耄の上に嘔の崩御座しければ、唯太抵許りを聞召、元春隆景能に計らひ給へと宣ひけり、此事今年春夏の間雲州に於て僉議是ありと雖も、輝元より南方の兵事は隆景の計ひに是ある可しと宣ふに因て、隆景遂に三村浦上を棄て直家に力を合せられけり、元春宣ひけるは直家は表裏第一の倭人なり、毛利家の扶助を得て自敵を亡すと雖も、己が武威強大に成りて後は、

終に當家腹心の讎となる可き事掌を指して覺えたり、三村家臣は元就安藝半國を領し給ひし時より幕下に屬し、所々にして忠戦を抽て備中の庄資○高を歸服せし故、毛利家の兵威東西に蔓延し、備中備前播磨美作の四州靡然として風に嚮ひしぞかし、是偏に家親が功に非らずや、恁る忠士の子孫を捨て、奸人の直家を容らるゝこそ心得ぬ、吾當國に在らずば元就公に此事を直に申さん、ヨモ三村をば見捨て給はじ、左れども御老耄に御座せば、恁る理も開分させ給ふ様には渡らせ給はじ、是に付思ふにも元就斯く老衰し給ひぬれば、以來毛利家の弓箭盈るを闕なるべしとぞ宣ひける、「藩鑑引」陰徳太平記」

【七七】 織田氏と毛利氏の接觸 (一)

織田毛利
兩氏の勢
力接觸

織田氏と毛利氏とは、全く風馬牛相及ばぬ關係ぢや。一方は尾張であり、他方は安藝である。其間には幾許の長亭、短亭がある。然るに此の二氏が、各々其の勢圍

を擴張し來りたる結果は、端なく其の接觸を餘儀なくせしめた。織田氏の勢力は、西下して、播磨、但馬に及んだ。毛利氏の勢力は、東上して、備前、因幡に及んだ。彼等は思ひ掛なくも、隣國となつたのだ。戰國の世の中では、隣國は即ち隣敵だ。接觸は即ち衝突だ。兩勢力の間に、備前に宇喜多氏あり、因幡、但馬に山名氏あり、播州に赤松氏の一族あるも、彼等は兩勢力の何れにか、附庸たるに過ぎぬのだ。

毛利氏の持重政策

元就歿後の毛利氏は、彌々持重政策を取つた。兩川は決して、輕舉妄動して、宗家を孤注となすを、敢てせなかつた。彼等は固より、上國に於ける織田氏の勢力の、日一日と西方に向て、侵蝕し來るに氣附かぬではなかつた。されど直ちに、此の勢力と衝突するは、彼等が最も避けんとしたる所であつた。

信長と其周圍の敵

信長も亦た然りだ。彼は其の周圍に、多くの敵を持つて居た。背後には上杉氏と、武田氏とあつた。北條氏とても、全くは油斷が出来なかつた。大阪には、本願寺があつた。紀州には、雜賀、根來があつた。大和には、松永久秀があつた。四國には、三好、細川の殘黨や、長曾我部があつた。斯る場合に於て、中國の一大勢力たる毛利氏

當座の間和親の假相

を、當面の敵とすることは、信長の最も避けんとしたる所であつた。此の如く毛利も、織田も、互ひに眞甲まつかぶから打ち、衝かるを、好まぬ場合に於ては、當座の間、和親の假相を來たすも、亦た已むを得ざる次第と云はねばならぬ。斯る手段にかけては、信長は天成の外交家ぢや。信玄も、謙信も、足利義昭も、何れも此手で信長から、一杯喰はされた。矧んや毛利氏をやだ。然も毛利氏の方よりすれば、寧ろ信長に一杯喰はしたと云ふ可きであらう。

義昭との葛藤に毛利氏の調停上京

彼等は互ひに書信、音物を交換し、與國たらざる迄も、隣好を修めて居た。されば信長と、將軍義昭との葛藤に際しては、輝元は林木工允、安國寺惠瓊、元春は井下左衛門、隆景は兼久内藏丞を使として、天正元年十一月上京せしめ、佐久間信盛、木下秀吉、朝山日乗に由りて、其の調停を謀らしめた。信長亦た之を容れ、日乗、秀吉、惠瓊をして、義昭に説かしめたが、義昭は、信長先づ質子を容れ、誠を致せば、和せんと云ひ、強情を張り通して、不調となつた。毛利氏は、義昭の來り倚らんことを懼れ、惠瓊をして、その豫防策を施さしめた。

吾は東國
君は西國

信長は、毛利一家を代表したる、四人の使者に對し、吾は東國を治め、輝元は西國を治め、兩旗にて天下の政を布く可しと云うた。而して信長は、輝元へ名馬を贈つた。〔吉田物語〕安國寺惠瓊が、歸途宇喜多直家見舞の次、十二月十二日（天正元年）附を以て、兩川に與へたる書中に、

惠瓊の兩
川に與へ
たる書簡

扱此上にて、自然西國などへ御下向候ては、一大事たるべく候。能々御納得承りすへ候て、可罷下と申上候へば、西國へも唯今の分は、礮と御下向有間敷候。紀州可有御滯留候。

とあり、義昭が漫りに西下せざる趣を、確めて居る。又た

備播作の朱印、宗景へ被出候も、對藝州進之由、殊の外の儀に候。

とあり、此れは信長が浦上宗景に、其の舊領播磨、備前、美作の朱印を出したるも、單だ當座の事にて、結局は之を毛利家へ進ずるとの意味である。又た

山中鹿之助、柴田に付候て、種々申候。是又耽と許容有間敷候由、朱印出候。

此れは山中幸盛が、柴田勝家に倚り、織田氏の力を藉りて、尼子氏の恢復を謀ら

惠瓊の用
件と使命

んとするも、信長は之を許容すまじとの事だ。

此の書中によりて見れば、安國寺惠瓊は、單に義昭、信長の調停のみならず、種々の外交用件を帯び、逐一其の使命を、果たしたるものと思はるゝ也。當時信長には、尼子氏の殘黨浦上氏の一類、附き纏うて、何れも毛利氏に對して、不利を謀る有様であつた。されば惠瓊の骨折は、一通りや、二通りではなかつた。

〔七八〕 織田氏と毛利氏の接觸 (二)

隆景信長
秀吉に應
援を求む

織田氏と、毛利氏とは、表面何等の異狀がなかつた。天正元年、吉川元春が、其の居城富田を出で、其子元長と與に、因州を略し、但馬に入らんとするや、小早川隆景は、書を信長、及び秀吉に與へて、其の應援を求めた。秀吉は、信長の意を承けて、京畿鎮定後、出兵を約したが、其期後れたが爲めに、元春父子は富田に還つた。

但州の儀、來二月羽柴藤吉爲大將亂入の儀定候。唯今も半國程は、羽柴へ御行候。來春御延引候ては、不可然候。此御分別專一に候。

殆んど與國同然の狀態

とは、天正元年十二月十三日附、惠瓊の書中の一節なや。即ち天正二年二月には、秀吉但馬に打入るに付、毛利家よりも、時機を逸せず、出軍せよとの注意なや。當時織田氏と、毛利氏との關係は、殆んど與國同然の狀態であつて、何等其の交情を乖離せしむ可きものは無い様であつた。

禍機の潜在と義昭の書簡

然も禍機は、隨處に潜在した。その重なる一は、義昭であつた。彼は毛利氏よりも、頻りに敬遠せられたるに拘らず、厚顔にも天正三年二月、紀州より備後鞆津に推參した。而して彼は兩川に向て、左の如き書簡を送つた。

度々下向之事、雖申遣、織田依相談加思慮之由、被聞食訖。然者信長對輝元、逆意無其隱候、先至當國相越候。委細申、含上野大和守、小林民部少輔、遣之候。此度加意見馳走可爲神妙候也。

二月八日

義

昭判

小早川左衛門どのへ

吉川元春への書簡

又た吉川元春には、眞木島玄蕃頭の名を以て、

既信長對輝元逆意之段露顯條、先至備後鞆津被移御座候。此度被抛萬事、公儀御馳走候様、被加異見者、可被喜思食之通、尙得其意、可申由被仰出候。

と申し通じた。即ち從來屢々毛利氏に倚らんとしたるも、毛利氏は織田に對して、之を肯せなかつたが、最早織田が、毛利に對する敵意、分明となつたからには、左様の尋酌を要せず。因て此地迄出掛けたのだ。此上は宜敷盡力を頼むと云ふ意味だ。

毛利氏と厄介物の義昭

毛利氏は、飛んでもない厄介物に、引き掛かつた。されど彼等が義昭を容れたのは、窮鳥懷に入ると云ふ外に、尙ほ重大の意義があつた。そは申す迄もなく、信長との關係が、事實義昭の申す通り、逆意隠れなく、逆意露顯したからだ。而して此れは、信長が尼子氏殘黨を、庇護したる事實によりて、證明せられた。

尼子勝久

尼子勝久が、永祿十一年に兵を擧げて、雲州に入りたる際には、恐らくは信長と

と信長との關係

は、何等の關係なかつたであらう。然も彼は信長の先驅であると聲言した。野史其の天正元年十二月、山中幸盛、立原久綱等が、彼を擁して再舉を圖り、但馬に赴くや、信長の援護に俟つ所あつた事は、云ふ迄もない。彼等が天正二年正月、但馬より因幡に入るや、鳥取城主山名豊國は、嚮きに吉川元春に降りたるが、又た之に叛きて、勝久に與し、遂に彼を、鳥取城の二の丸に居らしめた。

信長の勝久援助と毛利氏

勝久は、鳥取城に在りて、國中の諸城主を招降せしめた。然るに天正三年二月、豊國の家人森下、中村等は、豊國の反覆恒なきを慨し、主人を強要して、再び欸を元春に通せしめ、勝久を追うた。勝久等は若佐城に據りて、豊國及び毛利氏の兵と戦うた。信長は書を但、因の諸豪に貽りて、尼子氏を援助せしめた。此の事實は内證事であつたが、寧ろ公然の秘密であつた。如何に樂天的に考へても、毛利氏は是等の事實を、無視する譯には參らなかつた。

表面上の織田氏と毛利氏

併し義昭を受け入れた事が、直に信長との手切とはならなかつた。毛利氏は相換はらず、表面は信長と好を通じ、天正四年の春には、元春は尙ほ信長、及び秀吉に、新正の賀詞を興へ、且つ聖護院道澄に向て、信長の尼子氏を援助したるを詰つた。道澄は又た信長の意を承けて、事實の無據なるを辯疏した。而して尼子勝久、山中幸盛は、吉川氏の爲めに其の若佐城を陥られ、重ねて相率ゐて京都に奔り、信長に頼つた。

【七九】 織田、毛利、及本願寺 (一)

表面尙ほ交親國の關係

織田と毛利とは、表面尙ほ交親國の關係を維持した。然も織田は陰に尼子を助け、毛利は陽に義昭を容る。其の早晚衝突の來る可きは、何れも覺悟の前であつたであらう。吉田物語には、『公方御没落候て、無餘儀御頼候を被仰切候事も難被爲成思召候。以來世上のとなへも有之時は、御弓箭の疵にも可成候間、御領掌の御請可被遊と被仰、御請被仰上候。』とありて、毛利家の面目上、餘儀なき破目

に陥りて、然く受け入れたる様であるが、此れは表面一應の理由で、其の裡面には、信長西下の勢力と衝突せねばならぬ情勢を、前知しての事であつたに相違あるまい。

背に腹の代へられぬ毛利氏

毛利氏は元就在世中でさへも、上國に出で、天下の政を専らにするの野心はなかつた。況んや其の死後に於てをや。若し信長にして、天下統一の大望なからしめ、中國九州を手に入るゝの底意なからしめば、毛利氏は喜んで信長の善隣たるを、甘んじたであらう。併し信長の勢力は、火の原を燎く如く、水の卑きに就く如く、高峰より圓石を轉ずる如く、我に迫まりて來りつゝある。勢ひ此に至れば、背に腹は代へられぬ。毛利氏は、其の全力を舉げて、織田氏と戦はねばならぬ。何となれば、戦ふは、守る所以であるからである。されば、義昭を容れたのは、信長と手切の原因と云ふよりも、我に手切の決心があつたから、義昭を容れたのだ。併し毛利家も、深慮者の寄合ぢや、自から露骨に、織田氏に向て、喧嘩を押し賣りするが如き事は爲なかつた。

本願寺は信長西下の第一線の難物

然るに茲に餘儀なき事情が出来た、それは申す迄もなく本願寺だ。本願寺は信長西下の第一線に横はる、難物であつた。毛利氏より見れば、對信長の前營である。若し本願寺にして、一たび信長に叩頭せん乎、其の影響は、直ちに毛利氏に及ばねばならぬ。所謂唇亡ぶれば齒寒しとは、毛利氏と本願寺との關係ぢや。信長と本願寺は、元龜元年以來、猿と犬との間柄だ。爾來且つ戦ひ、且つ和したが、双方の心は、始終讎敵であつた。天正二年の四月、本願寺が一揆を募りて、織田氏の屬城中島城を陥れて以來、三好の殘黨之に與して、一時猖獗を極めたが、信長が悉く之を蕩平した爲めに、本願寺は孤立の姿となつた。されば天正三年十月、三好笑岩、松井友閑の取成にて、信長好物の名書三點を献じ、赦免を請うた。然も是れ唯だ一時の氣體にして、本願寺は淡路岩屋なる、瀬戸内海の咽喉を扼しつゝ、頻に毛利氏に向て、其の來援を求めた。而して此れが宛も、義昭の來投と時を同くした。

本願寺は毛利氏に來援を求む

相換らず

炯眼なる信長、いかでか此の事情を看破せざる可き。彼は天正四年四月、明智光

願寺の苦手本 秀、細川藤孝、荒木村重、原田直政等をして、之を攻めしめた。然も信長に取りては、本願寺は相換らずの苦手ぢや。

五月三日早朝、先は三好笑岩、根來、和泉衆、二段は原田備中、大和、山城衆、致同心、彼木津へ取寄候之處、大坂らうの岸より罷出、一萬許にて推つゝみ、數千挺の鐵砲を以て、散くゝに打立、上方の人數くづれ、原田備中手前にて請止、數刻雖、相戰、猛勢に被取籠、既に原田備中、塙喜三郎、塙小七郎、寢浦無右衛門、丹羽小四郎、枕を並て討死也。〔信長公記〕

本願寺の富力と

本願寺の信仰力は、其の兵士を決死的ならしめた。本願寺の富力は、精銳なる武器に充實せしめた。信長の常勝軍も、上の如き敗北を來たし。然も此に止らず、其儘一揆共、天王寺へ取懸、佐久甚九郎、惟任(明智)日向守、猪子兵介、大津傳十郎、江州衆楯籠候を取巻攻候也。〔信長公記〕

此の危急の注進に接したる信長は、五月五日、京都より『御馬を被出、明衣之仕立、纔百騎許にて若江に至つた。』即ち彼は袂を拂うて起ち、鞭を揚げて奔り著

けた。

【八〇】 織田、毛利、及本願寺 (二)

信長小兵を以て大敵と戦ふ

信長は駈け附けたが、後に續くものが少ない。彼は味方の勢揃を待てば、天王寺城の陥落の虞があり、さりとて救はんとすれば、兵數が不足だ。されば彼も、『攻殺させ候ては、都鄙之口難、御無念之由、被成上意、五月七日、御馬を被寄、一萬五千許の御敵に、纔三千許にて被打向。』〔信長公記〕とある通り、茲に大決心をなし、三千の小兵を以て、一萬五千の大敵に打ち衝かつた。彼は兵を三段に備へ、第一段を佐久間信盛、松永彈正、細川藤孝等とし、第二段を瀧川蜂屋、羽柴、丹羽、稻葉、氏家、伊賀等とし、第三段には、自から馬廻を以てしたが、斯く月並的に、後陣に控ふるは、彼の屑とせざる所にて、

信長者、先手の足輕に打まじらせられ、懸廻り、爰かしこと被成御下知。薄手を負せられ、御足に鐵砲あたり申候へども、天道照覽にて不苦。御敵數千挺の以鐵砲放つ事如降雨、雖相防、瞳と懸り崩、一揆共切捨、天王寺へ懸入、御一手に御成候。〔信長公記〕

信長の挺
身奮闘と
快勝

當時の信長は、桶狭間の時代の信長ではなかつた。彼は既に四十三歳の中老である。彼は既に大納言、右大將の雲上人である。彼は既に日本全國中に於ての、第一等の國持である。然るに彼は先手足輕に雜りて、鐵砲玉に中りつゝ、重圍を破りて、城中に入りたるが如きは、冒險と云へば、餘りに冒險である。然も彼は此にて慊らず、更らに城を出で、寄手に大打撃を加へ、快勝を博した。

各御身方無勢候間、此度者御合戰、御延慮尤之旨、雖被申上候、今度間近く寄合ひ候事、與てんのあたよる天所の由、御詫候て、後は二段に御人數被備、又切懸り追崩し、大坂城戸口迄追付、頸數二千七百餘討捕。〔信長公記〕

大阪城の

斯くて彼は大阪城の周圍に、十箇所の附城を設け、之を遠捲きに捲き、持久の策

攻圍と遠
捲き

を以て、之を死地に陥れんとした。此に於てか本願寺は、毛利氏に向て、其の應援を催求し、哀求した。然も特に急需なるは、兵糧であつた。

毛利氏糧
を大阪城
に入る

城兵兵糧無之、籠城難續に付、此御方へ兵糧御見續被下候様にと頼み被申候。其次手に、萬端御武威を以て、遂本意度存候、偏に奉頼の通被申越候。〔吉田物語〕從來援兵を出し澁りたる、毛利氏も、最早坐視する譯には參らぬのだ。されば毛利氏は、一方には武田勝頼、上杉謙信等に書を與へて、信長の背後を襲はしめんとし、又九州の松浦鎮信、龍造寺隆信等に向て、其の水軍の準備を整へしめ、而して自から伊豫の河野通直を誘ひ、能島、來島の船手、及び毛利氏の將兒玉就英、小早川氏の將、浦兵部等をして、糧を大阪城に入れしめた。

兵糧船六百餘艘、警固船三百餘艘、被差上晝夜急ぎ申候故、七月上旬に播州室の津へ著船仕候。信長よりも木津川口に、大船懸置、其外兵船三百餘艘にて、兩國よりの通路を差ふさがれ候。〔吉田物語〕信長側でも、決して警戒を怠つた譯ではなかつた。されど水軍には、上方勢は素

毛利軍と突進方略の實行

養少く、中國勢は平生の嗜み多く、

敵船の働を試みんとて、射手船五十艘にて呼引せければ、敵船も漕出しせりあひ迫合候。……兎角無二に押掛切取申すより外は、御座有間敷と一決仕り、三百餘艘の射手船を押立て、其跡に兵糧船を引付、大坂川口へおし懸候。〔吉田物語〕

此の如く毛利軍は、突進の方略を實行した。

敵船の大將共下知仕、三百餘艘の兵船を押出し防戦仕候。中國船手の者共は、船軍は馴候故、次第に敵船をせり込候。〔吉田物語〕

形勢愈々急迫

形勢は愈々急迫となつて來た。

爰に大船一艘此方の船に向ひ、真先に進み働き候。村上八郎左衛門自分の乗船を押立させ、急に敵船へ押掛候。……其まゝ押付候處に、鐵砲をそろへ打立候故に水主共打ちめられて三四間程退候時、八郎左衛門聲を揚げて、船頭船子どもに、何とておくれ候哉、臆病者共とて叱り申候へば、其勢ひに船を件の大船へ押付候。一番に八郎左衛門乗込候處に、鎗を以て股を突れ候へ共、事

毛利氏第一著の勝利

ともせず、其敵を鎗にて突伏、首を取り、家來の侍一時に乗込、船中の者共を不殘切伏、終に大船を乗取。〔吉田物語〕

既に第一著の勝利を得た。此より勝に乗じて、織田方の兵船を塵にし、首尾善く、兵糧を大阪城に入れた。此れが毛利對織田の、最初の戦争であつた。而して其の勝利は、案外にも毛利方に歸した。

【八一】 毛利、上杉、及び信長

毛利氏水軍の勝利と否信長黨の影響

毛利氏水軍の、大阪川口に於ける勝利は、多大の影響を、否信長黨に及ぼした。本願寺は此によりて、蘇生の思をした。近畿、及び東中國の諸豪は、竊かに欸を本願寺に通ずるに至つた。毛利氏は更らに武田勝頼、上杉謙信に書を與へて、信長挾撃の舉を催告した。

毛利氏の上杉氏と
與へたるに
書翰

先月捧書狀候處、爲御返書、去六月十一日芳墨到來致拜見候。誠以珍重之至候。如仰就公方様御動座之儀、致御請趣得御意候。喜御懇被仰下、畏入候。抑貴國賀州被成、御和融、當秋可被及御行之由、尤肝要存候。從上意様、去比以上使被仰進之條、漸可爲著國候。彌被應御下知、御馳走此節候。將又此方事至大坂、諸警固船差上、於木津河口、去十三斗、敵船切崩、千餘人射捕之、至寺内、兵糧入置之、得大勝利候。先以本望存候。西口之事如此、無寸暇相催候。早々賀州被仰談、御出馬不可有御遲滯候。於然者、此御報嚴重示預、尙以當方海陸軍方不可有油斷候。猶小早川、吉川並老共可窺貴慮候。恐惶謹言。

八月二日(天正四年)

輝

元

上

杉殿 參人々々中

元來謙信は、本願寺門徒と、加賀、能登の間に於て、相戦うた。然かも足利義昭は、本願寺と、謙信とを握手せしめて、信長に當らしめんと欲し。天正四年五月、調停の功空しからず、兩者の和親成立した。而して謙信未だ陽には、信長と絶たず、され

毛利上杉
兩氏の同
盟成立

ば信長の本願寺と戦ふや、亦た謙信に向て、其の應援を求めた。然も謙信と、毛利氏との同盟は、六月に於て成立した。六月十一日附、謙信が小早川隆景に與へたる返書は、正しく謙信が、北國の門徒と和睦し、大兵を提げて、當秋入京す可しとの意を告げた。輝元の前書は、再び此に對する答簡で、其の出馬の催告であつた。又た同じく吉川元春より、直江大和守に與へたる、七月廿七日(天正四年)附の書狀にも、『先月十一日之御書、今月廿三日拜見仕候。越賀被遂御和融、北國衆被召具、急度織田方分國可有御出馬之旨、被仰聞候。致承知。』とある。

當てにな
らぬ謙信

然も謙信は、毛利氏が當てにしたる程當にはならなかつた。是を以て翌天正五年三月、義昭は、信長が紀州雜賀征伐の虚に乗じて、出兵せんとを謙信に促がした。又た同四月、毛利輝元は、左の書狀を謙信に與へた。

爾來御無音之條、被成下御内書候。御面目之至候。抑信長到紀州雜賀、相働雖、送數日候。城郭堅固故、失軍利引退候。海陸依遠、即時懸付不討果、無念候。雖然、如令兼約候、此堺之儀、去十六日、令出張、近日到播州表、打越候。其表之儀、急度到越

江、御亂入肝心候。不可有御油斷候。猶吉事重疊可申候。恐々謹言。

卯月朔日(天正五年)

右馬頭輝元(花押)

謹上上杉彈正少弼入道殿

謙信先約
を果たさ
ず

されど謙信は、關東と北國との間を彷徨して、遂に先約を果たすことが出来なかつた。若し謙信が關東を當分抛却しても、長驅して、信長の背を擣くの快舉に出でしめば、信長は義昭の註文通りに、全く板挟みとなり、困却したであらう。然も謙信の低徊趣味は、信長をして、此の厄難より脱せしめた。

信長雜賀
を討伐す

信長は大阪本願寺の急に抜く可らざるを見て、其の手足を斷つ可く考へた。折しも紀州の雜賀、根來の僧侶、有田郡岩屋城主畠山貞政と相約して、本願寺に應じ、兵を和泉に進め、大阪と聯絡を取らんとした。此に於て信長は、天正五年二月、安土を出で、雜賀三城及び根來の杉坊衆徒を誘ひ、大兵を率ゐて、京都より河内を經、和泉に入り、兵を水陸の兩手に分ち、和泉を略し、紀州に進み、相合して雜賀を圍んだ。雜賀の首領鈴木孫市、要害に據りて能く防戦した。信長は此の久陣に

京都市民
に御所の
塙垣を築
かしむ

て、京都の人氣を腐らせんことを慮かり、京都市民を誘うて、御所の塙垣を築かしめた。

去程に京都には、雜賀表之儀、取く申に付て、且御祈禱且禁中御修理成就日出度之間、村井長門守馳走仕、内裡御築地浴中として被築候て可然之由候處、上下最も一同之御請也。即村井長門警固仕。

三月十二日より、番くにつもり、請取之手前く舞臺をかざり、兒若衆、爰を肝要と花やかに花車風流を、我もくと出立て、笛、太鼓、鳴物之拍子を合、老若共に、浮立て舞躍し、御築地つかれ候。折節嵯峨千本の花、今をさかりと時めきて、花を手折、袖をつらね、舞臺の燒物衣香、撥當四方に薰じ、貴賤成群集見物也。抑御門、百敷之大宮人女御更衣等、かほど面白き御遊覽無之、各詩歌を遊し、御歡喜不斜、即時に出來畢。〔信長公記〕

雜賀一揆
の降伏

是れ所謂る人心をして、倦まざらしむる方便ぢや。而して雜賀の一揆も、鈴木孫市等七人、誓詞を出して、降伏したから、信長は三月廿一日に師を班し、三月廿五

日に京都に返り、同廿七日に、安土に歸城した。されば輝元が、『失軍利引退候』と、謙信に申し送りたるは、全く事實相違である。

第十七章 松永久秀

〔八二〕 松永久秀の謀反

意外なる松永久秀の謀反

久秀謀反の何の理由か

信長と本願寺とは、持久戦にて、中々埒明く可くも見えなかつた。然るに意外にも、案外にも、天正五年八月十七日、大阪押として、天王寺の附城に定番たる松永久秀、其子久通、大和信貴城に立て籠つた。信長は松井友閑をして、其の理由を質さしめ、所望を満足せしむ可き旨を諭した。されど敢て出で來らず、之を斥けた。抑も久秀は、何故に信長に對し、謀反したのである乎。一説には、信長が久秀を侮辱したからだと云ふことぢや。或日徳川家康、信長に謁したるに、座に一老人があつた。信長彼を指し、家康に云ふ様、此漢は松永彈正と申す者にて、人の成し難き仕事を、三個爲し遂げた。第一は、公方光源院殿を戕した。第二は、主家三好を滅した。第三は、南都大佛殿を焼いたと。流石の久秀も之を聞いて、赤面し、頭から烟

が立つた。「信長譜」此れも事實であらう。信長としては是れしきの皮肉は、云ひかねぬ。併し此が事實とすれば、元龜元年四月、金崎退却前後の事でなからねばならぬ。信長、久秀、家康の出會す可き機會は、此際より他にない。然るに當時より天正五年迄、足掛八年となる。如何に隱忍したとて、餘りに辛抱強い譯だ。

久秀謀反の眞因如何

果して然らば、久秀謀反の眞因は如何。第一は、彼が本來謀反骨のつツ張つた男だからである。第二は、彼が一山張る可き時期に投合したからである。彼は永祿十一年十月、信長の近畿平定に際して、投降した。而して元龜三年三月には、既に謀反した。然も同年冬には、多門城を献じて、再び降参し、天正元年正月八日には、岐阜に赴き、信長に謁した。

謀反僻の男

信長も彼を、調法の器と認めただであらう。左なくば謀反したものを、其儘寛容する筈がない。而して今回も、其の歸順を誘うたを見れば、久秀には信長も、少からざる未練があつたらしく思はるゝ。要するに彼は、謀反僻の男と云ふ可きであらう。

謀反の好潮合

將た若し謀反せんとせば、只今が好き潮合であつた。そは信長が宛も上杉と毛利に挾撃せられ、袋の鼠たらんとする運命に、瀕しつゝあつたからだ。而して織田勢の大半は、北國に働いて居た。久秀が志を義昭と通じて、此の狂言を企てたのも、彼としては全く無謀とは云はれまい。

彼は信長の先輩

彼は位置こそ卑けれ、信長の先輩である。彼は天文十八年(信長十六歳にて、家督相續の年)三好長慶に従て入洛して以來、永祿十一年、信長の義昭を奉じて入洛する迄、前後二十年に跨りて、中央舞臺の働き役者であつた。彼の眼から見れば、信長は兒曹であつた。彼が心にもなき追従を云ひつゝ、信長の前に膝行頓首し、信長に驅使、鞭撻せらるゝは、彼の中心樂まざる所であつたに相違ない。

山の全く外れたる久秀

併しながら彼の山は、全く外れた。毛利氏も、大阪川口水軍の一勝以來、急に攻め上る事もせず。將た謙信も、出馬しつゝ、と聲言しつゝ、も、廣告のみに過ぎなかつた。此に於てか久秀は、一手にて、信長討伐の大軍を、引き受けねばならぬ始末となつたのぢや。

久秀討伐の總督は信忠

久秀の謀反は、織田勢北國出兵中であつたから、討伐軍の發向も、自から延引した。其の總督は、信忠で、彼は九月廿七日、岐阜を發し、廿八日安土に著、十月朔日、安土を發し、同三日信貴城へ押し詰めた。北國表出張の諸勢も、同日歸陣した。又た久秀に應じたる片岡城へは、細川藤孝、明智光秀、筒井順慶等、十月朔日之を攻め、永岡與一郎(細川忠興)、同弟頓五郎(細川興元)、兄は十五弟は十三、未若輩にて、一番に乘入、内之者共つゞいて飛入、即時に攻破り天主へ詰寄、内より鐵砲矢數射盡し、切て出働事、火花を散らし、つばをわり、爰をせんと相戰。城主森、海老名を初として、百五十餘名討死候。…年にも不足、兩人之働無比類之旨、被成御感、忝も信長公御感狀被成、下、後代之面目也。〔信長公記〕

斯くて信貴城へは、北國勢の歸陣と與に、愈々總攻撃を開始した。

十月十日之晩に、秋田城介信忠、佐久間、羽柴、惟任(明智)、惟住(丹羽)、諸口被仰付、信貴の城へ被攻上、夜責にさせられ、防戰弓折矢盡、松永天主に火を懸燒死候。憐む可し、老猾なる彼は、城と與に灰となつた。

總攻撃と久秀の燒死

〔八三〕 松永久秀の死

久秀の死と世人の無同情

松永久秀の死に就ては、恐らくは何人も、涙を流す者はなかつたであらう。奈良之大佛殿、先年十月十日の夜、炎燒、偏に是松永云爲を以て、三國無隱大伽藍事故なく爲灰燼。其因果忽歷然にて、誠に鳥獸も足を可立地にあらざ、高山嶮所を、輒城介信忠、鹿之角の御立物、ふり立、攻させられ、日比案内者と聞し松永、無詮企して、己れと猛火之中に入、部類眷屬、一度に燒死。客星出來(此れは去る九月廿九日、西に當て彗星出でたるを云ふ。)鹿之角の御立物にて、責させられ、大佛殿炎燒之月日、時刻不易事、偏に春日明神の所爲也と、諸人舌を卷事。〔信長公記〕

是れは久秀が、大佛殿を燒き、春日明神の神罰を被つたと云ふ意味だ。又た一説

には、

久秀の保命に信長の贈賄の爲め

松永始終の行跡は、さながら狂人の如くにして、更に本心とも覺えず。凡人皇の初めより此方種々の大罪人は多けれども、斯る不覺悟の曲者、武士に於ては、其例なし。今まで命を保事、松永日比名器寶刀をあつめ、多く所持せし故ならんと、私語く人もありしとなり。〔總見記〕

久秀元來空前の大悪人なれども、彼が多く名器寶刀を所藏し、此れを賄賂として、信長に取入り、其の一命を、今迄繋ぎたるなりとの意味だ。此れは幾分か穿つた説らしく思はる。

久秀の落城の近因

久秀の落城は、其の援兵を本願寺及び雜賀に乞うたる使者が、誤つて佐久間信盛の陣に入り、此に於て信盛は信忠と謀つて、僞つて雜賀の使者として、百餘人を入城せしめ、二の丸に至る頃、城外より相應じて攻め、遂ひに之を陥れたのであつた。〔信長譜〕又佐久間は、此の刹那に於て、

平蜘蛛の

内々御秘藏の平蜘蛛の御釜、上様も常々御望候様に被思召候條、御出し候は

釜と久秀の首

ば尤に候。それにて滅し申事は、餘り本意なき次第と奉存候。右之通松永殿へ披露有之と覺しく、稍有て内より返事には、平蜘蛛の釜、つくもかみの茶入、是は後世まで持せ伽にと存候處、於安土の御城、御手前にて御茶下され候時、信長殿御意には、いつまでも御手前之つくもかみの茶入にて、數寄に相可申と被仰候とき、數寄屋新敷たて置、つくもかみにて、一服可申上と存候つるところに、その時分は、方々へ、御手遣ゆへ、打過申候間、つくもかみは安土の御城にて進上。平蜘蛛の釜と我等の頸と二つは、信長殿御目に懸まじきとて、微塵こッばいに打わる。言葉少も相たがわず、頸は鐵砲の藥にてやき割り、微塵にくだけ、れば、平蜘蛛の釜と同前也。〔川角太閤記〕

久通捕へられて殺さる

如何にも悲壯の話である。彼が子久通も、彼と共に死なんとした。然も彼は其子を叱して、逃れ出でしめた。然も久通亦た、捕へられて殺された。人は其の臆病を嗤うた。されど信長は、是れは久秀が、深き所存ありての事と云うた。〔信長譜〕又人質として、

久秀の子
二人も亦
殺さる

彼子共永原之佐久間與六郎所に預け被置候、京都へ被召上、未だ十二、十三の
 伴二人、何れも男子にて、死ぬる子みめよしと申譬への如、姿形心も優にやさ
 しき者共候。村井長門守宿所に留め、明日は内裡へ走入助可申由申聞せ、髮結
 ひ衣装も美しく改出立可然之由申候之處、それは尤之事、とても命御助は有間
 敷物をと申、兎角親兄弟の方へ文を遣し候へと被申候へば、硯を乞ひ筆を染、
 此上は親之方への文いらぬ由申候て、日比佐久間與六郎所にて、懇之情くれ
 く、難有と計遣し、其儘罷出、上京一條之辻にて、二人の子ども車に乗、六條河
 原迄ひかせられ候。都鄙之貴賤して見物仕候。色をもたがへず、最後おとなし
 く西へ向ひ、ちいさき手を合、二人之者共、高聲に念佛となへ、生害見る人肝を
 消、聞人も涙せきあへず、哀成有様、中々目も當てられぬ様體也。〔信長公記〕
 久秀の一族、渾て盡きた。但だ其の遺息に永種があつた。彼は七歳にして東福寺
 に入り、二句にして法華經を誦讀し、人之を稱して、文珠喝食ぶんしゅくしきと云うた。永種の子
 が有名なる聯歌師貞徳で、貞徳の子が、京都講習堂の主人、昌三である。極惡非道

一人の遺
息永種と
其子の貞
徳

の久秀に、此の如き名流が輩出したのは、聊か不思議と云はねばならぬ。

〔八四〕 松永久秀の性格 (一)

時代の兒
松永久秀

若し室町幕府瓦解より、徳川幕府建設間に於ける、過渡期の代表的策士を求め
 ば、其の善き側に於ては、竹中重治、黒田如水、小早川隆景等を推す可く、其の惡し
 き側に於ては、松永久秀を筆頭とす可きが如し。彼は實に時代の兒である。吾人
 は久秀を目録として、此の時代を讀むとが出来る。吾人は久秀を標本として、此
 の社會を觀るとが出来る。徒らに彼の姓名を、逆臣傳中に葬り去るは、決して史
 家の能事でない。

惡黨の成
功と傑出
の特力

彼が惡黨である事は、誰も異存はない。されど惡黨の成功するは、其の惡事の爲
 めよりも、其の傑出、特挺の力に由るものだ。久秀も決して尋常、凡庸の徒ではな

かつた。彼が京都西岡の賈豎より起りて、三好長慶に仕へ、遂ひに天下の大政を執り、約二十年間、日本中央の大舞臺の作者となり、脇役となり、立役となり。信長の入洛以來、足掛十年も、尚ほ有力なる大名として、寵用せられたるを見れば、彼が惡黨以外に、何物かを有し、且つ何物かであつたことが、思ひやらるゝではない乎。

傍若無人に於て、信長と共通性

彼は傍若無人に於て、信長と共通性を有した。彼は利害の打算以外に、何等の顧慮する所がなかつた。彼は衣冠を著けたる強盜であつた。此の時代の沒良心、無廉恥の荒れすさみたる氣質は、彼によりて最も完全に代表せられた。彼の惡事は將軍を弑し、主人の子を毒殺し、主家を滅し、大佛殿を焼いたのみではなかつた。彼は三好義繼の妻、左京大夫局を取つた。彼は帷帳を下だし、其内に於て、侍女數人と狎戯した。偶々事あれば、家人を帳外に召し、臥内より面を出して、指圖した。野史其の行狀は實に此の如く、人倫を外れて居た。

心計の巧

彼は上方者の習として、頗る吝嗇であつた。彼は心計に巧みであつた。彼は串梯

と築城の堪能

の串を丈長く作らせ、此を壁下地の材とした。彼は酒樽を脊高く作らせ、塀板とした。〔勇士物語〕彼が南都の多門城は、要害は勿論、三年の備を爲し、稻穂を積み、干飯芋莖、干菜、燒鹽、味噌、干魚、荒布、和布、海藻、藥種の類を蓄へた。薪は土居に築き、炭は地中に埋めた。〔南海通記〕彼が築城に堪能であつたとは、多門、信貴二城によりて證明せらる。彼が性格は、『其の性酷惡、詭譎にして、強慾なり。』〔日本西教史〕との評、簡にして要を得て居る。

惟高和尚の世辭

併し耶蘇教宣教師は、此の如き評語を彼に下したに關らず、相國寺惟高和尚は、松永秘藏の茄子の茶入の記を作りて、『松永彈正少弼久秀、握國家政柄、權威畏服。』と云ひ、『久秀德行所化、寶壺如意珠一去復還。』と云うて居る。『權威畏服』には、異存がない。併しながら『德行所化』は、全くの御世辭であらう。彼には如何に顯微鏡にて精細に見るも、德行の痕跡だも認むることは能はぬ。

狐の狡猾と狼の貪慾を兼備

彼には殆んど愛す可き性格を見出さぬ。彼は狐の狡猾と、狼の貪慾とを兼備して居た。彼には何等人心を繋ぐ可き、點弱はなかつた。若し弱點があつたとすれ

ば、それは強慾であつた。然も強慾は、人心を離散せしめて、決して人心を吸引する所以ではない。

彼が信貴城の堅固に拘らず、一週間にて落城したのは、天時は地利に如かず、地利は人和に如かず、彼が人和を得なかつたからであらう。彼の自殺した時には、國中の人民は簞笠を賣り、酒を沽て、松永滅却の祝をした。「勇士物語」悪黨にも可愛き悪黨もあれば、可憎き悪黨もある。久秀の如きは、最も可愛くない悪黨であつた。憎む可き悪黨であつた。而して是亦た、時代精神の一面を代表したものであらう。

可愛から
ぬ悪黨

作物記之事

或時作物の茶入茶びの袋を千の宗易利休居士を以藤重に被仰付し時。相國寺惟高和尙此記を書たりしと也。汝不知やと宣へば松永茶の會席にて一覽申つる。其は信貴の城にして燒失畢ぬ。其寫も御座有へく候。捧申んとて堺より取寄上奉る其記曰古諺云。夫物以遠至爲珍、事以稀見爲貴矣。茲有珍奇寶物、其體質也具軒后軒后皇帝之徳色、

惟高和尙
の作物記

其狀貌也類類積裏之彭亨焉。相傳曰。往昔中華京師蓬萊假山山山頂安置小寶壺、號如意寶珠、遠贈我扶桑國。以不詳年代爲遺憾矣。載在黃考口碑云。如意珠在梵曰摩尼、其祥瑞美德不可勝計焉。日本第一天下無雙之尤物、爲席上居奇貨也。小有四偶此者、是名小茄、較之則霄壤胡越而已。可同日言也耶。中間於此寶壺以有百關一數之事、而本古歌之意以名作物、易名無異論者乎。四肘弓量以齊、積樹倭朝俗呼曰御多羅オムラシ枝之流亞也。遞代大樹十襲秘寵焉、碌々賤輩介爾不得偷眼也。自異域跨歷萬里而至。寔以遠而珍以稀而貴者、夫是之謂歟。鹿苑相公向內野戰場之時、金甲裡繫之隨身、其御愛保重可知焉。近來慈昭相公以之忝賜山名禮部某、以男色寵幸故也。自後華夷攘搶、此寶沈淪落賈鬻手、淹委塵土、世所蹙頹慨喟也。先是天文丙申、台宗講徒、法中鬪諍鉢起亂、俗謂之京城寶玉燬焚分散、寶壺亦隱埋、殆爲可惜矣。有好事者千方百計、東討西討、不知所在、技盡于此矣。粵藤原朝臣松永彈正少弼久秀握國家政柄、權威畏服。繇是永祿戊午之春、偶有寶持寶壺至者、副以七寶台七臺也。玻瓈蓋天可謂摩尼寶長、在處衆寶悉集焉。且又妙典說云、無上寶聚不求自得、金言可徹矣。集以大威異哉慶幸之甚、蔑以加焉、可嘉可尙矣。竊按漢史、順帝朝孟嘗伯周任合浦守宰、爲人道德清行、革易前弊、去珠復還、欲也海底寶珠散在、於他海、或時孟嘗伯爲合浦官、稱爲神明、千古美事、昭々於簡冊矣。今也久秀德行所化、令時復寶珠悉還也、去來可見之、稱爲神明、千古美事、昭々於簡冊矣。今也久秀德行所化、寶壺如意珠一去復還、又玄奇又奇。不意日域海隅、復觀合浦孟伯周焉。秦始皇帝聞倭國有蓬萊仙嶋、遣來徐福求長生藥。徐福至于南紀之金峯、止于東駿之富士、指此等地以

爲蓬萊、蓬萊方壺皆爲神、仙一靈境也。當世韻人佳士、靡然嗜陸、桑、苧、盧、玉川之事業、家々人々、貯蓄十器一陶、晞顏、芋、葛、蘭、川子、川子嘗作茶歌、歌云、六椀通仙靈、七椀蓬萊在、何處焉。茶是仙家瑞草也。公官暇日、兵衛、書、戟、燕、寢、清香、與佳客會飲、賞味、壺中仙葩、茶異終日清談、消遣世慮、兩腋習々、身裡七十蓬萊、三萬弱水、不_レ移步而自_三山頂。延壽還童、顏色如桃花者必矣。然則此一壺者、如意上々寶珠也。世間綺羅珍玩、縱使積齊北斗、以可_三摩視塊看焉。珍重至祝。松氏需_三予記此事、予痴兀退納、不肯措片詞、命侍史、穎也、漫記之。

皆永午夷則如意珠日 萬年龜洋派下菓葉懶安叟〔信長記〕

〔八五〕 松永久秀の性格 (二)

憎まれ兒
世にはば
かるの實
例

併しながら彼は憎まれ兒、世にはばかる實例であつた。信長が彼に最後十箇年の壽命を、剩し與へたるは、彼を殺すよりも、彼を活かし置く方が都合善かつたからであらう。彼は實に眼から入りて、鼻から抜ける程の、利巧者であつた。信長

が未だ上京せざる以前に、既に信長には内通して居た。彼が如何程信長の爲めに努力したかは、分明でないが、金ヶ崎退陣の如きは、其の重なる一例と見るこゝとが出来た。彼は口先ばかりの上手者ではなかつた。彼は膽もあり、勇もあり、略もあり、如何にいやな爺おやぢでも、人材に絲目を付けぬ信長は、彼を捨てんとするも、捨て難き理由があつたであらう。そは必ずしも彼が信長の道樂たる茶器、名物、寶刀等を賄うて、其の驩心を繋いだのみであるまい。

久秀と人
明を識るの

彼が人を識るの明があつた事は、其の本多彌八郎(後に佐渡守正信)を評して、參河侍は、何れも武勇の輩のみであるが、獨り彌八郎は、強くもなく、弱くもなく、物事に飾なく、又た賤しからず、良とに尋常ならぬ器うつはであると云うた事で判かる。〔藩翰譜〕本多は一向宗騷亂以來、參河を出で、諸方に流浪したれば、或は一時は久秀の檐下のきしたに、身を託したこともあつたらう。乃ち本多も亦た、久秀門下の一人と云ひ得ぬ事もあるまい。

久秀信長

斯程に眼識があれば、信長を善く諒解し、腹心を竭して、彼に仕ふるこそ、彼の爲

を諒解せ

めにも得策であつたに。彼が屢々信長に反き、遂ひに慘死を遂げたのは、何故であらう。所謂る雀百迄踊り忘れずで、彼は其の謀反僻が、第二の天性を成したからであらう。彼は過渡期の人物であるが、寧ろ過去の代表者で、均しく過渡期でも、將來の代表者たる信長を諒解し、且つ信長によりて代表せらるゝ、新時代を諒解するには、餘りに過去に囚はれて居たのだ。

久秀謀反の罪は信長にも責任あり

併し謀反の責は、單に久秀のみに負はす可きでない。信長に謀反したものは、久秀のみではなかつた。淺井でも、本願寺でも、荒木村重でも、別所長治でも、最後に明智光秀でも、殆んど數ふるに違ない。假りに秀吉をして、信長の地位に在らしめば、果して此の如く多くの謀反者を出す可き乎。恐らくは此れは信長の性格に、一大陷缺があつて、此に至らしめたのであらう。吾人は久秀が山氣を出して、自滅したのを憐むと與に、彼をして斯る企てを、起さしめた動機に就ては、信長の方にも若干の責任あることを認めねばならぬ。

久秀の強

強情は好ましき性質でない、併し其度を過ぐれば、却て興味を惹く場合もある。

情と自殺
間際の點

久秀は六十八歳で焼死したが、彼は百二十五歳迄も長生する覺悟であつたらしい。彼は曰く、予は様々の工夫して、松蟲を三年迄飼ひ續けた、人間も養生次第では、長命疑ひなしと。而して彼の自殺に際して、彼は尙ほ灸療をした。

むかし松永、信長公に戰負けて自害に及ばんとせしに、百會ひやくかいに灸して云ひしは、此を見る人何時の爲の養生ぞやと、さこそ可笑しく思ふ可けれど、我常に中風を患へぬ。死に臨み若し卒爾に中風發して、五體心に任さずば、臆したりとや嗤はれなん。さあらんには、我今迄の武勇、悉く徒事となりぬべし。百會は中風の神灸なれば、當分、其病を防ぎて、快く自害す可きとの爲め也とて、灸を仕濟しすまして、腹切りしと也。〔備前老人物語〕

當世時代の
精神特徴

強情も此處に至れば、可憎の極、却て可愛きものとなる。周圍に頓著せず、名聞に拘らず、常規に泥まず。唯だ我が思ふ通りの事を、我が手一杯にやり、其の成敗の結果を、甘じて自から受くる氣魄、精神は、實に松永久秀によりて、遺憾なく發揮せられた。而して是れ實に、當世の時代精神と云ふ可き、特徴の一である。彼は實

に時代の兒だ、若し彼を罪す可くんば、併せて其の時代をも罪せねばならぬ。幽靈は白晝には出でぬ。

第十八章 中國役の起端

【八六】 信長の中國經略

中國軍の
總督羽柴
秀吉

信長の北國働らきを目途に、火事場泥坊を企てたる松永久秀は、事志と違ひ、天正五年十月に、焼死した。信長を恒に背後より脅かしたる、上杉謙信は、天正六年三月、病死した。されば信長最後の五箇年は、殆んど専ら中國の經略に消磨された。而して信長を代表したる、中國軍の總督は、實に羽柴秀吉であつた。要するに中國役は、時を以てすれば、織田氏に屬するも、人を以てすれば、豊臣氏に屬す可きだ。何となれば秀吉は、實に此役の中心人物であるからである。

中國經略
は信長の
未成事業

然も信長が、親征するを敢てせなかつたのは、背後に尙ほ武田勝頼があり、當面に本願寺があり、中間に荒木村重の謀反があつたからだ。而して一切の面倒を蕩除し、愈々全力を中國經略に致さんとする、親征の中途に於て、彼は端なく本

足掛六個
年の中國
役

能寺の難に罹つた。乃ち中國經略は、信長の未成事業だ。

中國役は、戦争として何等興味を惹くものが少ない。唯だ牛の涎の如く、長く久しきに互つた。即ち天正五年十月より、天正十年六月迄、足掛六個年に互つた。然も吾人は之を閑却する譯には參らぬ。事の起りは、織田と毛利との勢力衝突だ。其の成行は、既記の通りである。但だ此際に於て、双方の勢力如何を對照する必要がある。

當時毛利
氏の勢力

當時毛利氏の勢力は、頗る偉大であつた。其の勢圍は、安藝、周防、長門、備後、備中、美作、伯耆、出雲、石見、隱岐、因幡、但馬の十二國に跨り、二百萬石に近く、其の兵數も五萬内外であつた。而して此内には、瀬戸内海、及び山陰沿岸を警備する水軍も、含まれて居た。

毛利氏の
與國

毛利氏の與國としては、南中國に宇喜多氏あり、北中國に波多野氏があつた。宇喜多直家は、備前全部、及び美作十郡、播州西部の五郡に跨り、六十三萬石を領し、波多野秀治は、丹波廿九萬石を領し、其他伊豫の西園寺公廣、河野通直の如きも、

毛利輝元
と兩叔と
の戮協

毛利氏の幕下に屬し、村上、來島等の伊豫水軍は、恒に毛利氏を援助した。但だ毛利氏をして、背面防禦の必要を感せしめたのは、豊後の大友氏であつた。然も多く憂とするには足らなかつた。

天正五年には、毛利輝元は、廿五歳の青春で、藝州吉田城に、祖父元就の遺業を紹介し、兩叔の一なる吉川元春は、四十八歳にして、出雲富田城に在り、山陰道の探題たり。他の一なる小早川隆景は、四十二歳にして、藝州沼田城に在り、山陽道の探題であつた。而して輝元の兩叔に對するや、宛も其の父兄に對するが如く、而して兩叔も亦た、輝元を宗家として仰ぎ、此がために互ひに戮協した。

毛利一家
は織田氏
の勁敵

一口に云へば、毛利家は、毛利、吉川、小早川の合名會社であつた。此の如き一門兄弟、叔姪の協調は、古今の史乘に、殆んど比類少き美事なや。加ふるに毛利家には、元就以來の宿將、老兵、宍戸隆家、福原貞俊、桂元澄の徒、尙ほ少からず。何れも中國律義者の評判に負かず、義を守り、忠を奮ひ、織田氏に取ては、勁敵であつた。

織田氏は

然も眞に其力を角すれば、織田氏は毛利氏に比して、殆んど三倍に垂んとする

毛利氏三
倍の勢力

の力を有した。其の領土は、近江、美濃、伊勢、志摩、尾張、山城、大和、河内、和泉、若狹、越前、丹後、及び飛驒の南部、加賀の南部、紀州の北部、播州の東部に及び、其の石高は約五百五十萬石、其の兵數は十四萬に近かつた。

織田氏と
其敵

其の敵は、武田、上杉、本願寺、及び紀州の畠山真政等なれども、此が爲めに中國經略の兵力には、何等の不足を感せなかつた。而して當時信長は四十四歳にして、安土に在城し、其子信忠は二十一歳にして、岐阜に在城した。

秀吉は實
に四十二
歳

信忠は天正五年十月、松永久秀討伐の功によりて、從三位に叙し、左近衛中將に任せられた。信長は、其の十一月に右大臣に任じ、從二位に叙せられた。而して中國總督の秀吉は、實に四十二歳であつた。

〔八七〕 中國役の首途

秀吉の出
發と努力

秀吉は中國役の總帥として、天正五年十月十九日、兵を率ゐ、安土を發し、同廿三日、播州に入つた。秀吉は北國陣に於て、柴田勝家と衝突し、(?)無届にて引き上げ、その爲め一時信長の勸氣を被りたれば、彼は此の機會に於て、忠勤を抽んで、信長拔擢の知遇に酬ゆ可く、努力した。

信長期に
於ける最
後的一幕

蓋し中國役は、實に秀吉が信長の將校として活動したる、最後の一幕にして、又た彼が信長期に於ける、花であつた。彼は四十二歳の分別盛りであつて、既に江州小谷二十二萬石の大名であつた。其の資望は、尙ほ北國探題の柴田勝家に下だつて居たるも、信長が彼を、此の大役に擢用したるを見れば、彼の手腕、力量に信頼するとの、尋常でなかつたとは、以て知る可しである。

中國役と
小寺官兵
衛孝高

扱も中國役は、上杉謙信の未だ死せざる、約五箇月前に開始せられた。既に毛利氏との手切となつたのみならず、天正四年五月には、毛利氏の將浦兵部、播州英賀に上陸し、姫路城に薄らんとした。而して播州の赤松、別所、小寺等は、宇喜多直家が、毛利氏の後推を恃みとして、頻りに蠶食を逞うし、其爲め誰ぞ然る可き大

將を差し下さんことを、信長に請うたからである。其の發頭者は、實に小寺官兵衛孝高であつた。

孝高の職
識と中國
征伐の先
驅者

彼は播州御著の城主小寺政職の家老、姫路の城主小寺（本姓黒田）職隆の子、當時（天正五年）卅三歳、播州小名の一被官であつた。然も彼は既に天下を掌中に弄する、膽識を具へて居た。彼は信長、秀吉、家康の三代に歴仕したが、其の時代の智囊と稱せらるゝ、總ての人の中に於て、最も傑出した一人であつた。彼は大局の見渡し、が早かつた。其の周邊に毛利、三好等の諸勢力が、存在したるに拘らず、蚤に織田氏を以て、與に爲す可く、與に頼る可き者と認め、天正三年七月、主家小寺政職を代表し、信長に岐阜に謁見し、款を通じ、中國征伐の先驅者たらんことを以てした。

孝高を總
大將に申
受く

爾來播州の形勢は幾變し、事大論者は動もすれば、毛利氏に傾きたるも、孝高は深く期する所あり、秀吉によりて、信長に説き、又た信長によりて、秀吉を總大將として申し受けた。

孝吉、孝
高と兄弟
の約を結
ぶ

如何に秀吉と、孝高とが、意氣相許したるか、は、七月二十三日（天正五年）附を以て、秀吉が孝高に與へたる、自筆の書簡に、
其方の儀は、我等弟小一郎（秀長）同然に心易く存候間、何事を皆々申とも、其方直談のもて、是非は御さばさある可候。
との一節にて、之を察することが出來よう。彼等は互ひに相ひ許し、兄弟の約を結んだ。

孝高と電
光石火の
活動

孝高は天正五年九月に、其の一子松壽丸（黒田長政）を、人質として信長に渡し、信長は之を秀吉に託した。而して秀吉は、前記の如く、十月廿三日に播州に入り、直ちに電光石火の活動にて、十月廿八日には、國中の人質を取り纏め、十一月十日比迄には、國中平定す可しとの報告を、安土に致した。此の如く迅速に埒の明きたるは、恐らくは孝高が、準備的行動の効果であつたらう。何れにしても、信長の喜び知る可しなや、彼は朱印もて、秀吉を播州の領主とした。

孝高秀吉

元來播州は、赤松氏の所領であつて、守護職の赤松と、其の執事の浦上との確執

に姫路城
を迎ふ

の結果、播州に散布する赤松氏の庶流、別所、小寺等三十六家は、銘々割據した。而して此の間に於ける策士が、即ち小寺政職の家老の子たる、小寺官兵衛孝高であつた。彼は秀吉の播州に入るや、先づ秀吉を我が居城なる、姫路城に迎へ、之を以て其の本營とした。

但馬の政
略と上月
城の陥落

秀吉は先づ兵を但馬に出して、山口、岩淵を陥れ、又た竹田城を取り、城代として、舍弟小一郎を入れ置いた。而して其の力を擧げて、備作、播の國境なる、上月城を陥れた。

霜月廿七日、熊見川打越、御敵城上月へ、羽柴筑前守秀吉、相働、近邊放火候て、福岡野之城取詰、小寺官兵衛、竹中半兵衛、乍處宇喜多和泉守後卷とし、人數を出し候。羽柴筑前守懸合、足輕を追崩數十人討拂引返し、上月之城取巻、被攻候。七日目に城中の者、大將の頸を切、取持て來候て、殘黨命被助候様にと歎申候を、上月城主の頸、則安土へ致進上、信長被懸御目。上月に楯籠殘黨悉引出し、備前、美作兩國之境目に、張付に悉懸置。上月之城には、山中鹿介被入置、福岡野之城、

是又攻破頸數二百五十餘切捨、存分に被申付候。〔信長公記〕

秀吉左右
の高手たる
孝高と重治

秀吉の中國役には、黒田孝高、竹中重治兩人が、其の左右の手であつた。秀吉の働らきに就ては、

今度北國より歸陣仕、御折檻迷惑之故、西國にて可然か責をいたし、是を見上に可仕と被存知、夜を日に繼懸廻、羽柴筑前、粉骨之働、無比題目也。

是れ太田牛一の記する所、宛も太史公の贊の様ぢや。中國役は、斯る快勝を以て其の首途とした。

秀吉中國役首途の諸戰報

遠路爲御見舞、預御使者、御懇意之至可祝着候、仍今度播州入質已下、但州一國之様子、委曲左京殿へ申入候條、定可爲其聞候、

一但州悉以如存分、障明候條、去廿七日、至作州堺目相働候處、播州作用郡内に敵城三ツ候、其内福原城より出、人數相防候、然に竹中半兵衛、小寺官兵衛兩人先日遣候處、於城下及一戰、數多打取候、我等者に平塚三郎兵衛と申者、城主討捕候處、其弟助合候を

宇喜田不
討留事無
念に候

子供を串懸はたし女を懸く

同討取候、以其競城乘崩悉不殘討果申候事、一右福原城より一里程先に七條と申候城候、翌日廿八日押寄取巻水之手取候處爲後卷此方陣取上之山へ宇喜田罷出候條、城には手當置、切懸及合戰散々切崩、備前堺迄三里斗之間追付、首數六百十九其外雜兵切捨候夜に入候に付、宇喜田不討留事無念存候、乍去明石三郎左衛門まなこ彦左衛門さゝの原討捕候、此兩三人事西國にての才覺、先懸第一之者と申候事、一合戰場より引返し、七條の城彌取詰、水之手取付、色々佗言候へ共、不能承引かへり、しゝかき三重ゆいまわし、諸口より亦候申付、去三日乘入悉刻首、其上已來敵方ミンリと存知、女子共二百餘人備作播州三ヶ國之堺目に子ごもをばくしにさし、女をばはた物にかけならべ置候事、

一最前の合戰首共、今度七條討果首塚二つつかせ、悉以任存分候事、

一當郡別所中務と申者の城、今一ツ迄候、種々懇望候に付、人質三人召置、城をば來二月迄預け立置申候事、

一作州の内新免彈正左衛門、人質を召連罷出候間、居城させ此方一味候事、

一右七條城、備作播磨の堺目におゐて可然處に候に付、山中鹿之助今度我等相抱候條、足弱をは三氣にわかせ、七條の城に殘置候事、

一如此之上當表隙明候條、今日五日播州龍野迄打入候、やがて令歸陣候條、其刻可申入候、猶御使者へ申渡候、恐々謹言、

十二月五日

秀吉華押

下村玄蕃助殿 御通報

〔長濱共濟文庫所藏〕

黒田孝高の先見

秀吉公御代に、小寺勘解由殿孝高を今張良と風聞せし事を本多加信に尋ければ、國々諸大名衆家々の記録を出し見せ被申故、黒田家の記録を所々少し書拔置候故、寫傳仕候、

如水老高孝御若名小寺官兵衛殿、本國播州小寺氏也、其頃三好は阿波讃岐淡路紀伊伊賀伊勢五畿内以上拾一國管領する、毛利は拾一國切隨へ威を振ふ、此時播州姫路の城主小寺一家集り、此後天下の主は何れにて可有かと詮議なりし時、毛利と云も有、又三好にて可有と云ふ者も有、此時官兵衛殿は殊の外年若かりしか進出被申は、此後の天下の主は織田信長にて可有と被申ければ、各一家衆存の外なる事也、細は信長は尾張近江半國許手に入たる人、何として天下の主たる可きぞと有時、官兵衛言に毛利は國をも多く領地せられ、能家老侍大將も有之共、輝元居城に引込、物事公家門跡の如くにて自身馬を出さるゝ事希なり、然時は今に旗元も頼て不從様可成行、三好は軍法政道も悪しからざれ共君を討たる天命難違、然時は天下一統に不可

天下の主は誰かの詮議

孝高織田
信長を見
抜く

從、天道難_レ遁して十に八九家人共の爲に討るべしと、我等はツモリたり、此脇の天下の主は只信長たる可し、子細は今川義元との合戦の勝利なり、段々譽あり、殊に能く人を見知、其上公方義輝の弟、奈良の乗院を立、義昭と號し、武威を振ふ、誠に近代の名將たり、末は如何も有れ、此次の天下の主は信長たる可しと被_レ申ければ、一家此儀に同じ官兵衛、信長へ被_レ參木下藤吉郎を以被_レ申は、播州姫路の城は勝手要害能御座候、大將一人御越被_レ成候様にと、委細の首尾被_レ申達ければ、信長公即刻官兵衛殿へ御逢被_レ成、様子具に御聞被_レ成其方申條々尤なり、爰許今少々御片付被_レ成、則藤吉郎御越可_レ被_レ成と被_レ仰、官兵衛殿に御腰物其外之品々拜領被_レ仰付、播州へ被_レ罷歸、此事穩密なりけれ共、三年目に中國へ聞え、小寺を爲_レ可_レ討に其衆五千餘、播州アガ郡英加と云所に陣を張、官兵衛殿勢五百餘にて防戦、中國勢敗軍す、追詰人數討取、信長公へ注進し給ふ、信長公御感狀を官兵衛殿へ被_レ下、其明年木下藤吉郎を改、羽柴筑前守秀吉に被_レ成、播州へ御下し被_レ成、秀吉公萬事官兵衛殿へ被_レ仰談、後には官兵衛と秀吉御兄弟の御契約被_レ成、互に神文を御取替被_レ成、官兵衛智謀故、播州打隨ふ、此間に官兵衛殿武功智謀其數多し、之を略す、浮田中納言殿○宇喜多秀家、當時秀吉公の旗下と被_レ成事も、毛利殿と和睦も、是官兵衛殿智謀故也、此故に今張良と云、〔松永道齋聞書〕

孝高萬事
秀吉へ相
談す

【八八】 播州形勢一變す

秀吉の凱
旋と再出
發

秀吉は、天正五年十二月、播磨、但馬を平定して、安土へ凱旋した。信賞必罰は信長の流儀だ。彼は參河に放鷹に赴くに際し、豫じめ乙御前の茶釜を出し置き、秀吉來らば之を與へよと命じて、出立した。秀吉は大いに面目を施した。彼は天正六年二月、重ねて陣容堂々として、播州に下つた。

宇喜多直
家急を毛
利氏に告

然るに宇喜多直家は、上月城の陥落以來、急を毛利氏に告げて曰く、今や尼子勝久は、信長の力に藉りて、上月城に入つた。此れは毛利家に取りては、由々敷大事である。若し此儘に放下せば、尼子は必らず舊領恢復の野心を逞くするであらう、宜しく速かに兵を出して、之を殲滅せよと。毛利も此の警報を聞き流しにす。譯には參らなかつた。

毛利氏の
全軍上月
城に薄る

吉川元春は策を立て、曰く、隆景は輝元と與に、上月城を攻めよ。我は因、伯雲、石の兵を率ゐて、丹波の赤井、但馬の垣屋等の兵と合し、京畿に向ひ、本願寺、別所と策應して、織田の本據を衝かんと。然も此れは危策なりとて、上月城包圍に決し、天正六年三月十二日を期し、隆景は沼田を發し、元春は富田を發した。兵數三萬五千。隆景は備前より、宇喜多の兵を併せて、美作に入り、元春と高田に會し、輝元も亦た進んで備中松山に抵り、四月中旬、全軍播磨に入り、上月城に薄つた。

別所長治
の反覆と
播州形勢
の一變

然るに秀吉の脚下から、意外にも鳥が立つた。そは三木の城主別所長治の反覆である。別所は赤松氏で、圓心の孫敦範に至りて、始めて別所氏を名乗つた。播州東部八郡の領主で、天正三年以來織田氏に従ひ、秀吉の播州平定も、長治等の力大に居た。然るに天正六年二月二十三日、秀吉が兵七千五百人を率ゐ、再び播州に下り、加古川城に入り、播州の諸豪と軍議を凝らすや、別所長治は、其の叔父別所賀相、老臣三宅治忠をして、名代として來り謁せしめ、治忠等は種々献策した。秀吉は之を聞き入れず、卿等の任は、槍先の働きである、軍略は乃公の胸中にあ

信長に反
かくの口實

りと云ひ放つた。兩人は頗る感情を害し、返りて長治に勧め、織田を去り、毛利に就かしめた。此に於て播州の形勢は、急に一變した。元來秀吉は、人を懐柔するの妙技を有した。彼等兩人が秀吉に反撥して、謀反を長治に勧めたと云ふは、受取難き話である。恐らくは之を以て、信長に反くの口實としたのであらう。

賀相、治忠還て謀反を勧め、毛利家に通じて、秀吉を伐んと欲す。然と雖も三木城の要害堅固ならざるにより、態と一翰を呈して、大臣家(信長)に訴ふ。其趣は近日毛利右馬頭輝元當國出張の風聞有之、仍て防戦の爲めに、城郭普請仕由、是を申す。或は又秀吉政事横逆の故、其恨を含而已、全く大臣家(信長)に對し、疎意あらざるの由、是を陳謝し、三木城に楯籠る。彼使往反の間數日を送る。其内城郭を普請せしめ、且亦一族同意の族に廻文を遣し、籠城せしむ。(總見記)

乃ち彼等は、毛利氏に與せんが爲めに、故らに秀吉と衝突した様にも思はる。彼等が何故に毛利氏に與みしたかは、分明でないが、利害の計較以外には、判知

別所の一黨反旗を翻す

別所の一黨には、三木城の西方志方城に櫛橋治家あり、神吉城に神吉長則あり、高砂城に梶原景行あり、野口城に長井四郎左衛門あり。其の東方淡河城には、淡河定範あり、其の南方端谷城には、衣笠範景あり。何れも秀吉に反旗を翻して、櫛て籠つた。

重棟秀吉に應ぜず

秀吉は豊地の城主にして、別所賀相の弟、長治の叔父重棟を召して、其故を詰つた。重棟は三好退治に際して、上洛し、戦功あり。夙に信長に知られた者で、他志なきを誓うた。秀吉は彼をして長治を諭さしめたが、長治は頑として之に應ぜなかつた。

秀吉の諸城攻略

此に於て秀吉は、小寺官兵衛の言を用ひ、三月六日、其の本營を書寫山に移し、二十八日には、別所の領地に放火し、四月三日、野口城を攻めて之を降し、著々諸城を陥れ、三木城に迫らんとするに際し、端なく毛利氏の上月城攻撃が開始せられた。

別所長治の反抗

別所山城守長治に反抗を勧む

山城守賀相○別所被申けるは、今度秀吉當國磨○播へ下向して近國他國に振威、別所の家臣に向ひ無遠慮我意を振舞ふのみならず、剩へ我下人の如くに挨拶し、國人に首を上げさせぬ様にする事、心底を察するに、信長の謀計と存る、其子細は近年東國の沙汰を聞くに、關東に有四大將、北條氏康、武田信玄、織田信長、上杉輝虎也、其内信長の武勇氣質は表裏第一也、表裏に善惡の二つあり、勇將の討敵謀略は格別の事也、信長は偽を専ら成給ふに因り家風下々まで輕薄多し、唯今思案するに秀吉當國下向の内談を思ふに、先づ長治の先手をさせ、西國靜謐に於ては初の變約、往々長治を退治し、播州は秀吉に可興行、信長の心底如移鏡、敵の表裏を知ら謀に乗らんと、武士たらん者似無慮、此方より色を立んと被申ければ、長治宣ふは左ればこそ最前より、信長兄弟の思を可成なご類に宣ふに付、一味同心して大將を一人給れと返事しける、定て信長子息の内信忠か信雄にてもやと思ねれば、秀吉を被差下、信長淺智の故也、凡大將を立るには其人を選事第一也、異朝にも秦の代を傾けんとせし時、陳勝を大將にて、秦の右將軍白起に討る、又項梁と云者大將にて、秦の左將軍章邯に討れぬ、其後楚の懷王の子流浪して在けるを取立、號義帝攻寄せ、遂に秦の代を奪取りしな

秀吉
合戦す
べし

天下武門
の望む所

り、縦令當座雖有威氏も無き人を大將にしては、諸人輕人輕するものなり、秦の章邯四十萬の兵を率ゐて楚に下りしを、項羽大將とせず、楚の項伯は鴻門の會にて既に高祖の命を助たりし人なり、漢に下て高祖敢て不用大將所也、然るに何ぞ下の物笑たるべし、此上は初の約を變じて向後信長と手切に可成、其驗に先つ秀吉と可合戦と宣へば、舍弟小八郎定○治十七歳進み出軍は發不意有利兵法之術密察敵人機而速乘其利後疾撃其不意と云り、長僉議して敵に色を悟られ逆寄に寄せられては、悔に可無甲斐、某に人數四五百人給候へ、今夜にも明夜にも夜討にして三方に火を放、一方に支候べし、火を遁れんと掛出る東國勢を追立切倒し、本陣へ切入に於ては、秀吉を討取る可しと、高聲に云ければ、別所甚太夫之○安誓思案して、御謀も非無一理、左れども一國一郡の大將、餘所の加勢も頼まず、雙の國を討取、我國に合せんと思ひ敵國に打入給ふには、即時に打出、敵に足を溜めさせぬ夜討など可然手立也、流石に大國多討取天下に旗を立てる程の信長、秀吉如きの侍五人三人を失ても損とは不被思、同くは互に敵の色を立て、掛相の合戦を仕、敵引取らば付慕、敵返さば城に引籠、縦横に惱ます程ならば、敵は他國味方は自國也、兵糧に疲れなごか退窟せざらん、弊に乘し中國の加勢を請、一と當て當つるならば秀吉は可敗、跡に續て責上り於京都遂合戦、一日なりとも天下に旗を立てるならば、縦ひ屍は戰場に晒すとも名は後世に留らん、是天下武門の望む所也、其上當家の累祖赤松圓心村○則苔繩の城赤穂郡より打出、

秀吉利害
を説かし
治應せざるも長し

右の手立をして敵を攻亡し武名を末代に上らる、被任元弘之吉例候へかしと曰へは、山城守は甚太夫の申所宜く覺ゆ、左らに可有籠城の支度、先つ一應敵を欺かんとて信長へ以使申さるゝは、去七日○天正六年三月六日秀吉西國爲征伐當國へ下向す、中國の先手は長治爲案内者、毛利輝元は從元就二代領大國候、上、隆景元春名將にて候へば、一旦合戦勝負難決、然は駈引爲自由、又は軍勢打入ても諸勢安堵の爲め、居城の普請を仕ると理を云遣し、信長は尤神妙也と宣ふ、市略秀吉此由守備を修め反抗すを見給ひ、不心得別所逆心哉、信長公他に異に思召、當國磨○播の人質等預置、今度西國發向の事長治を案内者に頼む上は、何の恨有て謀反ぞや、偏に若氣の致す所か、左無くば同名山城守の業なるべし、山城の守舍弟孫右衛門棟○重を呼寄如何と問給、先つ小寺孝高明石實○則是逆心哉と問給ふ、重棟申は小寺明石は初より無二の御味方に候、秀吉公曰く貴方は山城守兄弟也、敵かと尋らる、重棟承り簡様の企八幡大菩薩も照覽あれ、某には夢にも不知と申し、唯失面目とて沈紅涙云々、秀吉重て然らば貴方状を認め長治を賺し見給へ、其意趣は今度西國下向の事、長治御案内者と有るに付秀吉罷下候、其上信長公も、於西國軍兵備の様、一向長治の下知に可隨との上意也、何の恨有ての逆心ぞや、若し御心に不叶事あらば、秀吉まで承候へと有るに依り、委細に其趣重棟方より申と雖も、長治不返答、重て兩三度迄盡理申ければ、長治の返事に、多年毛利輝元に頼まれし上は、信長何と申さるゝとも右馬頭殿元○輝の契難、默止、此上は

當城〇三を枕として兄弟三人討死し、別所一家の首を信長刃の先に掛けん事、侍の本意也と、秀吉方へ可申との返事なり、〔別所長治記〕

【八九】上月城の攻守

秀吉信長に援兵を求めむ

秀吉は別所退治の半途に於て、毛利勢の上月城攻圍の報に接し、直ちに信長に其の援兵を求め、取り敢へず四月晦日（天正六年）荒木村重と與に、兵二萬を率ゐ、其の後詰として、城東高倉山に陣した。然も毛利勢との對抗は覺束ない。何となれば毛利氏は、殆んど國力を傾けて、出て來たからである。小早川隊約二萬、吉川隊約一萬五千、宇喜多隊約一萬四千、所謂る小敵は、大敵の擒である。且つ又た毛利勢は、上月城援兵の來る可きを慮り、豫じめ高倉山と、圓光寺村との間なる谷地に、數條の空壕を鑿ち、各陣地の背後には、柵を植ゑ、塙を築き、鹿柴

毛利勢の防備極めて嚴重

上月城と其の地勢

を連ね、殆んど城へ一步も近寄る能はざらしめた。加ふるに播磨の沿海には、兵船七百餘艘を游弋せしめ、防備極めて嚴重であつた。されば流石の秀吉も、來は來ても、二階から目薬で、城兵に援助を與ふるを得ず。唯だ夜毎に篝火を三日月山に焚き、景氣を附けて居た。

上月城は、播磨佐用郡上月村にあり。備前、播磨、美作の三國に接する要害で、姫路より山陰に入る咽喉である。東は市川を控へ、北は市川の支流を隔て、上月村に對し、西北は太平山、西南は狼山（或は大龜山と云ふ）に據り、東面も亦た、高倉山脈東北より來りて、市川の左岸に盡く。其の通路は、唯だ市川に沿ふ一筋道のみである。攻むるにも骨が折れるが、後詰には猶更ら骨が折れる。

信長の援兵京都を發す

信長は秀吉の報に接して、愈々事の重大になつたとを曉つた。彼は自から出馬せんとした。されど佐久間、瀧川、蜂屋、明智の徒皆な、『播州之儀は、嶮難を拘、隔、節所、要害を丈夫に構、居陣之由承候間、何れも罷立、彼様子見計候て可申上候。』〔信長公記〕と諫止した。信長も亦た之に従ひ、瀧川、明智、丹羽、及び筒井順慶、武藤舜秀

等をして、赴き援けしめた。兵凡そ二萬、彼等は四月の末に京都を發し、五月上旬に高倉山に到着した。

信長更に
信忠を出
發せしむ

信長は更らに上月城後詰軍の、背後の心配なき様、其子信忠をして、五月朔日、三木城牽掣の爲めに出發せしめた。而して五月十三日には自から發程せんとし、たが、大雨三晝夜、洪水氾濫したるが爲めに、餘儀なく中止した。

兩軍の對
峙と毛利
勢の攻圍
努力

兩軍對峙の際、毛利氏の部將杉原盛重は、部下の士若干を簡拔して、高倉山の敵陣を夜襲した。而して更らに臺無砲と稱する、西洋舶來の大砲もて、上月城の城樓を破壊した。吉川元春は、山路を潛行し、織田勢の背面を偵察せしめ、其の千木附近、飾磨附近に敵兵の多數屯集するを知り、信長の未だ來援せざるに先ち、夜襲を試みんとした。されど隆景は之を可かず、主力を集めて、上月城を陥る可しと爲し、愈々攻圍に努力した。

織田勢の
曠日彌久
と秀吉の
上京

織田勢は曠日彌久、何の爲す所もなかつた、其實は爲す可き様なかつたのだ。而して來援の諸將、概ね秀吉と資望相ひ伯仲の間にありて、其の統一を保つこと

頗る難く、依りて秀吉は六月十六日、竊かに上洛して、親しく信長に事情を具申し、其の命令を請うた。

寅六月十六日、羽柴筑前守、播州より罷上一く、被得御説之處、謀略不相調、張陣候ても、無曲候間、先此陣引拂、神吉、志方へ押寄攻破、其上三木別所構取詰可然之旨被仰出。〔信長公記〕

上月城放
棄と別所
一黨討平
の決定

乃ち信長は、高倉山の兵を引き揚げ、上月城を敵に放棄し、信忠の下に、力を一にして、別所一黨を討平す可しとの、決定を與へたのである。秀吉は還りて、加古川に於て、之を信忠に傳へ、高倉山に於て、諸將に傳へた。

織田毛利
兩軍一快
戰の機會

然も織田、毛利の兩軍は、此際に於て、一快戰の機會を得た。六月廿一日の拂曉、宇喜多隊の一將は、伏兵を市川の右岸に設け、織田勢の馬に飲ふ者を射撃した。秀吉の兵は、之を救ふ可く應撃した。吉川隊三百人、宇喜多隊を助けた。此に於て、秀吉の兵二千、更らに出で、之を圍んだ。此に於て、吉川隊、小早川隊も、漸次に繰り出し、毛利勢は五千に上り、織田勢の上月村に現はれ來るもの、約二萬に及び、愈

よ大戦となつた。毛利勢は敵の大軍を見て、且つ戦ひ且つ退いたが、吉川隊三千人、又た來りて之を助け、更らに吉川氏の兄弟三人、元長、元氏、經言（後に廣家）、一萬餘人を率ゐて進撃した。

戦局一變と兩軍の激戦

此に於て戦局一變し、織田勢は中村一氏、五千人を率ゐて、其の第一線に、小寺孝高三千人を率ゐて、第二線に、瀧川、明智、丹羽等は豫備隊として、互ひに市川を隔て、射撃を交換したが、經言は流を亂して川を涉り、元長、元氏、杉原、南條等之に繼ぎ、一氏の兵は爲めに退却を餘儀なくした。孝高之を救はんとしたが、元長は其の兵に膝折敷て、弓銃を亂射せしめ、杉原盛重等二千餘人、突貫して之に逼り、遂ひに秀吉の隊を撃却せしむる、三四町に及んだ。是に於て秀吉の本隊、及び筒井隊は、馳せ來りて之を救うた。但だ小早川本隊、及び吉川元春の麾下は、城を圍んで動かさず、而して織田方の荒木隊、毛利方の宇喜多の本隊も、傍觀の態度を取つた。

死傷相當

吉川元長は突撃して、高倉山の腰部に逼つた。天野隆重は、織田勢の、或は其の退

五分五分の勝負

路を斷たんとを慮れ、兵三百を以て、一高地を占領し、後方を監視した。秀吉も亦た小早川隊の動かざるを見て、我が背後を斷たんとを慮り、急に兵を收めた。毛利勢亦た尾撃せず、引き上げた。此の戦争は死傷相當、五分五分の勝負であつた。

【九〇】 上月城の陥落

上月城放棄と織田側の異論

上月城放棄は、織田側に於ても、頗る異論があつたらしい。當時秀吉の軍に従ひ、小寺官兵衛と與に、左右の手とも云ふ可き、竹中半兵衛重治の子、重門の著はしたる『豊鑑』は、比較的、信憑す可きであるが、佐久間、瀧川等の諸將が秀吉の功を妬み、信長の出征を止め、信長に勧め、秀吉をして軍を退かしめたと記して居る。而して秀吉も、頻りに之を遺憾とし、

『豊鑑』の

今度上月表へ旗を寄せさせ給ひ、毛利家の根を絶ちて亡失、中國筑紫までも

所記

信長卿の御心の儘なるべし。秀吉は數まへられぬ身なれば、とまれかくまれ、鹿之助(山中幸盛)をすてさせ給ひしは、西國の果迄も御名を流し口惜さ。豊饗と信忠に訴へたと記して居る。併し大體より見れば、信長の命令は、機宜に適したもので、秀吉も其の中心は、之に賛成したであらう。信長の兵法は、勝ち易さに勝つのだ。強き者は、相手にせぬのだ。

秀吉の忍び難き所

然も上月城を打捨て、尼子勝久、山中幸盛を見殺にするは、秀吉の忍び難き所であつた。されば彼は、龜井茲矩を城中に遣はし、突出して、織田軍に合す可きを慫慂した。されど幸盛等は、其の不可能なるを以て、之に従はなかつた。

秀吉書寫山へ引揚ぐ

天正六年六月二十六日、秀吉は、瀧川、明智、丹羽等の兵を、姑らく三日月山に駐め、毛利勢の追撃に備へ、荒木村重等と書寫山へ引き揚げた。而して直ちに、信長の命令通りに、翌日より神吉城に取り詰めた。

上月城の開城と勝久の自殺

扱も上月城は、援兵の引拂ひと與に、彌々絶望となつた。後詰も無く、兵糧は竭く、最早百計盡きたれば、勝久の一死を以て、城中の人命を償はんことを申し出た。

元春、隆景へ、山中鹿之助より使を出して、此度の企て全く勝久の所存にあらず、神西三郎左衛門所爲にて御座候間、彼者に切腹可申付候。勝久(尼子)助四郎(尼子)以下城兵御助被下候様にと、再三達て佗言申候へ共、兩川殿會て御分別被成ず。に付、鹿之助、勝久へ申候は、再三申断候へ共、分別にて無之。此上は不及力御切腹可被成候。某も御供可仕候へ共、無面目降人に罷出、元春に近付刺違御死後の御弔に可仕と申しければ、勝久聞かれ、我等事、出家と成て居候處に、各心入を以て、一度尼子と名乗、大將の號を汚す事、生前の本懐、不過之、唯今如何様に成果様とても、智謀の不足にあらず、偏に家運の盡たる所なり。自分には、命を全くし、時節を以て、揚義兵、尼子家を再興の志、何よりの忠勤なるべしと云ひ、七月三日勝久切腹なり。(吉田物語)

勝久は二十六歳にて死した。上月城は七十餘日の籠城にて、陥落した。此れにて尼子家は全く断絶した。毛利氏と、尼子氏の鎬を削りたるも、随分久しいものであつた。大永三年、元就が尼子經久と手を切つて以來、天正六年迄、五十六年に互

毛利尼子の争は五十六年

山中幸盛
殺害せら

る間の事であつた。
扱も山中幸盛は、百折撓まず、雜兵同様降人となつたが、彼は兩川より優遇せられたるに拘らず、遂ひに元春と刺違ふ可き機會を見出さなかつた。而して彼は却つて、周防の地にて、五千石の知行を宛て行はれ、此に赴く途中に於て、殺害せられた。

備中松山の麓、阿部の渡りにて、被仰付候。鹿之助は、妻子下人どもを上下三十人許先へ渡し候て、河端の朽木に腰を懸、先船の渡り申候を見合居候。鹿之助には後藤、柴橋と申、家人二人付居候。天野元明の家中、河村新左衛門と申者、能時分を見繕ひ、鹿之助の後へ廻り一太刀打付申候へば、是はと申候て、則川へ飛込申處を、福間彦右衛門川へ飛込、頭の方を押へ候。河村も即時飛込候へ共、押へ候處足の方にて候故、彦右衛門首を掻き落し、差上申候。柴橋と云者は、鹿之助縁者にて候。渡邊又左衛門、宇多田右衛門兩人して討果し、刀は右衛門取申候。首に掛申候大海の茶入は、又左衛門取申候。右の刀各見候て、鹿之助常に

山中鹿之助
と末路
の悲惨

荒身國行を所持仕の由承及候、必定新身國行にて可有之と申に付、刀茶入輝元公へ指上申候へば、刀は國行無紛に付被召置、茶入は御用に無之とて被差返候。後藤をば三上平兵衛討果之由に候。鹿之助妻子をば、雲州の者にて候に付、彼地へ送らせられ候事。〔吉田物語〕
一代の俠骨、山中鹿之助も、其の末路は悲惨であつた。彼は三十九歳であつた。此の如くして尼子氏の遺族も、遺臣も、悉く亡び盡した。但だ立原久綱のみは京都に遁れて、蜂須賀彦右衛門に頼つた。毛利氏腹心の病であつた尼子氏は、全く片附いた。而して一事去れば、一事來るで、更らに宇喜多氏なる一の難題が、毛利の面前に向て出來した。

山中鹿之助最後の事

戰國亂邦
の習ひ

榮枯盛衰は天理の當然、人事の常規也、然るに十信初果にだも至らぬ凡夫は、有の
見に隨して未だ得ざるは得んと欲し、已に得れば之を失はんを恐るゝ事の淺まし

鹿之助不
意を撃た
る

さよ、況んや矢石劍刀の家に生涯を執る者をや、浮沈を一日の間に保ち死生を一戦の裡に變ふるは、戰國亂邦の習ひなれば、之を得るも何ぞ歡ぶに足らん、之を失ふも何ぞ悲むに足らん、さらば山中鹿之助幸盛、昨日は主君勝久を輔弼して、千騎萬卒の命を黜陟したれば、其威炎々として手を炙るべかりし身の、今日はいつしか君臣明暗の界を隔て、楚人の囚れに就き、檻中の虎の尾を掉る形相にて、心も進まぬ旅の路、羊の歩程もなく備中甲部川阿川の渡に著きにけり、兼てより、天野紀伊守が嫡子中務少輔元明に、鹿之助討つべき由下知し給ひければ、元明此渡口に小舟一艘、議ひし鹿之助が手勢悉く乗せて、渡しければ、鹿之助は後に残りて、頸取後藤と柴橋大力介と云ふ者二人召具して、岩に腰打懸けて扇つかひ祖はなきて汗拭ひなごしける所に、天野が家人河村新左衛門と云ふ大剛の者、時分能しと思ひ岸陰より狙ひ寄りて、袈裟掛に丁と切る、さしも鹿之助も思ひがけざる折なれば、あつと云ひて河水に飛び下りける所を、河村續きて飛び下りけり、鹿之助は違者の早業、力も亦勝れたれば、河村を取つて押し伏せんとするを、福間彦右衛門馳せ寄つて、鹿之助が髻を掴んで引倒し、終に首をぞ掻きたりける、鹿之助當年三十九歳とかや、郎等柴橋大力介をは、渡邊又左衛門、轉右左衛門尉二人して討ちてけり、後藤彦九郎は鎗を以て、散々に突廻りけるが、是れも多勢に討たれにけり、三上淡路守は鹿之助討たんと落ち合はれど、首を福間にとられければ、力無く鹿之助が頸に掛けたりける大海の茶入、腰に佩け

立原逃げ
去り周快
討取る

る所の荒身國行の刀を取つて、輝元へ進上したりけるに、刀をば召置かれ、茶入をば返し與へられにけり、さて河村、福間をば相高名とぞ宣ひける、立原源太兵衛久綱は、藝州迄下りけるが、袁陽源が白馬の簞たばに、影節かげぶし去函きりかへ谷や投な現ま出で甘泉あまみづと云へり、思へば主の敵也、おめくと隨逐せんも口惜しとて、頓て忍びて逃げ上り、峰須賀彦右衛門に寓居せり、隱岐の法性寺周快は、下人三十人許り引具して本國へと志し、美作の國を通りけるを、一揆原財寶を奪はんとて落人よと呼りける時節、熊谷右衛門尉、元春の簾中より上月へ使として上りけるとて此傍りに宿せしが、即ち出で合ひ追ひ蒐けたり、周快聞ゆる剛の者にて、取つて返し數人切り伏せ戦ひけるに、手の郎等共皆討たれ、今は唯一人切抜けて高田迄こそ落ち行きけれ、かくと告げたりける間、香川美作守光景が家人、三宅源四郎、主の采地美甘新庄と云ふ所に、郡代役として居たりければ、急ぎ馳せ出で追ひかけたり、法性寺又取つて返し、切り結びけるが、數度の戦ひに身體疲勞し、三宅が爲に討たれにけり、抑も山中鹿之助幸盛、本は池田基次郎と號して、尼子家十人の家老に列すと雖も、食地も微少に、座敷の次第も末也き、然るに幸盛、父には幼少にして離れ、一人の母に養育せられ成長す、彼が母は崔元暉、呂榮公の母にも劣らぬ賢女にてありければ、如何にもして、鹿之助を世に在らせんとのみ、明暮に心を碎き、親うち具し、世の覺え花麗なる朋輩にも劣らずもてなしけれど、果敢くしき後見もなければ、事有る時は猶より所なく、心細氣也、元來顔氏、原氏にも超

鹿之助の
生立

鹿之助の
母非常の
賢女

えて貧しく経ければ、萬の事の妨と成り行きけるこそ能しけれ、彼の母自ら時々後園を鋤いて麻を植ふ、扱是に刈り是に漚て、治めて以て織溜め、絡塚むらなどに移し、南窓機杼の勞をへて布に作り、布子と云ふ物に調じて、茜の裏を付け、其數多く鹿之助に與へ、自らは百結碧鮮の垢衣を衣たり、鹿之助本才賢なる男也ければ、尼子家に近習の者として、三百人許り有りけるが、皆人の二男三兒共にて何れも貧しく、十年衣を製らず、懸鞆の衣形を蓋はざる者共なれば、常に交會の時、彼の布子を與ふるとは云はず、唯自然に渠等が衣裳に著替へ、或時は朋達共五人十人招き集めて、吾が家に宿せしめ、朝夕の饗をもしける故、人皆其志を感じ、何となく鹿之助が手に付いて、爰にては山中が手の某と名乗り、此所にては鹿之助が手の何がしと名乗りける間、其名敵陣に揚焉いさく、武威諸人の上に在りけり、此して年を逐ひ月を迎へて、勇智の實徳積累し、仁義の道も形の如く兼ね行ひけるに依つて衆人懐き従ひけり、永祿に富田の城落去して後は、勝久を大將と仰ぎたりけれども、萬事の成敗幸盛が胸裏より出で、數箇年が間、山陰山陽の兩道に武威を振ひ、寡を以て衆に勝つこと勝けて計ふるに違あらず、さる故其名天下に飛揚して、三台八槐の上に響き、下は樵子漁老も、其功を常談とせしが、果報に分限あり、天運に數を出でずして、今益なく誅せられけるこそ無慙なれ、〔陰徳太平記〕

鹿之助の
英武

〔九一〕 宇喜多氏の去就

別所長治
の反覆と
宇喜多直
家の去就

別所長治の反覆は、秀吉の中國經略を一頓挫せしめた。然も事は此に止らなかつた。毛利の與國たる宇喜多直家は、翻て織田氏に款を通じた。信長の倚信したる驍將荒木村重は、却て毛利氏に加擔して、有岡城に立て籠つた。意外は、敵味方の双方にあつた。人事は實に豫定の通りには、參らぬものだ。吾人は中國經略の事を叙するに於て、自から多岐に涉らねばならぬが、先つ上掲の大綱丈は、恒に讀者の記憶せられんとを望む。

* * * * *

扱も毛利勢は、上月城を陥れて、天正六年七月中旬、軍を旋した。然るに宇喜多直家の異謀は、稍く暴露し來つた。其の顛末は左の如しだ。

宇喜多直
家の異謀
暴露の顛末

浮田和泉守直家は、天正六年の春、信長の味方可仕の旨密に使者をもつて申通候に付、上月へは煩ひと申候て、不罷出、舍弟七郎兵衛忠家、其外家臣數多差出し候上、上月落城候て後、直家上月へ罷越、落城の嘉詞を元春、隆景へ申上、此御勢ひに館野城御攻取被成候はゞ、以來上方御發向の通路能可有之と頻にすゝめ申候。兩川殿は如何可有之哉と、遠慮候へ共、此度の勢ひに可然と申上候もの多分に候故、上月を打立給ひ、黒澤表へ打出、陣取給ふ。元長(吉川)御事は、備中松山に輝元公被成御座候に付、上月の様子可被申上とて、松山へ下り給ふ。浮田直家は、明石飛驒守居城八幡山に陣を取、家臣に後藤と申者御座候。作州三星の城主にて、直家掣なり。御當家(毛利家)へ無二御馳走申上候に付、たばかり呼よせ討果し、其後兩川殿へ日を定め、振舞の案内を申越候。元春、隆景も可有御出と御請合候處、八月二日の夜、明石飛驒守方より、弟勘次郎を使に差越し、直家御振舞の案内申候儀、全く御馳走にては無之候。御兩人を城中へ招き討果し可申企に候通申上候に付、兩川殿驚き給ひ、翌三日早天に兩將より

直家へ御使を以て、急用の儀共を、輝元より申越候に付、唯今當地出馬仕罷下候。頓て令發向可御意の通被仰遣御歸陣候。〔吉田物語〕

斯くて元春は出雲へ、隆景は安藝へ還つた。此に於て直家も、彌々意を決して、織田側に豹變した。

宇喜多降服と信長の不滿

抑も宇喜多直家が、毛利を去りて、織田に就きたるは、小寺官兵衛(黒田孝高)が秀吉に献策して、彼を誘拐したるものにて、信長の本意ではなかつた。信長は寧ろ宇喜多を打ち滅して、其の分國を、諸功臣に配與せんとする豫定であつたれば、宇喜多降服の報は、信長に取りては、頗る不滿であつたと云ふ説がある。其の證據として、

九月四日(天正七年)羽柴筑前守秀吉、播州より安土へ被罷越、備前の宇喜多御赦免の筋目申合候間、御朱印被成候の様に、と言上の處に、御誑をも伺不被申示合の段、曲事之旨被仰出、則播州へ被追還候也。〔信長公記〕
の一項を援き來る者がある。

『被追還』の三字と秀吉の不首尾

併し此文を見れば、信長は宇喜多赦免の問題よりも寧ろ『御説をも伺不被申示合之段、曲事之旨被仰出、則播州へ被追還候也。』の一節が眼目と云はねばならぬ。要するに信長は、秀吉と孝高の兩策士が、信長の命令をも待たず、專斷にて、宇喜多氏投降の條件を、取り極めたるを叱責したのだ。『被追還』の三字は、如何に秀吉の頭上に、百雷轟き、散々の不首尾にて、播州へ逃げ還りたるか、想見せらるゝ。然も其の十月晦日には、信長も秀吉等の理ことわりにて、釋然たりしと見え。十月晦日(天正七年)備前宇喜多和泉御赦免に付て、爲名代宇喜多與太郎攝州古屋野迄罷上、中將信忠卿へ御禮、羽柴筑前秀吉御取次也。〔信長公記〕

此間の曲折と秀吉の孝高の慮

とある。即ち信忠をして、代つて赦免の受付を倣さしめた。されば此間の曲折は、流石の分別者なる秀吉、孝高の兩人も、定めて焦慮した事であつたらう。然も如何に信長が、兩人の專斷を瞋りたるにせよ、宇喜多直家の去就は、等閑の事ではなかつた。唯だ此の一事の爲めに、秀吉は、毛利氏領土の中心迄も、踏み込むとが出来たのだ。若し宇喜多氏にして、毛利の前營たらば、織田

直家の功と兩人の降

勢は依然播州より西へ進むを得なかつたかも知知らぬ。但だ宇喜多直家も、當初は織田氏に款を通じつゝも、尙ほ形勢を觀望したらしく思はるゝ。彼は寧ろ織田、毛利兩雄の交闘に際して、火事場泥坊を働かんとしたであらう。されど兩雄の間に介在して、斯る不敵の企ては、容易に成功するものでない。故に勢の逼る所、遂ひに意を決して、織田氏に就いたのであらう。此れは秀吉の功であるが、秀吉をして、此功を倣さしめたのは、孝高の功と云はねばなるまい。

〔九二〕 別所退治

神吉城の陥落と當時武器の進歩變化

上月城を引き上げたる、織田勢は、直ちに別所の一昧なる、神吉の城を攻めた。秀吉は、獨り但馬に入つたが、聽て引き返して、攻圍軍に参加した。六月廿七日(天正六年)より開始し、七月十六日に至りて、漸く之を陥れ、城將神吉長則を斬つた。如

何に當時の戦争が、武器の進歩と與に、變化したるかは、

惟住(丹羽)五郎左衛門若州衆、神吉東之口を受取、先一番に城樓高く、と二ツ組上、大鐵炮を以て打入、堀を填させ、築山を築上攻られ。瀧川左近、南より東へ付て攻口也。金掘を入、城樓を上、大鐵炮以て、扉、矢藏打くづし、矢藏へ火を付焼落し。此外諸手手前く、に、城樓築山をつき、日夜被責。〔信長公記〕

とあるによりて、知る可しだ。大砲が攻城の主なる武器となつたのは、此れで分明ではない乎。

志方城の地勢

信忠は神吉城を陥れ、更らに志方城を攻めた。嬰守二十日、遂に八月十日に至りて、城將櫛橋治家は、人質を入れ、開城した。信忠は、三木の羽翼たる兩城を取りたれば、此れより全軍を提げて、三木城に肉薄した。三木城は播州美嚢郡の西部にあり、南方丘陵に據り、北に三木川を帯び、東は繁茂せる竹林に接す。本丸、二の丸、新城の三部を合し、壘壁を周らし、壁外南西北の三面に空壕を鑿ち、此より稍々離隔して、西南の丘上に鷹之尾宮之上の二壘を設く。城中と、此の二壘の守兵を

信忠に歸り、岐阜に三木城を攻圍す

合すれば、約七千五百人であつた。

信忠は此の地勢の急攻に不利なるを察し、秀吉に長圍を命じ、八月十七日、他の諸將を率ゐて、岐阜に還つた。此に於て秀吉は、三木城を去る、東方約二十一町の高地、平井山に本營を措き、城の周圍に支營を設け、持久の策を講じて、城中を兵糧攻にせんと企てた。其の兵約八千人、配置の延長は、四里以上に互り、本營より城の南北兩方面の各支營間には、複柵を設けて、交通路とした。又た南方の營は、毛利の水軍が、三木の西方約五里の魚住より、糧食を輸送する衝路なるが故に、最も防備を嚴重にして、之を防止した。

攻圍軍と籠城軍と根氣較べ

攻圍軍と籠城軍とは、殆んど根氣較べの態であつた。秀吉も一時は東歸し、十一月(天正六年)には、信長に従ひ、荒木村重を、有岡城に攻めたが、十二月には、復た援將佐久間、明智、筒井と與に三木に來り、糧食、彈藥等を補充し、壘砦を増築した。而して援將等は、間もなく還つたが、秀吉は依然攻圍軍を指揮した。秀吉が、斯く進退の自由を得たるは、其の幕下に竹中半兵衛、小寺官兵衛の兩人があつたから

別所長治の逆襲

斯くて天正六年も暮れ、七年二月六日、(豊鑑には之を天正六年十月の末に繋ぎ、重修眞書太閤記には、天正七年二月十一日の事と云ふ。今姑らく日本戦史に従ふ。)別所長治は、攻圍軍の目的、全く城兵を干物にするにあるを知り、逆襲を企てた。三千二百餘人を以て、前後兩隊に編成し、其の前隊は彼の叔父別所賀相之を率ゐ、其の後隊は彼の弟別所治定之を率ゐ、午前六時城を出で、城の東北約十町なる長屋村を経て、志染川を徒渉し、前隊は直進して、平井山に向ひ、後隊は川を涉りて、平井山の東南に迂回し、峻岨なる谷地より、秀吉の本營に逼らんとした。

秀吉勢の奮戦と別所勢の敗退

秀吉は先づ一千餘人を出し、其の前隊を拒がしめ、後隊に對しては、部下に令して、靜肅を守り、其の近づきて約半町に至る頃、其の異父弟羽柴秀長の隊をして、左側より出て、秀吉の隊前面より進み、之を掩撃した。前隊は敗れ、後隊も却いた。然も後隊は再び精兵百五十人をすぐり、突喊して來り進み、銃を發して、秀吉勢

若干を殪し、惡戦苦闘、剩す者僅に十餘人となつた。秀吉勢三百、亦た頗る奮闘し、悉く後隊の將別所治定以下を討取り、更に兵五百を以て、殘兵を追撃した。前隊の將別所賀相は、百餘人を以て、城の東南高陽池附近に殿戦し、敗兵を收容して城に入つた。城兵の死する者將士三十五人、卒七百八十餘、負傷者若干であつた。此が所謂平井山の戦であつた。

第十九章 荒木村重討伐

【九三】 荒木村重の謀反

荒木村重
の謀反

人事は往々豫想の外に出づ。天正六年十月、信長は意外にも、其の股肱の驍將、荒木村重謀反の報に接した。荒木は信長、義昭衝突の際に、細川藤孝等と信長に心を寄せ、忠節を抽んでたる一人であつた。信長は彼の用ふ可きを見て、彼を攝津に封じ、中國經略にも、殆んど秀吉の副將として、参加せしめた。然も天正六年六月、上月城外高倉山の戦には、毛利側に於て、宇喜多隊が、傍觀したる如く、織田側に於て、荒木隊も傍觀した。當時の落首に曰く、

荒木弓はりまの方へ押寄せて射るも射られず引も引れず

惟ふに村重の心は、當時に於て既に動きつゝあつたのであらう。而して攝津に於ける、彼の屬城の一なる花隈城は、幾もなく毛利勢に攻め取られた。此の花隈

動きつゝ、
ありし村
重の心

城は、兵庫より三里、西ノ宮の方に寄りて、大阪との通路の要衝である。即ち本願寺と、毛利氏との聯絡の爲めには、最も必要の場所であつた。此れを容易く毛利勢に攻め取られたのは、荒木側に於て、所謂八百長やちやうではなかつたらう乎。ざる疑念も生ぜぬではない。

眞實の所
は一山張
る積り

荒木の謀反に就ては、明智光秀、彼の功を妬み、其の讒言の爲めと云ふ説もある。又た荒木の家來が、米を大阪城に賣つた事が露顯したから、其罪を恐れて、毛利に就いたと云ふ説もある。併し眞實の所は、荒木も毛利方に身を轉じて、一山張る積りであつたらう。當時の諸豪の去就は、現時の相場師が、朝に賣手と爲り、夕に買方に廻るが如く、其の思惑次第にて、方向を轉換したものだ。宇喜多と荒木とが、殆ど同時に、各々反對の側に入れ換つたのも、別に不思議はあるまい。

案外なり
謀し村重の

猜疑心の寧ろ淡くなかつた信長でも、此れは案外であつた。荒木は元來微族であつた。然るに信長は、彼に尋常一様以上の待遇を與へてあつた。今更ら彼が謀反する理由は、信長としては、毫も見出されなかつた。

十月廿一日、荒木攝津守企逆心之由、方々より言上候。不實に被思食なにん何篇之不足候哉。存分を申上候は、可被仰付之趣にて、宮内卿法印（松井友閑）惟任日向守（明智光秀）萬見仙千代を以て被仰遣之處に、少も野心無御座之通申上候。被成御祝著爲御人質、御袋様被差上無別儀候は、出仕候へと雖御誑候、謀叛をかまへ候之間、不參候。惣別荒木は、雖一僕之身に候、一年公方様御敵之砌、忠節申候に付て、攝津國一職に被仰付之處、不顧身程誇朝恩構別心候。此上は不及是非之由にて、安土御山に、神戸三七（織田信孝）稻葉伊豫、不破河内、丸毛兵庫をかせられ、十一月三日、御馬を出され、二條御新造御成、爰にても惟任日向守、羽柴筑前、宮内卿法印を以て、色々被懸御扱候へども、御請不申候。（信長公記）信長は村重を懐柔す可く、其の手段の限りを盡した。然も村重は頑として、聞入れなかつた。總見記によれば、荒木も當初は、松井、明智、萬見等の説諭に服し、出仕せんと廻答したるも、其後家老等が、假令一旦御赦免あるも、後難穩便たる可らずとの諫止に任せ、愈々謀反の決心の臍を、固めたと云ふ。

信長の懐
柔を聞入
れざる村
重

信長の中國
経略と
前後の情
勢

何れにもせよ、信長の中國経略は、前に別所の謀反あり、後に荒木の謀反あり、本願寺尙ほ大阪に猖獗を逞うし、背後を顧みれば、武田勝頼は、新たに北條氏政の女を娶り、甲相の間、提携漸く成り、又た信長の爲めに、一憂を加へて來た。而して荒木の反覆は、播州御著城主小寺政職をして、亦た織田方を去りて、毛利に就かした。

政職孝高
を殺さんとす

政職の被官姫路城主小寺職隆、其子孝高は、無二の織田方にして、然も孝高は、秀吉の參謀なれば、政職は、村重の手を藉りて、彼を殺さしめんと欲し、孝高が政職に向て、織田方に反くの不可を説くや、政職は、先づ村重に之を語れと云ひ、有岡城に使ひせしめた。村重は、政職と、謀し合せたる結果なれば、直ちに彼を城内の牢屋に打ち籠めた。孝高は、纒やちやく有岡城の陥落と同時に、栗山善助の爲めに、九死一生を得た。然も彼は之れが爲めに、跛こつぱとなつた。〔黒田如水傳〕或は又た孝高は、秀吉の爲めに、村重に説く可く赴おもむいたと云ふ説もある。又た吉田物語には、『小寺官兵衛に參り、異見仕候へと、被仰付、被遣候處、荒木承引不仕、却て小寺を生捕

荒木の向
背と信長
の調略

可申様に見え申候故、官兵衛夜に紛れ退出罷歸候。』とある。即ち孝高は、信長の命を奉じて赴いたが、危き所を逃げ出たとある。是亦た一説だ。荒木の向背は、中國経略に、非常の影響あるを以て、信長も出來得る限りは、調略を用ひたに相違ない。然かも萬已むを得ざるを見て、茲に兵力を用ふる事となつた。

【九四】 織田氏の水軍

信長と水
軍編成の
著手

毛利氏との對戦は、信長をして水軍の必要を覺らしめた。天正四年七月大阪川口の船戰は、信長をして、痛切なる實物教訓を得せしめた。此に於て彼は、必要の前には、何等の猶豫なく、直ちに之に著手した。

勢州之九鬼右馬允に被仰付、大船六艘作立、並瀧川左近大船一艘は白舟に拵、

攝海咽喉の封鎖

順風見計、寅六月廿六日(天正六年)熊野浦へ押出し、大坂表へ乘廻し候之處、谷之輪海上にて、此大船可相支^{てたて}行として、雜賀谷輪浦の小船不知、數乘懸、矢を討懸、鐵炮を放懸、四方より攻候也。九鬼右馬允七艘之大船に、小船を相添、山の如く飾立、敵舟を間近く寄付、愛し候様に持なし、大鐵炮一度に放懸、敵舟餘多打崩候之間、其後は中々寄付不及^{てたて}行に、無難寅七月十七日、堺の津へ著岸候し也。見物驚耳目候し也。翌日大坂表へ乗出し、塞に舟を懸置、海上の通路を止、堅固仕候也。(信長公記)

水軍の威勢、實見の威を誘引

此の如くして、信長は、漸く攝海咽喉封鎖の目的を達した。而して、信長は、其の水軍の威勢を、京紳に實見せしめん爲めに、彼等を誘引した。九月廿七日、九鬼右馬允大船爲可被成御覽、京都より八幡迄御下……晦日(天正六年九月)には、拂曉より堺之津へ御成。近衛殿、細川殿、一色殿、是も御同心。然而九鬼右馬允大船を飾立、のぼりさし物、幕打廻し、湊浦之武者舟、是又兵具を以て、我手々をかざり、又堺南北として御座舟事も生便敷、唐物其

準備の効用、觀面と織田側の記事

員を集てかざり、進上物を我不劣と持參、無際限。堺南北之僧俗男女、此時信長公を拜み奉らんと結構に仕立候て、には、燒物ふんとして、衣香撥當四方に薰じ、群集候し也。九鬼大船へ只御一人めされ、御覽有之……九鬼右馬允被召寄黃金二十枚並御服十、菱喰折二行拜領、其上千人づ、御扶持被仰付、並瀧川左近大船白舟上乘仕候。犬飼助三、渡邊佐内、伊藤孫太夫三人に黃金六枚御服相添被下頂戴。(信長公記)

是皆な信長が、水軍を獎勵したる手段と見る可きである。而して此の如き準備の効用は、觀面に現はれ來た。

十一月六日(天正六年)西國舟六百餘艘木津表へ乗出し候。九鬼右馬允乘向候へば取籠、十一月六日辰刻(午前八時)南へ向て、午刻(正午)迄海上に而舟軍有、初は九鬼支合候事、難成見え候。六艘之大船に大鐵炮餘多在之、敵船を間近く寄付、大將軍と覺しきの舟を大鐵炮を以て打崩候へば、是に恐れて、中々不寄付、數百艘を、木津浦へ追上、見物之者共、九鬼右馬允手柄成と感せぬはなかり

けり。〔信長公記〕

毛利方の
記事

要するに毛利の水軍は、最初は随分手剛かつたが、九鬼の爲めに、遂に散々に打ち敗られたと云ふ事だ。之に反し、毛利方には、又た左の如き記事がある。

天正六年、從信長被仰付に依て、九鬼大隅守嘉隆、大船數十艘を率ゐて、伊勢より熊野の浦に出で、雜賀の賊船と相戦ひ、嘉隆得勝利、敵船三十餘艘乗取、夫より泉州堺の浦に著け、大坂往來の船路を塞ぐ。殊に大船二艘、大坂川口に掛置、此船を白船黒船と名付、矢倉を揚、城の如くに構へ、紀州熊野の侍、高島と申す者を、船大將に仕り、數百の人數にて、木津川の口に懸置候に付、大坂城中に西國よりの通路不相成。〔吉田物語〕

織田氏の
記實と相
違せり

以上は、大體に於て、織田側の云ふ所と相違ない。但だ以下に至りて、其の記實頗る相違がある。

彌兵糧無之、城兵難儀候に付、又兵糧の事、上人（本願寺顯如）より被申越候。就夫警固衆不殘被差上候。浦兵部少輔宗勝を總都合の見合に被仰付、各一同に罷

上り候處に、彼樓船に大筒數多仕懸申候故、近所へ參り見合せ候事も不相成候。各談合に、如此いたづらに罷居數日を送り候もいかゞに候間、無二無三に押懸取可申候。汐合時分の儀は、宗勝見合せられ、其上下次第に仕懸可申と談合一決仕候。左候て宗勝汐合時分見合せ相圖仕候と齊しく、各我先にと乗かけ候。總の船より村上彈正乗船、半たき先へ乗付候。樓船の者共、大筒小筒、弓にて透もなく、防ぎ候へ共、此方の警固衆少もひかへずして、取梶の方より乗込申候へば、船を大人數して、ふみ返し候に付、敵共みな海へ飛込申候を、手より〱に首を取、數百人打果し得勝利候。宗勝は不及申、警固衆いづれも大手柄仕候。上人光佐（顯如）よりも宗勝方へ、手柄を感じ書狀差越申候。中國勢於兩度、手柄は、兵糧を城中へ籠候て歸帆申候事。〔吉田物語〕

此れでは勝利は、全く毛利側に歸して居る。

斯く双方共に勝利を云ひ募るに於ては、五分〱の勝利と云ふ可きが、公平であらう。然も織田氏の水軍が、短日月に、爾く成長したのは、畢竟信長の努力、獎勵

五分〱の
勝利が
公平

の効と云はねばなるまい。

九鬼嘉隆の戦功

志摩鳥羽
と九鬼家

鳥羽○志の城主原監物、男子無く女子壹人有りければ、右馬允嘉隆○九鬼思ふやう兎角、田城○志郡は山路にて粮乏しく自立す可き地所に非ず、鳥羽は船著にて兵粮運送も善く繁榮の地なれば、何卒して手に入れんと思ふ所に、監物息女一人にて男息なき故に縁を結び、二男長門の守を鳥羽の家督となす、鳥羽は則ち隠居す後、鳥羽の在宅をシツラヒ右馬允共に移る、憊る處に大坂には御門徒御房寺○本願とて有り、其手に屬さし西國の國々より年貢を納取り、中々武家にも劣らざる威を振ふ、加之武家をサミして信長公にも隨はず、公彼を憎み給ふて大坂を討落さんと三年迄攻給へ共、附屬の檀那約を堅くして助力して落ちず、公も安からぬ者哉と怒り給ふ時節、右馬允申上げるは、兎角今の體にては落城も難し、子細は西國より強愚蒙昧の檀那共、兵粮米を船にて運送する故と見えたり、我等に被仰付は早速利を得ん、其手段には堺泉○和口にて兵粮を差留、武士の道を知らざる凡下の族攻ずとも落さんば安かる可しと申す、信長公此事感心まじ々々て、右馬允に被仰付候により斯くて日本丸と云ふ船に乗り、石火矢を仕掛け今や々々と相待事、日數積り五十餘日、西國には此事風

九鬼右馬
允水軍を
献策す

信長堺浦
に軍艦を
覽て感賞す

鐵の大船

開し船軍の用意を成し、船六百餘艘を催し程無く追て掛り、日本丸を目掛け石火矢棒火矢を打掛け騒げども、右馬允少しも騒かずして敵に飽まで攻させける、敵船間近くなれば彼八方の石火矢を仕掛け一度にハツと放せば、山川も動揺し海水逆水す、敵周章フタメキ逃廻るを追懸け々々々討取り、賊船不叶散々に敗亡す、又此刻大船數艘押廻し向ひ候所に、紀州雜賀浦々々より、賊船五百艘許り乘懸攻る時、鐵砲を打懸け、暫の間に敵船三十餘艘を乗り取り、一揆悉く追拂て泉州堺の浦に著船す、其後信長公大船小船の軍船の體を可有御覽由に依り、堺浦にて御見物、則ち御目に掛くる、御感斜ならず、即ち御褒美として、旨酒珍肴黄金拾兩被下之、同時に西國より門跡加勢の船堺浦へ押寄る所、兵船六百餘艘悉く追拂ひ、大坂御房兵粮詰に逢て偏に扱と相成るに付、大坂を渡し京都へ逃げ、信長公より京の六條にて門跡屋敷を渡し給ふ、今六條本願寺門跡是なり、右の賞として志州七島賀○浦、相差、國府(並に答志郡)甲並攝洲野田福島に於て新地七千石を拜領す、其後志州鳥羽に築城同時に攝洲花熊八郡部落城の砌川口より攻入り、首十三並生捕數多仕り候時、信雄公より御感狀を下さる、〔藩鑑引九鬼家由來記、志摩軍記〕

○七月二十日○天正六年 堺浦へ近日伊勢より大船調付了、人數五千程來る横へ七間、堅へ十二三間も有之、鐵の船也、鐵砲通らぬ用意、事々敷儀也、大坂へ取寄通路止む可き用と、云々〔多聞院日記略〕

〔九五〕 高山右近

村重の羽翼を殺ぐ

信長は先づ、荒木村重の羽翼を殺ぐ可く企てた。村重の勢力は、攝州より播州に蟠つた。其の重鎮の一は、高槻城主高山右近で、他は茨木城代中川清秀であつた。信長は決して武を驢す漢ではなかつた。戦争の爲めに戦争を爲す興味は、信長には露程もなかつた。

信長自ら出馬

十一月(天正六年)九日には、信長は自から出馬し、山崎に次した。十日には瀧川、明智、丹羽、蜂屋、氏家、伊賀、稻葉等を、茨木に向はしめ、信忠、信雄、信孝の三子、及び不破、前田、佐々原、金森、日根野兄弟を、高槻に向はしめた。而して信長は、天野山に本營を構へた。

信長の伴天連使用

信長は高山右近が、耶蘇教徒なるを知つて、彼の心を翻へすには、宗門の力を以てするに若くはなしとし、直ちに伴天連を使用した。

然而高槻之城主高山右近たいうす門徒に候。信長公被廻御案、伴天連を被召

寄、此時高山御忠節仕候様に可致才覺さ候は、伴天連門家何方に建立候共不苦。若御請不申候は、宗門を可被成御斷絶之趣、被仰出、則伴天連御請申、佐久間右衛門、羽柴筑前、宮内卿法印、大津傳十郎、同道申、高槻へ罷越色々教訓仕候。勿論高山人質雖出置、小鳥を殺大鳥助、佛法(切支丹の事也)可繁昌之旨相存知、此上者高槻之城進上申、高山は伴天連沙彌之由御請申候。御祝著不斜。〔信

長公記〕

高槻城主高山右近の開城

高山は荒木の幕下にて、既に荒木には、人質をも出し置いたのぢや。而も耶蘇教禁斷の命令が、彼の去就によりて、下るか、下らぬかの危機なれば、所謂小鳥を殺して、大鳥を助くる爲めに、城を致して、自から伴天連の沙彌たらんと、申し出でたのだ。此事に就ては、耶蘇教師側の觀察も、亦た一瞥するの價值がある。

荒木は信長を滅す可く、九國の領主山口の君主(輝元)と同盟した。而して高山右近、及び其父飛騨守に、高槻城を、信長に渡さざる可く誓はしめた。彼等は信徒である故に、佛神に因て誓を立つる代りに、子女を人質とした。

『日本西教史』の記事

信長に從ふは當然

信長は能く右近が全世界の珍寶よりも耶蘇教を大切と思ふ者であることを熟知した。故に信長は、若し此城を與へざるに於ては、宣教師を悉く屠戮し、耶蘇教を全滅せしむ可しと威嚇し、其の決答を促がした。此に於て右近は、師父オルガンチノに書を寄せて、其の誨を乞うた。師父は上帝に祈る數回の後、左の意味の返答をした。曰く、荒木は信長の臣ではない乎、臣が君に反くは大罪だ。信長は荒木の主人であり、又た卿の主人である。卿が信長に從ふは、當然の事である。

師父に努力を頼む

信長は、此の内輪の評議を知らず、師父を招いて、開城の爲めに努力を求めた。師父は信長に向て、高山に答へたる所を語り、若し城中に入るを容し給はば、自から高山に面して、説諭す可しと請うた。而して信長の許可を得て、入城して商議したが、高山の母、妻は、二質子の身上を掛念し、遂に其の要領を得ずして、師父は還つた。

師父と高山

然も高山は、師父の後を追うて城を出で、世を捨て、髪を削り、師父の徒弟となりて、神に事へ、餘生を送るに於ては、信長も耶蘇教に害を加へず、荒木も吾に

山一飛驒守と荒木

被らしむるに、反者の罪を以てせざる可しと云うた。師父は大いに悦び、明日相伴うて信長に見えたが、信長は高山の隱遁を許さず、髪を長して吾に事へよと云うた。父の飛驒守は、城を出で、荒木の足下に投じ、二人の質子の爲めに命を請うた。荒木も思案したが、右近も城を出でたるのみにて、必ずしも敵に降つたと云ふ譯ではなく、又た高山の親族、朋友も、己れの軍中に少からざれば、質子を虐待せば、必ず異變を生せんことを恐れ、其の質子を飛驒守に返した。〔日本西教史〕

信長郡山へ移陣

信長は十一月十五日に、天野山より郡山へ陣を移した。

十一月十六日、高山右近郡山へ致祇候、御禮申上候處、被成御祝著、御膚に召せられ候御小袖を祖せられて被下、並埴原新右衛門進上之御秘藏之御馬、是又拜領忝次第也。今度之爲御褒美、播州之内芥川郡被仰付、彌被勵御忠節、可然之旨、御使衆被申訖。〔信長公記〕

高山の一生は耶蘇教と始終

如何に信長が、高槻城の開城を満足したかは、此を以ても知る可きだ。然も高山の一生は、恒に耶蘇教と始終した。彼は何よりも、日本の切支丹大名として、其名を日本の歴史に留めた。然も其名は醜名でなく、悪名でなく、洵に芳名であつた。彼は其の所信に忠なる點に於ては、日本男兒の誇であつた。

【九六】 伊丹籠城

中川清秀の開城

中川清秀も、亦た當時の猛將であつた。彼は糠塚の戦に於て、和田惟政を討ち取つた勇士である。彼は元來荒木の謀反に、中心より賛成せざりしも、行掛の爲めに、石田伊豫、渡邊勘太夫と與に、茨木城に楯て籠つたのだ。然も古田、福富等の才覺にて、十一月(天正六年)廿四日、石田、渡邊等を追出し、開城した。『攝州表、過半屬御存分、上下満足不可過之。』(信長公記)とは、全く其通りぢや。

信長及び一門の優待

信長は中川に黄金三十枚、其の家臣三人に黄金六枚、衣服等を添へて與へ、又た高山右近にも、黄金二十枚、其の家臣二人に黄金四枚と、衣服を添へて與へた。而して十一月廿七日、中川が古池田に抵りて、信長に謁見するや、太刀拵の腰物に、馬具と與に馬を賜はり、信忠よりは長光の腰物と馬、信雄よりは馬、信孝よりは馬、信長の姪織田信澄よりは、腰物等を與へられた。亦た以て如何に信長、及び其の一門が、中川を優待したか、判知る。而して此の優待によりて、如何に織田氏の畿内に於ける位置が、容易でなかつたことが判知る。

一方に懷柔一方に威嚇

信長は一方に懷柔して、他方には威嚇した。彼の放火、殘伐の手段は、甲山より須磨、一谷迄、隈なく行はれた。百姓が無斷にて甲山へ小屋上りしたとて、切捨てられた。兵糧は勝手に奪掠せられた。『兵庫へ打入、僧俗男女無嫌、投伐に切殺、堂塔伽藍、佛像經卷不殘、一字一時に雲上の烟となし、須磨、一谷迄相働放火候へき。』(信長公記)此れは十一月の末より、十二月の始の事であつた。

伊丹城の

十二月八日には、伊丹城(有岡城)を總攻撃した。午後四時より砲撃を開始し、同六

總攻撃と持久策

時より城壁に肉薄し、十時迄攻めたれども、城兵能く防ぎ、打手大將の一人、萬見仙千代は討死した。此に於て信長は持久の策を講じ、所々に附城を設け、諸將をして之を守らしめた。羽柴秀吉は、援將佐久間、明智、筒井等と與に、播州に赴いた。蓋し此期を利用して、三木城を攻めんが爲めであつた。又た毛利氏の上京を、扼せん爲めであつた。而して明智光秀は、丹波に赴き、波多野秀治を攻めた。

信長安土に還る

蓋し攝津の荒木、丹波の波多野、播州の別所は、何れも大阪の本願寺と氣息を通じ、毛利氏と連絡を取りて、織田氏西下の勢を、支持しつゝあるが爲めである。而して信長は、十二月廿一日には、古池田より京都に還り、同廿五日には、安土に還つた。荒木村重は、心細くも、依然伊丹城を籠守した。

村重尼崎に落去

記事の便宜の爲めに、尙ほ荒木に關する事を、此項に掲ぐ可し。扱も荒木は、天正六年十月以來、伊丹城に籠城したが、天正七年八月よりして、忠信が堀久太郎と與に、攝州古屋野に在陣して、相對峙しつゝある際、

九月二日の夜、荒木攝津守、五、六人召列、伊丹(有岡城)を忍出、尼崎へ移候。(信長公

記)

とある通り、彼は尼崎に落ち行いた。細川藤孝の狂歌に、

君に引く荒木ぞ弓の筈ちがひ射るに射られぬ有岡の城

とあつた。

伊丹城裸城となる

荒木は何故に其の本城を逃げ出したる乎。其の籠城の到底長きに耐ふる能はざるを、豫知したが爲めだ。果然十月十五日には、瀧川一益の調略にて、籠城一年に互れる伊丹城は、中西新八郎、其他足輕、大將の内應にて、裸城となり。岸の砦に立て籠りたる渡邊勘太夫、雜賀の徒と與に、鷓塚に立て籠りたる野村丹後守、何れも其の降服を容されず、生害せしめられ、愈々手緊しく攻圍せられた。

村重恃む可らざるを恃む

元來荒木は、恃む可らざるを恃んだのだ。彼は信長の來路を、高槻、茨木にて、高山中川の徒が、當分は喰ひ止めるものと思つた。然るに信長は、一個月の間に、之を下して伊丹城に迫つた。彼は毛利の水軍が、舳艫相啣み、天正七年正月十五日頃には、輝元は西ノ宮附近に上陸し、吉川、小早川、宇喜多等、尼崎に在陣し、雜賀、大阪

頼む所の
輝元來ら
ず

の者共を先手として、双方より信長を攻撃す可きものと豫期した。此れは荒木の空想でなく、毛利家より誓紙もて、斯く申し入れたのだ。〔信長公記〕然も春は來れども、頼む所の輝元は來らず、却て其の三月（天正七年）には、信長、信忠來り、伊丹四方に堀を鑿ち、塀柵を二重、三重に植てさせ、城兵をして全く籠鳥同様たらしめた。

當座の甘
言にて
中を慰撫

されば屢々中國に使を出し、毛利氏の來援を催促するも、七月には打立たんと云ひ、八月には、事故ありて延引すと云ふ。斯く當事あてごとが外れては、今は詮方なく、荒木は唯だ當座の甘言もて、城中の人を慰撫し、愈々已むなくば、城中三千の人數を以て、老若妻子を引き具して、尼崎に奔らむ。若し此事能はずば、尼崎、花隈を進上して、一命を乞はんと云うた。

在城面々
の落膽

然も彼は、單り其の從者五六人を具して、尼崎に遁げ出したのである。在城面々の落膽知る可しだ。況んや十月十五日の足輕大將等の謀反以來、裸城となつたをやだ。城中の人氣が腐りたるも、當然ではない乎。

【九七】 荒木謀反の落著

伊丹城の
者共は妻
子を賣る

荒木は毛利に賣られた、伊丹城中の者は、荒木に賣られた。村重が九月二日（天正七年）の夜、伊丹城を忍び出で、尼崎に赴いた以來、伊丹城は全く見殺の姿となつた。而して伊丹城の者共は、又た其の妻子を賣つた。其の顛末は左の如しだ。

十一月十九日（天正七年）荒木久左衛門其外歴々（一）の者共、妻子爲人質、伊丹に殘置、尼崎へ罷越、荒木（村重）に異見申、尼崎、花隈進上仕、其上各之妻子助可申之、御請申究、何れも尼崎へ越申也。〔信長公記〕

城中の荒木久左衛門等は、百計盡きて、城を開き、其の妻子を人質とし、村重と協議の上、尼崎、花隈を差出す可し。村重若し聞入れざるに於ては、我等先手となりて、即時に乗取る可しとの約束にて、尼崎に赴いた。而して伊丹城は織田信澄の占守する所となつた。

百計盡き
て城將尼
崎に赴く

久左衛門等
の逃亡
所と人質
の質

久左衛門等は村重に説かんとしたるも、村重の爲めに拒まれ、尼崎城に入るを得ず。さりとて此儘伊丹城に還る可き面目もなく、何れも逃亡した。(總見記)されば信長は、其の不信を咎め、其の卑劣を憤り、愈々其の人質を嚴科に處す可く命を令した。

今度尼崎花隅渡進上不申、歴々の者共之妻子兄弟を捨、我身一人宛助之由、前代未聞之仕立也。(信長公記)

此れは尤の非難ぢや。如何にも日本武士として、卑怯千萬ぢや。此の人質警固の爲めに、伊丹城に留め置かれたる、三人の中の一人池田和泉は、

露の身の消ても心残り行くなにとかならんみどり子の末

との一首を殘し、鐵砲に薬を込め、自から頭を打貫いて死んだ。

卑怯の男
子と剛腸
の婦人

世中に命程つれなき物なし。昨日迄は、口言をいはれし歴々の侍共、妻子兄弟捨置、我身一人づゝ助るの由申越、此上はとてものがれぬ道なれば、導師を馮申さんとて、思へに寺への僧を供養し、珠數、經帷申請、戒をたもち、御布

施には金銀を被參らせ候人も有、著たる衣裳を參らす者も有。古しへの綾羅錦繡よりも、今の經帷、難有世に有し時は、さく忌々敷經帷に、戒名さづかり、頼母敷思はれ候。千年萬年と契りし婦妻親子兄弟之間の中をも去離、思はずも都にて諸人に恥をさらす事、此上者更に荒木をもうらみず、先世の因果淺間敷と許。……(信長公記)

酷烈なる
惨刑を
仕掛に
行はる

世の中は不増、不減ぢや。一方に卑怯なる男子あれば、他方には剛腸なる婦人あり。但だ信長が、如何に佞人懲らしめの爲めとは申せ、酷烈なる惨刑を大仕掛に執行したのは、如何に時代の風氣とは云へ、彼の忍人たることを暴露して、到底辯解が能きぬ。彼は尼崎附近の七松にて、十二月十三日午前八時、百二十二人の婦女を磔殺した。

歴々の上臈達、衣装美々敷出立、叶はぬ道をさと、うつくしき女房達並居たるを、さもあらけなき武士共が請取、其母親にいだかせて引上へ張付に懸、鐵砲を以てひしと打殺し、鎧長刀を以て差殺し、害せられ、百廿二人之女

房、一度に悲しみ叫聲、天にも響許にて、見る人目もくれ、心も消て、かんない押へ難し、是を見る人は、廿日、卅日之間は、其面影身に添て、忘やらざる由にて候也。〔信長公記〕

此他に尙も慘刑

此他に召仕の女三百八十八人、歴々の女房に付け置れたる若黨百二十四人、合計五百十餘人は、四個の家に取籠めつゝ、乾草を積み、之を焼殺した。而して十二月十六日午前八時伊丹城人質の重なる男女を、車一輛に二人宛乗せ、洛中を引き廻はし、一番より八番に及び、外に三輛の車に、子供七八人宛乗せ、何れも六條河原にて斬首した。

男らしからざる男と男らしき女

女房達何れも膚には、經帷、上には色能いろよき小袖うつくしく出立、歴々之女房衆にてましませば、のがれぬ道をさと、少も取まざれず神妙也。たしと申すは聞え有美人也、古しへは、かりにも人にまみゆる事無を、時世に隨ふならひとて、さもあらけなき雜色ざしき共之手にはたり、小肘つかんで、車に引乗らる。最後之時も、彼たしと申車より下様に、帯しめ直し、髪高くと結直し、小袖之ゑり押

美人臨死好儀容

退て、尋常に切られ候。是を見るより、何れも最後よかりけり。〔信長公記〕

男らしからざる男の傍には、又た此の如き男らしき女もあつた。所謂『美人臨死好儀容』とは、此事であらう。且つ又た、

久左衛門荒木むすこ十四歳之自念じねん伊丹安太夫むすこ八歳の悴、二人の者おとなしく、最後所は爰かと申候て、敷皮に直り、頸拔上て切らるゝを、貴賤ほめずと云ふ者なし。栴檀者二葉よりしてかんばんしく、荒木一人之所爲にて、一門親類上下の數を知らずしてこの別れ、血の涙を流す、諸人の恨おそろしやと、舌を卷ぬ者もなし。〔信長公記〕

荒木の謀反と悲劇の打出

荒木の謀反は、實に此の如き悲劇を打出した。而して彼は爾後尼崎より、花隈城に轉じ、其の支ふ可らざるを見るや、兵庫より乗船して、備後尾道に赴き、毛利氏の寓公となつた。

荒木村重の晩年

秀吉の世と爲つて、彼が秀吉と善かりし爲め、其の招く所となり、堺浦に居り、攝州菟原を其の所領となし、喫茶三昧に餘生を送り、天正十四年に逝いた。一時織

田氏の天下に、波瀾を捲き起さしめたる、彼の晩年は、極めて淋しくあつた。實に人の一生程、前知せられぬものはない。

を連ね、殆んど城へ一步も近寄る能はざらしめた。加ふるに播磨の沿海には、兵船七百餘艘を游弋せしめ、防備極めて嚴重であつた。されば流石の秀吉も、來ても、二階から目薬で、城兵に援助を與ふるを得ず。唯だ夜毎に篝火かざりびを三日月山に焚き、景氣を附けて居た。

上月城と其の地勢と

上月城は、播磨佐用郡上月村にあり。備前、播磨、美作の三國に接する要害で、姫路より山陰に入る咽喉である。東は市川を控へ、北は市川の支流を隔て、上月村に對し、西北は太平山、西南は狼山(或は大龜山と云ふ)に據り、東面も亦た、高倉山脈東北より來りて、市川の左岸に盡く。其の通路は、唯だ市川に沿ふ一筋道のみである。攻むるにも骨が折れるが、後詰には猶更ら骨が折れる。

信長の援兵京都を發す

信長は秀吉の報に接して、愈々事の重大になつたとを曉つた。彼は自から出馬せんとした。されど佐久間、瀧川、蜂屋、明智の徒皆な、『播州之儀は、嶮難を拘、隔節所、要害を丈夫に構、居陣之由承候間、何れも罷立、彼様子見計候て可申上候。』〔信長公記〕と諫止した。信長も亦た之に従ひ、瀧川、明智、丹羽、及び筒井順慶、武藤舜秀

等をして、赴き援けしめた。兵凡そ二萬。彼等は四月の末に京都を發し、五月上旬に高倉山に到着した。

信長更に
發せしむ

信長は更らに上月城後詰軍の背後の心配なき様、其子信忠をして、五月朔日、三木城牽掣の爲めに出發せしめた。而して五月十三日には自から發程せんとしたが、大雨三晝夜、洪水氾濫したるが爲めに、餘儀なく中止した。

兩軍の對
峙と毛利
勢の攻圍
努力

兩軍對峙の際、毛利氏の部將杉原盛重は、部下の士若干を簡拔して、高倉山の敵陣を夜襲した。而して更らに臺無砲と稱する、西洋舶來の大砲もて、上月城の城樓を破壊した。吉川元春は、山路を潛行し、織田勢の背面を偵察せしめ、其の千木附近、飾磨附近に敵兵の多數屯集するを知り、信長の未だ來援せざるに先ち、夜襲を試みんとした。されど隆景は之を可かず、主力を集めて、上月城を陥る可しと爲し、愈々攻圍に努力した。

織田勢の
曠日彌久
と秀吉の
上京

織田勢は曠日彌久、何の爲す所もなかつた、其實は爲す可き様なかつたのだ。而して來援の諸將、概ね秀吉と資望相ひ伯仲の間にありて、其の統一を保つこと

頗る難く、依りて秀吉は六月十六日、竊かに上洛して、親しく信長に事情を具申し、其の命令を請うた。

寅六月十六日、羽柴筑前守、播州より罷上一く、被得御誼之處、謀略不相調、張陣候ても、無曲候間、先此陣引拂、神吉、志方へ押寄攻破、其上三木別所構取詰可

然之旨被仰出。〔信長公記〕

上月城放
棄と別所
一黨討平
の決定

乃ち信長は、高倉山の兵を引き揚げ、上月城を敵に放棄し、信忠の下に、力を一にして、別所一黨を討平す可しとの、決定を與へたのである。秀吉は還りて、加古川に於て、之を信忠に傳へ、高倉山に於て、諸將に傳へた。

織田毛利
兩軍一快
戰の機會

然も織田、毛利の兩軍は、此際に於て、一快戰の機會を得た。六月廿一日の拂曉、宇喜多隊の一將は、伏兵を市川の右岸に設け、織田勢の馬に飲ふ者を射撃した。秀吉の兵は、之を救ふ可く應撃した。吉川隊三百人、宇喜多隊を助けた。此に於て秀吉の兵二千、更らに出で、之を圍んだ。此に於て吉川隊、小早川隊も、漸次に繰り出し、毛利勢は五千に上り、織田勢の上月村に現はれ來るもの、約二萬に及び、愈

よ大戰となつた。毛利勢は敵の大軍を見て、且つ戦ひ且つ退いたが、吉川隊三千人、又た來りて之を助け、更らに吉川氏の兄弟三人、元長、元氏、經言(後に廣家)、一萬餘人を率ゐて進撃した。

戦局一變
と兩軍の
激戦

此に於て戦局一變し、織田勢は中村一氏、五千人を率ゐて、其の第一線に、小寺孝高三千人を率ゐて、第二線に、瀧川、明智、丹羽等は豫備隊として、互ひに市川を隔て、射撃を交換したが、經言は流を亂して川を涉り、元長、元氏、杉原、南條等之に繼ぎ、一氏の兵は爲めに退却を餘儀なくした。孝高之を救はんとしたが、元長は其の兵に膝折敷て、弓銃を亂射せしめ、杉原盛重等二千餘人、突貫して之に逼り、遂ひに秀吉の隊を撃却せしむる、三四町に及んだ。是に於て秀吉の本隊、及び筒井隊は、馳せ來りて之を救うた。但だ小早川本隊、及び吉川元春の麾下は、城を圍んで動かさず、而して織田方の荒木隊、毛利方の宇喜多の本隊も、傍觀の態度を取つた。

死傷相當

吉川元長は突撃して、高倉山の腰部に逼つた。天野隆重は、織田勢の、或は其の退

五分五分
の勝負

路を斷たんとを虞れ、兵三百を以て、一高地を占領し、後方を監視した。秀吉も亦た小早川隊の動かざるを見て、我が背後を斷たんとを慮り、急に兵を收めた。毛利勢亦た尾撃せず、引き上げた。此の戦争は死傷相當、五分五分の勝負であつた。

【九〇】 上月城の陥落

上月城放棄
と織田側
の異論

上月城放棄は、織田側に於ても、頗る異論があつたらしい。當時秀吉の軍に従ひ、小寺官兵衛と與に、左右の手とも云ふ可き、竹中半兵衛重治の子、重門の著はしたる『豊鑑』は、比較的信憑す可きであるが、佐久間、瀧川等の諸將が秀吉の功を妬み、信長の出征を止め、信長に勧め、秀吉をして軍を退かしめたと記して居る。而して秀吉も、頻りに之を遺憾とし、

『豊鑑』の

今度上月表へ旗を寄せさせ給ひ、毛利家の根を絶ちて亡失、中國筑紫までも

所記

信長卿の御心の儘なるべし。秀吉は數まへられぬ身なれば、とまれかくまれ、鹿之助(山中幸盛)をすてさせ給ひしは、西國の果迄も御名を流し口惜さ。〔豐鑑〕と信忠に訴へたと記して居る。併し大體より見れば、信長の命令は、機宜に適したもので、秀吉も其の中心は、之に賛成したであらう。信長の兵法は、勝ち易きに勝つのだ。強き者は、相手にせぬのだ。

秀吉の忍び難き所

然も上月城を打捨て、尼子勝久、山中幸盛を見殺にするは、秀吉の忍び難き所であつた。されば彼は、龜井茲矩を城中に遣はし、突出して、織田軍に合す可きを慫慂した。されど幸盛等は、其の不可能なるを以て、之に従はなかつた。

秀吉書寫山へ引揚ぐ

天正六年六月二十六日、秀吉は瀧川、明智、丹羽等の兵を、姑らく三日月山に駐め、毛利勢の追撃に備へ、荒木村重等と書寫山へ引き揚げた。而して直ちに信長の命令通りに、翌日より神吉城に取り詰めた。

上月城の開城と勝久の自殺

扱も上月城は、援兵の引拂ひと興に、彌々絶望となつた。後詰も無く、兵糧は竭く、最早百計盡きたれば、勝久の一死を以て、城中の人命を償はんことを申し出た。

元春、隆景へ、山中鹿之助より使を出して、此度の企て全く勝久の所存にあらず、神西三郎左衛門所爲にて御座候間、彼者に切腹可申付候。勝久(尼子)助四郎(尼子)以下城兵御助被下候様にと、再三達て佗言申候へ共、兩川殿曾て御分別被成ず。に付、鹿之助、勝久へ申候は、再三申断候へ共、分別にて無之。此上は不_レ及力御切腹可被成候。某も御供可仕候へ共、無面目降人に罷出、元春に近付刺違_レ御死後の御弔に可仕と申しければ、勝久聞かれ、我等事、出家と成て居候處に、各心入を以て、一度尼子と名乗、大將の號を汚す事、生前の本懐不_レ過之、唯今如何様に成果様とても、智謀の不足にあらず、偏に家運の盡たる所なり。自分には、命を全くし、時節を以て、揚義兵、尼子家を再興の志、何よりの忠勤なるべしと云ひ、七月三日勝久切腹なり。〔吉田物語〕

勝久は二十六歳にて死した。上月城は七十餘日の籠城にて、陥落した。此れにて尼子家は全く断絶した。毛利氏と、尼子氏の鎬を削りたるも、随分久しいものであつた。大永三年、元就が尼子經久と手を切つて以來、天正六年迄、五十六年に互

毛利尼子の争鬪は五十六年